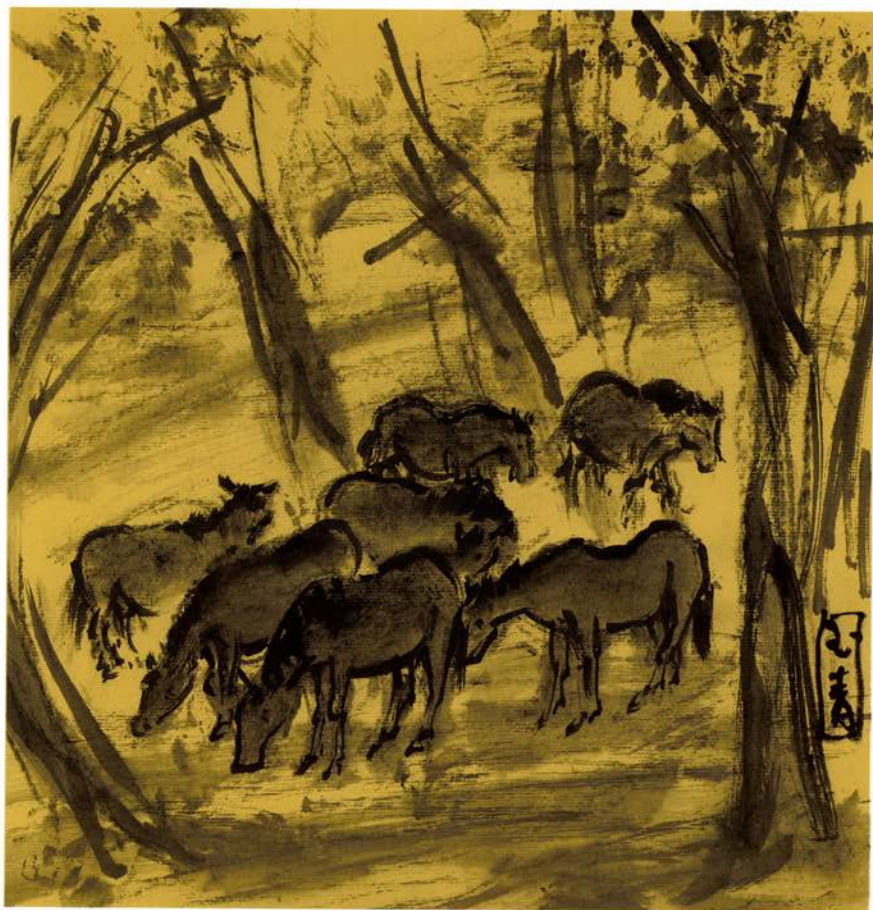


川柳塔



No. 845

平成九年度 六賞発表

十月号

第3回 川柳塔まつり

＜平成9年度同人総会＞

と き 10月3日（金）午前10時から

ところ ホテル・アウィーナ大阪（なにわ会館）
（近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車）

議 事 平成8年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成9年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式＞

路郎賞・川柳塔賞・澎湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を同日午後1時半から行います。

＜記念句会＞

各賞表彰式に続いて開会。午後4時半終了予定

兼 題	「手さぐり」	西宮北口川柳会	西 口	いわゑ 選
	「ゆっくり」	三幸川柳教室	三 宅	保 州 選
	「バイパス」	赤碓川柳会	新 家	完 司 選
	「曲がる」	大原川柳社	小 林	妻 子 選
	「海 岸」	あおば川柳会	菱 田	満 秋 選
	「行 方」	川柳塔社主幹	橘 高	薫 風 選

◎各題2句 出句締切午後1時半

会 費 1000円（記念品贈呈）

＜懇親会＞

と き 同日午後5時から同会場で開催

会 費 6000円 宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪
◎懇親会および宿泊は、人数に制限がありますので、
氏名を明記して川柳塔社事務所へハガキでお申込
みください。

主 催 川 柳 塔 社

川柳塔まつりへ

ご参加を

橘 高 薫 風

今日現在訪中の橋本龍太郎首相は、帰国後自民党総裁に再選されて、党の役員人事や内閣改造に取り組むことになろうが、派閥の均衡に乗っかる結果は目に見えている。改革は難しである。

川柳塔社も、主幹と理事長を男女の両輪で担当し活性化しようとした展望は、小出智子さんの病臥急逝で何一つ実績を残すことなく終ってしまった。

社会党の村山さんを首相に据え、さががけとも組んだ驚天動地の手法で政権を手繰り寄せた党は、ひらりと表裏を返したかと思うと、過日衆院では過半数を占めるまでになる。

政治の世界ではない川柳塔社は？

わたくしは来年十月までの一年間に腹を据えて

もう一度考え直さなければならぬ。

大震災で体験した神戸の更地のような状態にして、将来の機構を組み立てたい。

一つは若い世代の自覚（責任感と努力）、一つは地方役員の常任理事会への参画を軌道に乗せたい。

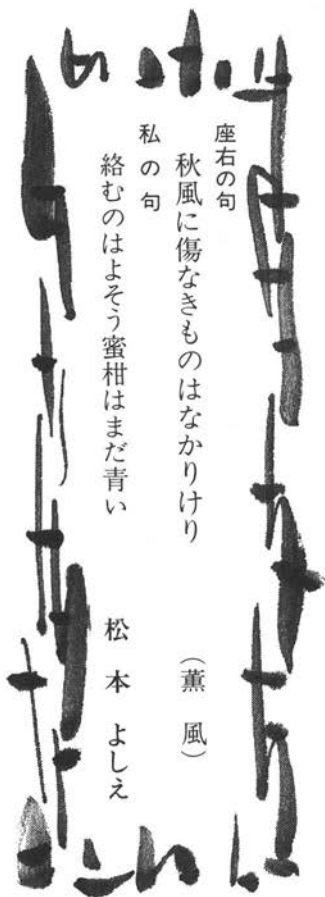
去る八月二日、川柳塔みちのく十周年大会に参加した大阪からの十九人は、大会とねぶた祭りと観光にそれぞれ感銘を深くした。

工藤甲吉さんのお姿に接することの出来なかったのは残念であったが、句会、編集その他スタッフの充実ぶりは、主幹波多野五楽庵さん、副主幹斉藤劭さんのお人柄にもよるが、まことに見事なまとまりを両三日のうちに理解することが出来た。

このような会が、和歌山に、山陽山陰に、東北陸に、また四国九州にと存在している。

「三年先、十年先のことを僕は常に考えている」というのが口癖であった路郎先生を思いながら、地方の積極的な意見を頂くようお願いする。

十月三日（金）の川柳塔まつりへのご参加をお待ちしています。



座右の句

秋風に傷なきものはなかりけり

(薫風)

私の句

絡むのはよそう蜜柑はまだ青い

松本 よしえ

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 川柳塔まつりへご参加を……

お好み焼と川柳……

橘高 薫風……(1)
小島 蘭幸……(2)

川柳塔(同人吟)……

橘高 薫風選……(4)

自選集……

東野 大八……(50)
清 博美……(52)

川柳の群像 小出智子……

西田柳宏子選……(56)

古川柳歳時記『神無月』……

水煙抄……

路郎 賞・川柳塔賞・渺湖賞
茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞……(78)

平成九年度

秀句鑑賞「同人吟」……

同人吟

水煙抄……

林 瑞枝……(54)
田中 輝子……(94)

お好み焼と川柳

小島 蘭幸



私が小学生の頃、お正月にお年玉でお好み焼を食べるといふ楽しみがあった。近所の八百屋のおばちゃん、店の一角を利用して夏

はかき氷屋、冬はお好み焼屋さんになるのだ。店は大きな鉄板をお客さんがぐるりと囲む形になっており、四人座るともつ満席ということになる。ここへお年玉を持った私が、一人で食べに行くのだ。「お好み焼へソバ入れて」と注文すると、おばちゃんはまるで手品のようにはりケン粉をだし汁で溶いた種をおたまで掬い、鉄板の上にうすうすくまある皮をつくる。その上にたつぷりのキャベツ、もやし、ネギ、ソバ玉、豚肉を乗せて大きな金具のヘラでひっくり返し、押さえる。ジュツジュツジュツと音がし、いい匂がしてくると最後に白い卵を一つ割ってお好み焼の下にヒョイと入れ込んで押さえる。そしておもむろにくるりとひっくり返して一丁上がりということになるのだ。これに刷毛でたつぷりとソースを

大空のこころ	橋高薫風	(87)
渺湖抄	八木千代選	(84)
茴香の花	宮西弥生選	(88)
「店」	江口有一朗選	(90)
一路集「柿」	岩本美智子選	(90)
「かじる」	上田俊路選	(91)
初歩教室「触る」	吐田公一	(92)
エッセー 犬が怖い?	瀬戸まさよ	(95)
九月本社句会		(96)
各地柳壇(佳句地十選/高田美代子)		(100)
柳界展望		(116)
十月各地句会案内		(117)
■編集後記		(118)

座右の句

秋風の中で乞食に拝まれる
私の句

滝のように流れる雲と話す

(豆 秋)

藤井 計 光

ぬり、青ノリ、魚粉を振りかけて私の前に置いてくれる。食べる時は箸は使わず、小型の金具のヘラで適当な大きさに切りながら食べる。熱い鉄板の上でハフハフと食べるのだ。これが美味い……。これが広島風お好み焼なのだ。

一昨年の秋、三原市のある方から「お好み焼の川柳を三句作っていただけませんか」というお電話を頂いた。よく話を聞いてみると竹原のお好み焼店からの依頼で、お土産用の箱のデザインの一部に川柳を使いたい、とのことだった。

三句という事なので、先ず一句目はお好み焼のまるさをイメージしてみた。先に書いたおばちゃん、まるで手品のようなまるさである。二句目はお好み焼店の二代目の顔を思い浮かべて「頑張れよ。君ならきつと成功する筈だ」という思いを込めてみた。そして三句目はその店の配置を頭においての作。

お好み焼のまるさは愛のまるさだよ

お好み焼に命をかけている眉毛

まん中にお好み焼がある恋よ

先日、テレビで広島出身の西城秀樹がお好み焼談義をしていた。「広島風お好み焼は金具のヘラを上手に使って熱々を食べる」と、やっぱりお好み焼はハフハフハフなのだ。



橘 高 薫 風 選

弘前市 蒔 苗 果 林

ボタン穴のかがりも終えて妻の逝く(七月十一日)

花出ばな稲に妻の死告げまわる

鶴のよう亡き妻おとぎ一の美人

風鈴の一人ぼっちに夜もすがら

風呂浴びる喜寿も一人じゃ浮き草か

第三の人生一人ぼっちから

海南市 三 宅 保 州

好き好んで医者へ行ってるわけでない

そっとしておくのも治療法である

葬式に不便な家に住んでいる

目の黒いうちとは言っているけれど

落書に難しい字が書いてある

余生とは思っていない職探し

鳥取市 武 田 帆 雀

私を褒めてセールス辛からう

新札で払い歯切れの良い言葉

落下点にいつも妻が居て安堵

お一人様一パック孫と二パック

草一本生やさぬ人のご性格

どこを歩いても夫婦みたいな女です

仙台市 川 村 映 輝

海の日に林子平を回想す

北の海津軽三味線調和する

宴会の最中日本海の夕日見る

救急車ゆく老妻ではなからうか

身辺整理して死を待つことの愚かしさ

筆握る感触朝昼晩違う

生駒市 麻生 アート

賞罰なし本年とつて七十五

エメラルド メキシコの空想うべし

慣れるより術なし壁と二人はち

オーキッド妻の遺産が枯れてゆく

僕だけのシンクタンクだよ 書齋

時すでに遅し世間が見えて来た

和歌山市 木本 朱夏

津軽じよっぱり太鼓と響きあう一会

藍色に空暮れゆけばねぶた出陣

鏡絵の好漢起つべし滾るべし

身の内の鬼も応えるヤーヤドー

さすらいの足を止めたは津軽三味

ねぶた絵の美女見送れば風は秋

富山市 舟渡 杏花

悲しみを横取り葬儀屋ソツがない

ため息の出る美しい皺と会う

アルツハイマー諳んずる男の名

鍵穴に合わない鍵のひとり言

兄嫁の愁いをかい間みて以来

戯言で済まなくなってきた空気

唐津市 山口 高明

フジモリにマケジと飛ばす救助隊

ダンジリの怪我は男の勲章さ

睨めっこ檻のライオン知らん顔

女装した息子と知らずすれ違い

ケセラセラ愛のホテルの雑記帳

馴れ染めを訊けばアハアハ白寿翁

鳥取県 新家 完司

三万円のスニーカー履くすねかじり

N T T株ばくが売ったら高くなり

失楽園見てきた妻がほくそ笑む

永田町のことより酒が切れている

石ころに目玉を描けば僕の顔

来世では蛇になるのか亀になるのか

鳥取県 谷口 次男

毒グモやイグアナ好きで人ざらい

ルビー嵌め田んぼに立ったお嫁さん

年寄りがルンルン気分変な世だ

ホームルーム十四歳を考える

担保には火星の土地を利用する

人間が壊した地球雨が漏る

大和郡山市 榊原 慧心

寄せる波引く波あっていま二人

上役の灰皿にタバコねじり込む

神様に借りてる命ありのまま

親と娘で役に立たない借用書
借りものの傘がなかなか返せない
いつのまに舌も銀婚妻の味

神戸市 中村 ゆきをを

コスモスがお浄土のよう咲き乱れ
親切にしたがだんだん腹が立ち
キレやすい血筋でしょうか親も子も
ぶっそうな話をしてる中学生
炎天の上町台地僧ひとり
腰掛けて神より給いたるしじま

松原市 小池 しげお

青春が欲しくて麦藁帽を買う
妻の笛ならば踊れるなと思う
隔靴搔痒 襷は襷 帯は帯
本物を手にしてからの迷いです
できぬ子の勉強部屋を建てている
本当の答を仏さまに聞く

枚方市 海老池 洋

蜂の一針おもう日もある宮仕え
是是非非ときっぱり友の有難し
しきたりは重し 平成女鉾
同じポーズもホールドアップと万歳と
嘘でしょうでしょうと女嬉しそう
土用波ひと息つけぬ岩ひとつ

岸和田市 岩 佐 ダン吉
証文は時効それでもお母さん
酔いつぶれても軍歌だけは歌わない
核ゼロを夢の話にする総理

十四歳子守歌の日あったろう
骨っぽい男手酌の席にいる
笑わないのも凄みだらうチャップリン

香川県 山地 マツエ

花植えて老いの狭庭を弾ませる
ひっそりと恋の時効を待つ女
熟年の恋にもゆれるイヤリング
福耳が病んで補聴器手ばなせず
カツオ節けずる幸せそうな音
花時計私の影が翺びたがる

鳥取県 林 露 杖

早起きと早寝老骨暑に耐える
こぼれ種子伸びて存在感を固持
夏休み孫と習字の墨を磨る
広島を訪う孫千羽鶴を折り
サングラス外せばあどけない少女
敗戦忌軍人勅諭忘れけり

熊本市 永田 俊子
かしら右に目刺しが並ぶ終戦忌
あやとりをしながら過去を拾ってる

あやとりにある川で夫を見失い
探し物しながら自分を探してる
よろけつつ行くまだ見えぬ花畑
さよならと伝言板にあるドラマ

豊中市

田中正坊

生きているから血圧が上下する

診断を聞く判決を聞くように

ふざけるな死ぬも生きるも国の為

迷ったら静かに風の音を聞く

地図を見て行きたくなった遠い国

今日もまた無為の一日過ごしけり

京都市

山海友熙

愛という深い処にいて夫婦

夫婦とや昔ばなしを語るべし

湖がだんだん深くなる夫婦

ふる里の森から出ない夫婦とや

木の橋を渡って夫婦夫婦とや

男も火 女も水になる夫婦

寝屋川市

森

茜

呼びとめるように蜩が水を吹く

やせ我慢そろそろ助け舟を出す

入道雲むくむく蜻蛉はよお逃げ

すつと来てさつと帰っていく頑固

へくそかずらと誰がつけたかあわれなり
ふたり来て一人前のバイキング

米子市

澤田千春

ふところの駅にコスモスゆれている

疲れたら波浮の港を弾くピアノ

逆上がり未来の空は真っ青だ

大波とにらみ合ったが歯が立たぬ

人間の面でやんわり魔女がくる

一拍遅れ笑う人だがにくめない

弘前市

高橋岳水

消え失せたものを数えている夕陽

忘却という神様の思し召し

郷愁を募らせ雲は北を指す

老母の背は祈る形になり給う

生き抜いた苦渋が切株に浮ぶ

眼を病んで他人の心が見えてくる

和歌山市

福井桂香

行く夏をねぶた祭りの笛に揺れ

みちのくの風と情けの酒を酌み

十和田湖の色より深い思いやり

ガタゴトと来て象潟の合歓の花

新学期 金時芋をほおぼって

校庭に響くコーラスいわし雲

西宮市 山本義子

ねぶた山車曳く子に日本託せそう
ねぶた沸く 人情地酒いただいた
津軽の風大きくなれよりんごさん
夜行寝台つき乗るまでに瘦せとこ
山の風土産にしたいなどと言ひ
溪から川わき出たトンボまだ青い

吹田市 瀬戸 まさよ

その日だけ戦争思い出す行事
教師には指示しかない文部省
病名は言うが病院名は伏せ
淋しくてついよく喋りよく騒ぐ
雑踏と森閑これも盆休み
人はなぜ人を殺すの神に聞く

八尾市 大内朝子

最高の顔はあなたにだけ見せる
わたくしの頭の輪切り異常なし
浪曲のリズムで食べているぶどう
枕木をヒョイヒョイ飛んだ日の恋よ
しあわせの尺度をかえて生きのびる
暖色がだんだん欲しくなる余生

大阪市 田中節子

何しても絵になる人の奥深し

思いやり女心を揺さぶりぬ

温もりは心のひだに沁みてくる

ほどほどの遊び心に華が咲き

旅に出て人の出合いに夢のあり

ゴルフ焼け海焼けどうし顔と顔

吹田市 古川 喜美子

ペンギンも時には着替えてみたい服

間口一間 書店の主は元恩師

先生の免許だけなら持っている

針の穴通った話ふくれ出す

踊りの輪入ればやさしい人ばかり

真つ直ぐに歩く勇気を持っている

寝屋川市 柴田 英壬子

何も書けないお盆で静かなのに

葛藤のころよれよれ夏の部屋

喚けない涙は胸の底に落ち

パースデーの花は不屈のるりはこべ

古漬けの茄子ときゅうりの味方持つ

運が向いて来たらと思う模様替え

呉市 槇田 英詩

忽焉と逝った恩師に絶句する

旅やよし月煌々と露天風呂

さあ水だ五臓六腑よ甦れ

愛い奴だ父への土産灘の酒
お土産を頂いたので刺隠す
ネクタイを見れば呑んだとすぐ判る

砂川市

大橋 政良

供応の膳に豆腐が白すぎる
銀髪がひき立つ紺の背広着る
ポケットを出てくる旅のエピソード
幾人の手を経た古本の匂い
八月の故里鐘を撞きにゆく
手のひらを巢立つ折鶴見守ろう

鳥取県

上田 俊路

撒いた餌が過ぎて獲物がかからない
娑婆がよく見渡せるから墓地と決め
辞表書き終えて夕陽の美しさ
天災は神の戒めかも知れぬ
バツイチの口紅過去も重ね塗る
FAの期待の星が光らない

竹原市

石原 淑子

とめない暮しの中に薪金
核廃絶ピースキャンドル願ひ込め
戦後史を読んで私歴をあらためて
薬草のポケット図鑑と野を歩く
使途不明 八百円を追う家計
新盆の姑の温さを語り合う

熊本県 岩切 康子

慎重に預かった児のミルク溶く
ベン持てば一際高き蟬しぐれ
曇天の歩調軽やか史跡訪う
赤牛を見れば白黒恋しがり
牛のどか安らぎ貰う草千里

唐津市

久保 正剣

名水をにがらせ和紙を漉きあげる
失楽園いのちの美学負の讃歌
大部屋の気焰を許す屋台の灯
七月一日何事もなし北の島
なま足を歓迎してゐるあかい蚊

唐津市

田口 虹汀

よう来たと肩に手をやる百日紅
わさびすこし効かして涼を冷し麦
出すものを出して蘇生の想いなり
傘させば卒寿の屋根に届きそう
夏ばてを飛ばす妙薬曳山笠囃子

唐津市

仁部 四郎

テレビ見てインテリになる時もある
定年の首をいつもの石けんで
大役は無名戦士が築きあげ
来るはずの催促状に見捨てられ
恋文を燃やしています風吹くな

唐津市 市丸晴翠

亡父母を迎えて居間の灯が丸い

妻と母 女も詰めたりユツク負う

三面鏡背中の老いを突いてくる

瑞瑞し野菜が私弾ませる

デザートは色とりどりの のみぐすり

唐津市 浜本 ちよ

無人駅どなたの掃除心とぐ

正しい事言うにも所考えて

独り身の佗びより気楽の方が勝ち

太り過ぎボタンの要らぬワンピース

輝いた昔ばかりを気障な奴

唐津市 山門 幸夫

国のため死ぬまた死ぬと我が世代

孟蘭盆や故郷に帰還の赤蜻蛉

敗戦日しみじみ虚し位記勲記

遅ましい入道雲のポバイ瘤

小鮒たち植田ゆるがす朝の静

唐津市 山門 タミ

クワガタに逢いたい孫が里帰り

群れトンボ一瞬の夏はしゃいである

泣き虫が三人の子の親になり

年を経てかじった脛を見舞う子等

波乱万丈郷里に落着く丸い石

北九州市 梅田 宣司

旅しようしようで過ぎて老夫婦

うす味に慣れて気力が少し落ち

盆提灯やがてわたしも貰う灯か

小銭しかないが戸締り念を入れ

人生の出会いしみじみ知る余生

高知県 赤川 菊野

桜吹雪あれは私の逝く姿

思い出が心の中ではじけそう

晩学のペンが重たい原稿紙

追憶の彼方に赤い陽がしずむ

葬いはゴビの砂漠の空がよい

高知県 小澤 幸泉

八月の海に聖書を投げ捨てる

未来図に描けぬ息子の生きる場所

空間を広げ息子の旅立ちぬ

目的もなく雑踏に独り立ち

潮どきがまだ見つからず靴磨き

松山市 宮尾 みのり

他愛ない男が持った帰巢性

凡人でよしおはようと云える朝

三角四角五角と丸うなって老い

あの頃の歌は三番まで歌え

何気ないおしゃれ背筋もピンと伸び

西条市 片上明水

一番に嫌ったはずの鉤を持つ
恐ろしい話も添えて旅を聞く
大の字になっても策が湧いてこず
白靴を三度洗って秋が来る
二三日経って他人の傘と知る

今治市 矢野佳雲

間違ひ電話若いいい声だったなあ
直線と曲線合わせ技で住む
商談でねじ伏せて来た自己嫌惡
身代りに金魚の死んだ闘病記
肩いからせた父の浴衣が干してある

今治市 越智一水

ケンカしたのでない妻が寝てくれぬ
妻抱かぬそれでもお茶は入れてくれ
一級河川落ちつけと言ふその流れ
元氣よい返事元氣をつけてくれ
路郎忌へ軸と短冊掛けて座し

今治市 野村京子

回転寿司夫婦に軽い席がある
あの人とつなぐ左手あけておく
白黒をつけたがらないトコロテン
ドンブラコ桃は大人の愛に飢え
豆腐崩す殺意ではない愛である

香川県 木村 あきら

二次会で俺の素顔を覗かれる
土鈴鳴る埴輪ヒヨッコリ眼を覚ます
カアちゃんの太鼓に主人踊らされ
断崖の雨は下から降ってくる
永久に水澄み渡る五十鈴川

香川県 工藤 吟笑

ふる里の川を濁して町おこし
晴耕も雨読もせずに梅雨ごもり
記念写真閉じれば元の凡夫婦
流れてもながれても川無表情
釣りボツコ拓本槍の横に貼り

香川県 川崎 ひかり

グラウンドに汗と涙をおいてくる
栄枯盛衰歴史きざんできた港
人ひとり許せば心かるからう
秘密焼く煙の中でゆれる過去
妥協案紫煙の中でゆれている

香川県 池内 かおり

吉本の土産はせんべとプログラム
ギブりは一体何をしたのだろ
母と娘の好みも今は反町くん
水鉄砲に降参をしたバスルーム
湯煙が私美人にしてくれる

香川県 永峰 伽名子

新しい水の心を推しはかる

秋立つてからの暑さになえしほむ

三世代揃いお墓に汗をする

夫の野心などと言うほどじゃない

長距離の電波に弾んでいる声音

下関市 石川 侃流洞

敵はもう歳だが気魄衰えず

香港還ってじっと待てない北の島

癌看取る妻も癌です鶴折って

蟻の穴見落していた土石流

老夫婦の話題へみすずの詩が住み

柳井市 弘津 柳慶

皮肉たっぷり投げ返された電話口

同窓会アダ名で顔を思い出し

へそくりを仏さまは知っている

手拍子に合わせ会場盛り上がり

夕やけ小やけお手手つないだ遠い過去

美禰市 安平次 弘道

正義感だけでご飯が食えますか

どうせ先は見えてる将棋待ってやり

判らぬ絵の前で時間を取り過ぎる

沈黙は金 雑談をきり上げる

亭主関白思ってるのは亭主だけ

宇部市 平田 実男

特ダネが取れぬルールを守るから

百姓へ定年が無い幸不幸

六十五過ぎて警報注意報

つくり笑いしてお見舞いの嘘を聞く

初心忘るべからず人間陶冶の詩

広島市 森田 文

五十二年遺骨なきまま花手桶

花火大会脳裏に残ることがある

続編は忍びよるもの振り払う

贅沢ないちにち児等とたわむれる

若いカップルのそばで眺めている夕日

竹原市 小島 蘭幸

鶴を折る父の無器用さを愛す

おとなしい男の耳の胼胝を見たか

ひとりになると振り向くのが怖い

フライパン恋は順調だと思っ

墓で会う人はやさしい顔をもつ

竹原市 森井 菁居

窮鼠猫嚙む手ぐらいいは知っている

ヒーローになつて孤独な日が読く

妻と見るのがふさわしい丸い月

OBになつても戦まだつづく

ボランティアばかりで食べて行けますか

竹原市 時 広 一 路

青空の青の一部を吸うている
幸せという消しゴムも有りますよ
白旗を上手に使っている平和
氣に入らぬらし鉛筆の芯が折れ
皿一つ一つ頷き懷石膳

竹原市 岩 本 笑 子

だまし舟チャレンジばかりの人生譜
金魚ゆらゆら夜店の恋を見ていたよ
恋人を待つ噴水は七色に
ソロバンに合わぬが人好き子供好き
母の旅簡保へ二泊して帰り

廿日市市 林 野 甦 光

やがて咲く菊へ添え木を足してやる
台風之夜も残葉断われず
苦しいが金の玉子を育てとり
山ゆりのほのかに染めて夏をゆく
川風に夏の名残りを打ち上げる

広島県 藤 解 静 風

じいちゃんの八月六日聞かせとく
生きてきたこの世へ匂い付けておく
お隣の若いいばりが小気味よい
ソルマック飲んでめざす次期町議
取れそうな釦老夫婦に似てあわれ

松江市 舟 木 与 根 一

国境は厳然と在り富と飢え
薬害が無口になった老い二人
七転びしたのが若くまた転ぶ
チャンバラが好きで未だに鎖国主義
絶唱の蟬の骸と八月忌

出雲市 板 垣 夢 醉

世の乱れ台風文句言いに来る
虫の声鳴けぬゴキブリ悔しがる
大雨が去って雀のはしやぎよう
ゴキブリと男が出合う酒の瓶
飛行機も艦も同権女乗り

出雲市 園 山 多 賀 子

しなやかに亦したたかにつややかに
飄々と生きて納まる壺がある
百日紅口滑らせてなりませぬ
お日さまの愛全面にミニトマト
医者嫌い医者から逃げてばかりいる

出雲市 吉 岡 き み え

銅鐸へ胸のときめき静まらず
朝顔の生気に負けぬ靴を履く
人間も花火も見せ場終の章
理由有りの話辰巳の方角で
七坂をまたもスリッパして登る

出雲市 竹 治 ちかし
金貯める本を時々買ってくる

缶ビール並べて夏の夜の長さ
平凡な幸を知ってる母の皺
視野かえて見れば異なる平和論
おばあさん二人終着までの愚痴

出雲市 小 玉 満 江

銅鐸へ夢ふくらます古代展
悲しさは二人で語る先の事
慌てんばゴキブリホイホイ踏んじやった
語り部も老いて遠のく敗戦記
いさぎよく締めた扉に悔い残す

出雲市 石 倉 芙佐子

ひらひらと竹藪抜けて来る揚羽
紙吹雪散らしたように蝶が湧く
火の蝶が女の胸で狂い舞う

かくれんぼうの鬼は幻征った人
あの世この世の境に架かるガラス橋

出雲市 岸 桂 子

日傘雨傘梅雨の出口で決めかねる
人間が好きで情けに流される
逆らってふところ深く雨がふる
生真面目で夫はピエロにはなれぬ
面影を重ねて百合の花が咲く

盆供養花にうもれし野の仏

脳細胞ゆすり心の詩綴る

井戸水で育てた亡母の子沢山

笛吹けど踊らぬ鬼も飼っている

美しい薬と生きる老いの日々

出雲市 久 谷 まこと

目立たない位置で言いたい事が言え

頂点の男に欠けた思いやり

陽がかげり汗を拭いてる影法師

クモの糸手応えで知る敵味方

彼岸花浄土無限の花畑

島根県 小 砂 白 汀

オリオンがウインクしている行こうかナ

何を売るつもりだろうか総会屋

薬代倍増飲むの止めようか

たまごっち遂に贖物生みおとし

せいっぱいめしべ伸ばして白い百合

島根県 西 村 早 苗

毬ひろうてほほえみポンと投げ返す

浜不漁と聞き鰯雲見ていたり

抜け殻を秋の小波がもてあそぶ

悲話哀話おんなの傷の深さほど

振り向いてやれば機嫌のよい落ち葉

島根県 堀江正朗
ほんやりと顔の置き場をもてあます
町の音寂れ八十路の胸痛む

伊勢神樂見えていた日が疼きだす
祭り酒疲れの出るも歳かいな

島根県 堀江芳子

白桃のとろりと染みて身を癒やす
とんぼすいすい妹乗せて初の盆
故里の遠さほろほろ過疎も秋
ふるさとの電話琵琶湖の景も入れ
身に合うた幸 大茜ありがとう

島根県 松本文子

爽やかにさよなら言えるのかあなたは
心配ごとはいつでも肩に乗りたがり
宛名のない手紙心にまた溜まる
絶望の砂じやりじやりと口の中
挫折した痕に風蘭植えておく

島根県 伊藤寿美

十四歳の絵に消えていたみどり
旅三日夫の野良着に迎えられ
アルキメデス孫と一緒に湯が溢れ
閉じた目にわたしの後ろ影が見え
ミルトンの失樂園は読んだけど

島根県 佐々木鳳笙

シルエットの中に夕陽を拝む人
オカリナを聞かす小径が古代めく
政治不信 波はひたひた膝を越し
隠し味教えて城をあけ渡す
古希間近 可愛い孫に疲れ気味

島根県 森茂美

消耗品だった生命に喜寿がくる
既成事実作って何を企むや
日銭追う民は黙って税払う
墓石に余熱残して陽が沈む
午前五時いつものひとが往く墓参

島根県 両川洋々

記憶たぐると命を削る酒ばかり
炎え尽きて静かに夫婦箸洗う
喪の明けぬ海へ祈りのありったけ
嘘のない指十本を陽にかざす
一匹の鬼と波長が合いました

島根県 倉益一瑤

前世は蛇かも知れぬ炎抱き
三面鏡裏の炎は修羅ですか
不動明王 炎背負って逢いに来い
炎天のひまわりわたし負けはせぬ
曼珠沙華 死者の残した炎かも

鳥取市 西村 黙光

足跡へ虹架け拝む初歩き（孫一歳二カ月）

宇宙語で茶の間を沸かす愛の使者

傾けた盃へ抜けゆく自尊心

酒飲みにも級と段位があるらしい

語り合えるペンの支えのある限り

鳥取市 坂田 和歌子

針穴のちつぽけな目に笑われる

ひらがなが跳ねているよな雨蛙

まだ温いベットは逝った人を知る

沖に在る秀波にわかの謀反なり

雨止んでるよ相合傘の舞妓はん

鳥取市 杉本 孝男

美しい針で余生を縫い返す

修業が済めばやさしい師匠なり

エリートは他人行儀も冴えてくる

居眠りも姿勢崩さぬ努力賞

気が晴れるには難問が多過ぎる

鳥取市 美田 旋風

雨やんでテレビひねれば土石流

マネキンに騙され派手なシャツを買う

石段を数え煩惱寺に消す

留置場風を切れないお歴々

黄門の全国行脚オンブズマン

鳥取市 植田 一京

手紙には頑張っているわたし書く

子は育ち親に意見をしてくれる

忘れたいことを忘れる難しさ

熱醒めて熱ありし日の懐かしき

極楽のなんと短い旅おわる

鳥取市 春木 圭一郎

弱いとこ見せあい真の友となる

友達じ自分の姿勢浮き上がる

たおやかな異性の友に力わく

欠点をかくすと友が来なくなる

いつまでも一緒にいたい友だった

米子市 林 荒介

法螺貝を吹いていたのは仏さま

読経する蟬に唱和をして昏れる

耳底に故郷の水が湧いている

取り敢えずちちを代りに出しておく

軽トラに今日の夕焼けも積んだ

米子市 青戸 田鶴

遠くから見れば私の絵も光る

百日草百日咲いていた疲れ

こわさねば袋小路をぬけられぬ

遠い旅へいつも心を遊ばせる

塩ふって明日の魚にとっておく

米子市 光井 玲子

雨の窓いちにち人を恋しがる
恋ひとつ記憶の中で枯れてゆく
白いめし食べられるかな新世紀
ここに来てやっと終りの絵が画ける
十指みな動くあいだの手すさびだ

米子市 野坂 なみ

一城の主抜け道持っている
古い女でインスタントを嫌いぬく
遊歩道つきると二度と逢えぬ尾瀬
こどもの時からお寺詣りに連れてゆく
散り際の花のところが澄んでいる

米子市 白根 ふみ

月下美人ABCと今宵逢う
芳香がみなぎるシャッターチャンスだ
薫香を出しきりセレモニーとじる
亡父こえたときから余命かんがえる
カーテンを洗うときすまされた息

米子市 茂理 高代

好きだった壺も持たずに灰になる
彼岸花あなたを想い燃えている
美しい花を信じて怪我をする
柿の花咲く頃母の背を偲ぶ
活け方で曲った木でも生かされる

米子市 木村 富美子

泣かないときめてから目が笑わない
我慢してまあいい丸い月になる
また明日なんて約束できぬ年
遊びすぎたつけが重たい盆の窪
勝敗に味方はしない将棋盤

米子市 鷲見 正子

蟹ばかり二十日も続く父の海
蝶の羽化花瓶を外へ出してやる
夜九時に目ざましが二個鳴る隣家
子供達の邪魔にならないよう生きる
スカーレットのあしたを忘れないでいる

米子市 中井 ゆき

花道で呼ばれることもないだろう
すり鉢で昔むかしを丹念に
北の地図鈍行ばかりの旅をねる
夏草がむんむん竹田城の坂
屋久島の美美子に降った雨の音

米子市 永井 三津子

明日と言う不安渦巻く夫が逝く
山登る自分の真を問うように
もの好きと笑われたって彼が好き
にらめっこ電話としての逢いたくて
散り終えても私の匂い残したい

倉吉市 淡路 ゆり子

平凡でひとつの指輪大切に

禁酒の夫へビール飲もうとそそのかす

良く出来た水羊かんが孫を待つ

夾竹桃二階の窓をノックする

蜘蛛の巣に捕らえられてる蟬の声

倉吉市 野口 節子

意外にも親切くれた茶髪娘

効能書きは美人になれる洗顔料

ポカポカの土壌で二葉よく育つ

さよならと言わずに老母の目がうるむ

程のよい言葉が出ないインタビュ

倉吉市 米田 幸子

富士よりもでかい理想で子がゆがみ

厄介なお荷物だけが残される

古墳遺蹟と太古のドラマ眠らせぬ

急がねば酒が酔っぱばくなりそう

熟すまで待たずすっぱい桃かじる

倉吉市 野中 御前

食べながら立て板に水余地がある

人類が核を発見した悲劇

許すこと待つこと妻になって知り

コスモスがルンルン笑う秋の風

うら盆の袈裟はハイヤー待たせてる

倉吉市 最上 和枝

さまざまに生きてドラマは未だ未完

揉み手して商いの顔になる

長短波噛み合わせぬ日もあり夫婦

参観日虚飾のルビー光らせる

ワンルーム我が城夏に衣替え

倉吉市 松本 よしえ

台風が来そうトマトが熟れている

洗濯機回してトマト摘みになる

大好きなドレスで蝶になりました

若者の理想に虹が描いてある

法師蟬三仏寺から離れない

倉吉市 山本 玲子

衝動買い煽り立てます限定品

天窓のガラスで雨の裏をみた

浦島太郎アクアランクで再現す

苗木市もうキンカンがなっている

褒め上手自慢話も忘れない

鳥取県 津村 八重子

郵便に託すは温い親心

のぞみたい事の多くて言い出せず

月末の日記反省ばかり書く

のび切ったゴムとわが身を比較する

夕日きらきら今日一日の鍬洗う

鳥取県 乾 喜与志

老眼と言う証明に老いを知る
めし三度量は少うし減ったけど
悠々自適まだ新聞が読めている
物忘れするということさえ忘れ
のんびりと卒寿がひとり歩きする

鳥取県 乾 隆風

尋常卒も老人大学に入れる
山家の猿が交番の世話になる
田舎なまりを東京に撒きに行く
ドラム缶の風呂へ黄河の水を汲む
老境をこえて西日が美しい

鳥取県 石尾 かつ乃

受け継いで今日も一途に田を見舞う
大自然この頃恐いことばかり
戦中派の癖でがらくた捨て難い
もう一人の自分に紅い色を足す
着飾って旅に出ますと脱ぐ野良着

鳥取県 土橋 螢

先生がこどもにいじめられるとか
水をくだされ 炎のように燃えている
六人家族の茶碗を洗う幸せか
つきあいの将棋は初段基は二段
特別の汗かいている恋晩夏

鳥取県 土橋 睦子

鶏頭の赤が鮮やか盆の月
ふる里へ似てる似てない盆供養
石段に記憶を辿るちぎれ雲
なにごともない日が続く蟬時雨
手の内を夫にも見せぬ事もある

鳥取県 羽津川 公乃

エレベーター待てず八階駆け上がる
三本の矢を爺ちゃんと約束し
男同士の約束らしい神妙さ
夏休み爺ちゃん見舞うのも日課
日焼け顔待ってる爺の小銭入れ

鳥取県 鈴木 公弘

金を得てから見えたもの消えたもの
再生のビデオに嘘はなかったか
ゴリラではないです僕の写真です
物入りの話になると寝てしまう
ゆうべ見たのは噴水の夢でした

鳥取県 西原 艶子

天にダムあるかのように雨が降る
庭の草さっぱり刈った離職以後
賞という賞に縁なく詩を詠み
傾きが微妙に違う私の眉
姑の背の丸さ拌んでみたくなる

鳥取県 石谷 美恵子

本音言う鏡あべこべ向けておく
私の魔法へ夫はよく踊る

ブランドの皿へ盛られた田舎漬け
雑草の花を心に飾りたい
想像へ少し淫らな花を選ぶ

鳥取県 さえき や え

花筏 手作りですがほとけさま
老人と言われて恥じることはない
トップにはなれぬが尻尾にはならぬ
ここにきて我をはるくらしやめにする
花あかりめつたなことに泣きはせぬ

鳥取県 橋本 多哥由

思い出という我楽多と住んでいる
極楽も地獄も嫌で眠るのみ
逢うて悔い別れて悔いる雨が降り
花言葉知らずに花を選っていた
妥協してばかりいるので貧しすぎ

鳥取県 黒田 くに子

赤トンボひとつ覚えの秋うたう
嫁がせてしみじみ苦い酒の味
抜擢の椅子へ友とのすきま風
あつけらかと別れを告げるのは女
いつの日も母が動いている安堵

鳥取県 岩崎 みさ江

やわらかなころふつくら豆が煮え
相談の答は背を押してやる

拗ねるには訳ありそうなひねきゅうり
老木が伐られお寺も代替り
みどり児の拳がゆるむお湯加減

岡山市 井上 柳五郎

巡り来た八月鬱の敗戦忌
風鈴は嫌な風にも音を撒き
占いで決めたわが家の設計図
積年のかげり発散蟬しぐれ
後生大事 色足らぬ虹ひしと抱き

倉敷市 田辺 灸 六

兵隊に行かずに済んで気がひける
兵役の無念晴らした警予隊
国憶う心変らぬ自衛隊
軍恩でない年金は公務員
戦後日本吾が人生の懺悔録

倉敷市 小野 克 枝

馬鹿になり利口になれる鼻メガネ
一つ捨て二つ拾って長い橋
愚図とせつかちで小銭が拾えない
友達を優先にする孫九歳
爪丸くきれいに齢をとりました

岡山県 荻野 鮫虎狼

迂闊にも酔った己を忘れかけ
肝心な処で妥協してる妻
耶馬台の話題弾んでいる平和
退院の日から亦々粗大ゴミ
行先がや々と決った妻の旅

岡山県 二宗 吟平

改築の宮の祝詞で心澄む
吟詠の会に戻って三の声
元大臣さんとの握手背筋のび
天候不順 冷暖房の忙しい
葉桜の影に河原の風を入れ

岡山県 山本 玉恵

雨音とひとり旅寝の山の宿
舞台暗転それからずっと地下迷路
カルチャーでおぼれてばかりいる絵筆
針箱に母には母の夢の数
花は散るその後の事は曖昧に

岡山県 江口 有一朗

つくろわぬ心の笑みを忘れまい
祖母と母へ甘え区別をしている子
入試落ちたことには触れず旅話
幸せの女神は楽天家がお好き
いくさより怖い平和を乱す風

岡山県 小林 妻子

平常心の男を煽るライバルめ
墓掃除ゆっくりとして古希の夏
三猿を抑えてからの飯の味
肩口が見えないほどのサロンパス
癖のある暑中見舞を懐かしむ

岡山県 矢内 寿恵子

ストレスを流して溜めて雨季はげし
大正の歩幅のままに世紀末
逝きて久しき父母と向き合う般若經
ドラマ完了墓標静かに立っている
温かい流れに変えた母の杭

岡山県 大石 あすなろ

乗り越えた壁に涙のあとがある
わたくしの無題のドラマまだつづく
自信過剰いつも主役でいたいバラ
けんかしているのに夫婦さし向い
お茶漬けで流せるほどの口げんか

神戸市 木村 貴代子

娘を待っていつか時計になっっている
繁栄の時代がのこす負の遺産
緑濃き町に子供の見えぬ惨（小学生殺人事件 三句）
容疑者を捕えて町はなお暗く
親になる勇氣持てぬと言う息子

相生市 中塚礎石

嘆願書愚痴を集めた判ならぶ
終章でペン立てたまま寝てしまい
歯ぶらしを残したままで子は赴任
きつちりと男の靴を外に向け
白旗を洗うて高く揚げ直す

加古川市 吐田公一

強風もそよ風もあり親の風
乗っかれば安心できた亡母の膝
大臣の椅子ありつけぬので離党
型破りの石で相手の度胆抜く
ドラマ見るような事件がつぎつぎと

芦屋市 黒田能子

秋天に一字書きなどしてみたし
物思ふ秋か煮物がこげている
本からもらった良い知恵悪い知恵
逆さまに絵本読んで一歳児
紫陽花の散らずに枯れていく哀れ

西宮市 秋元てる

人は皆故郷に名山持っている
山頭火 私にわたしの青い山
下手くそな麻雀老いのおままごと
しあわせのまん中少し腰を引く
物言わず買う切符にも慣れて秋

西宮市 久保まさお

足長き少女まぶしく夏来る
八月のいのち見つめる今朝の露
歩いても歩いてもただ遠い闇
復興を半分祝う蟬しぐれ
いくさ知らず夏草やたら生い茂る

西宮市 菊池トミエ

幸せを踏みしめられる靴を選ぶ
朝顔の今日は何色露光る
ぼつぼつと愚痴含ませた豆ご飯
盛付けの器を変えて夏料理
目覚ましのベルより早い蟬しぐれ

西宮市 牧渕富喜子

通じあう時を祈ると虫が鳴く
ホームラン掻き消すほどの蟬しぐれ
居眠りが姑に似てきた夏の暮れ
蟻の列まだ知らされぬ事がある
剪定を済ませばどこか秋の風

西宮市 奥田みつ子

山ふところ友をかくしてしまいいけり
いつまでの命と思う山の音
燃えつきず燻っている日々ばかり
母さんの笑顔がもっている魔法
三角帽子 白髪かくしているピエロ

墓参り自分自身が落ちつきぬ

西宮市

西口 いわゑ

心配へのほほんとして飲んでくる

生きている小さな悪も企んで

八月の空へゆらゆら蓮の花

鬼の心知らず恐れてばかりいる

西宮市

門谷 たず子

新築ばかりの街でいつまで虹を待つ

すり硝子の向こうは見えぬ子の暮し

家族とや絆が重いちりれんげ

今だから言える話を老いふたり

皿に盛る心ゆたかにマスカット

尼崎市

長浜 澄子

迷いごろ愛しむように小糠雨

転がった毬運命を予感する

遅々としてページ進まぬ蟬あらし

ありそな話コーヒー飲みながら

ああ無情風もないのに実が堕ちる

尼崎市

春城 年代

今はもう心の旅をするばかり

さだかならず老いとは不意のものならん

きのうとはうってかわって毬弾む

恋文をメモってくれた十二歳

夏大根の辛さ塩鯖あぶらぎる

戦野の悪夢また思い出す夏が来る

尼崎市

春城 武庫坊

残暑見舞いに来て死んでいる油蟬

お互いにかけて声かけて暑に耐える

銀漢が消えた夜空に夢を追う

盆の寺そこ極楽の余り風

伊丹市

山崎 君子

夕顔もつぎつぎ開く遠花火

短冊も活字まじりの笹かざり

立秋に同じ高さの赤トンボ

供え物わたしの好きな物も買う

白い月ひまわりと見る老母の夏

宝塚市

嵯峨根 保子

ひたひたとみず戻りつつあるところ

太い字を書く人でした父でした

ヤーヤドーねぶた曳く子によい日本

立ちどまり笛をきかせるおもてなし

気がつけば燃える津軽に立っていた

川西市

氏林 洋敏

絵日記がお伽話になる未来

爪を切る明日の予定何もない

人間が一番恐い蜚酒

ライバルに甘い言葉をかけられる

蟬しぐれ過疎を楽しむ風情あり

和歌山市 福本英子

雷鳴が怖い私もシエパードも
美術館老人無料だから行かぬ
こっそりと洗う悪戯過ぎた髪
残り湯の使い方まで嫁姑
お揃いの浴衣に金魚掬われる

和歌山市 堀端三男

仲間入りそう遠くない盆供養
身中の虫をなだめる旅に出る
夏祭りケチでなかった奉賀帳
賛成はするけど旗はよう振らん
当然のことしただけとよい笑顔

和歌山市 山田高夫

朝を出る身すぎ世すぎの重い靴
方便の嘘仁術の医者も言う
終戦のあの日歩哨に立っていた
あっち向きこっち向きして結ぶ帯
底辺を踏台にしたピラミッド

和歌山市 細川稚代

記念日を忘れてならぬカンナの朱
シャワー全開あしたになれば過去になる
なりゆきにまかそう流れかわるから
追い風に乗って蝶々海渡る
喋らない息子の助手席が暖かい

和歌山市 堀畑靖子

生ビール最高そんな暑さです
姑とやりあう元氣ない私
バテ気味の君にポリウムある料理
宝石のことには疎い私です
呼びこみをしたくなるほど閑な店

和歌山市 玉置当代

均等法ヒールの踵低くなる
今にまだ老母がつつかえ棒となる
白昼夢まさかまさかの計報聞く
逝ったならあなた偲んでくれますか
人生とは何ぞや風の吹くままに

和歌山市 垂井千寿子

空腹へ母の心が染みてくる
下町の郷愁知っていた寅さん
悪い血も良い血も先祖くれました
言いわけの成功悪女の眼になって
年波をひよっこり知らず喉ぼとけ

和歌山市 宮口克子

恋をして嫌われ群を出たのです
同じやるならさすがネといわれたい
楽しんで働いてると伝えてね
叩るほど吞んで深まったは痛み
誤解解くまでの試練とおもう旅

看板に濁点 蟬がとまってる
和歌山市 古久保 和子

台風通過星の欠片を探す朝
童謡のどこどころが口に出る
本箱に寝息聞こえる本ばかり
帽子屋の鏡ピエロを待っている

和歌山市 山口 三千子

振り向けば喜怒哀楽の母子手帳
今勇気出さねば時期を見失う
一身上の都合内訳知らされず
追い風に乘れば伏兵待っていた
渡れない橋の袂に亡母がいる

和歌山市 岩本 美智子

ムンクと叫ぶ八月十五日
敗戦忌輝きすぎるひまわりよ
呪文唱えてごろごろ道を歩いていく
粉河寺仏足石に唇を触れ
回り灯籠 彼岸へ帰る父母送る

和歌山市 榎原 公子

何を焦っているのか本が増えていく
振り返らないと私が見えなくて
やさしさと強さ涙から貰う
嘘ついた数だけ染みになっていく
寒かった夏が立ち去りかねている

まだ気迫あって退屈していない
銘ついて急に売れ出す峡の水
二重性格みんな持つてる裏表
風化した浜の石碑は仏頂面
タダ酒はおやめ後からつけがくる

和歌山市 池永 正 嗣

老いてなお年輪作る樹に脱帽
機関車のような男にもう会えぬ
いい話 裏がありそう眼鏡拭く
かけ引きよりどんと押される方がいい
コンビニがあるからこも街だろう

和歌山市 川上 富 湖

国会の椅子で眠っているオブジェ
惚れ薬次はたつぷり入れてみる
老眼鏡などと言うから買にくい
不揃いのタイルも文化だった頃
焼け石は冷まして唯の石にする

和歌山市 川上 大 輪

鬼瓦もまだUFOは見えていない
下町の顔でノラ猫歩いてる
一つ目の信号今日も赤になる
セピア色になるのは写真だけで良い
誰も乗せない電車が通り過ぎて行く

和歌山市 玉井豊太

男からあぶない酒を受けている

物静か主人ひとりのお留守番

良縁がお酒の上で始まった

友達に物知りが居て弁もたつ

お四国の軸へお盆の風とおす

奈良市 宮口笛生

雑魚取りの楽しさ知らぬ川ばかり

クラーの部屋で八月十五日

玄関を狭く咲かした夏の鉢

看護婦さんと上手に鶴を折っている

白い髭剃り剃り老いたなと思う

奈良市 天正千梢

哀れにも背ビレを見せて鮭のぼる

お大師さん隣の人を呼ぶように

名も知らぬ山の若葉に酔っている

国語辞典大きな活字に助けられ

花の香が車中に舞い込む紀勢線

奈良市 吉田笑女

亡き夫とはじめてとんだ空の旅

恐る恐るのぞく真下に富士の山

雲仙の宿で流した旅の汗

終戦後生きて帰れた日と思う

親子三人生きて帰った北京から

奈良市 米田恭昌

リストラの匂いをさせたほめ殺し

熱帯夜月下美人と待つ夜明け

パート行く妻の若さに惚れ直す

子の寝顔癒してくれる夜勤明け

ポストカード娘のろけを言うてくる

生駒市 北山悟郎

八月は胸かきむしる我が戦記

君が代に想いが多く胸をしめ

三途の川おそれおののくことはない

首洗いいざのお召しを待ち構え

一貫した姿勢たとえ身砕けても

大和郡山市 坊農柳弘

秋刀魚焼く旬には旬の値と味と

盃に菊ひとひらの秋を酌む

恋時雨忘れられない人ひとり

天高く白勝て紅も孫二人

運動会済めば鎮守の秋まつり

奈良県 長谷川春蘭

コーヒーより冷たいお茶を所望せり

水をまくホースのままに水を飲む

さなぎだに少なき余生昼寝など

兵たりし日の回想と終戦日

団地つ子故郷持たぬ子夏休み

大阪市 西出楓楽

看病に休みなどなし蟬しぐれ

坂の途中でなくした友と得た友と

山野草と心通じてからひとり

蚊一匹叩いて今日をしめくくる

拝啓と書けば本音が出てこない

大阪市 津守柳伸

玉の汗祭り囃子へ蟬しぐれ

親離れ子離れ愛は無量大

頼り甲斐火中の栗も辞さぬ長

建ち並ぶ家並み高原列車往く

朝顔の蕾と競い出す蛇口

大阪市 神夏磯典子

台風一過 夫婦喧嘩もつれてゆく

バグマンそんな記憶がよぎる夏

老いたかな過去がきれいに見えてくる

断りの顔に苦心をしています

雷が秋の空気を持ってくる

大阪市 本間満津子

見えぬ幸せ見たくないもの多過ぎる

悲しい世相信じられない信じない

言い知れぬ悲しさの底なんだろう

激励のように稲妻闇を割く

お世辞は言わぬ良い品を売る古い店

大阪市 河井庸佑

読書週間軽い本でも読むとする

薬つかむ思いは暖気にも出さず

身勝手な人と分かったお付合い

浅い川深く渡るを忘れない

譲られて素直に座るのも礼儀

大阪市 榎本落児

直立不動じつと夕陽をみつめてる

大正に誇りを持って生きている

平然と死ねる稽古をしておこう

ぼんやりと人を持つのもいいもんだ

夢二の画 女房の好きなお店です

大阪市 井上白峰

老いて尚一期一会の種を蒔く

新世紀見たくて背伸びしています

丁寧な言葉の裏にある妬み

適量の秤が違う三世代

聞く度に辞書を繰ってるカタカナ語

大阪市 板東倫子

脳死なんて野暮な死に方したくない

少年の挑戦状は受けて立つ

凸レンズで見れば月並みの女です

地球一まわりあとのお金で墓地を買う

極限で何故笑いたくなるのだろう

大阪市 町田 達子

黒い雨連想してる夾竹桃

丁寧には塔婆名読み盆供養

ロック挟み団地も負けず盆踊り

なるほど岡本太郎の評価など

前売券買う生誕二〇〇年シュールベルトの夕

大阪市 大塚 節子

雄の蚊の罪はないけど叩かれて

妻の機嫌白玉団子の大き小

一号線騒音にさへ蟬の声

肥後守五本削って昼寝にしょ

去年の亀と仲良くしいや祭の夜

大阪市 玉置 英子

鳥の声もう一睡り蟬の声

夕焼に染まった顔で君が好き

高齢の父の所作よき盆踊り

麵が好き子はスパゲッティ私蕎麦

いまのとこインターネットは他人のこと

大阪市 黒崎 恭子

ソーダ水泡にも強いやつがいる

入道雲高層ビルにはさまれて

甲子園燃える真夏を呼び戻す

朝顔も不景気なのかミニで咲き

夏ばてに梅おにぎりをはさむ彼

大阪市 川端 一步

地下鉄に乗ってドームへおいでやす

盆の蟬夜勤明けには子守り唄

先祖には肉太の字で書く経木

古書の山妻は文化を捨てたがり

防犯に門灯つけて小さい守備

大阪市 松尾 柳右子

おちよば口しゃべり出したら止まらない

お喋りが得意ストレス等知らず

しゃべるだけしゃべって娘は寝てしま

食べて寝てそんなゆとりは風邪を引き

いつの間に違う物食べ夫婦なり

大阪市 清水 利武

気が遠くなるほど嬉しホームラン

中華から美味しい栗がやってくる

スポーツの秋だ「なみはや」国体だ

スポーツの選手タコ焼好きらしい

失楽園みにくい大人見せつける

大阪市 清水 絹子

嫁ぐ日の心構えを今にきく

キッチンに立てばふくらむ母ごころ

盆提灯飾れば亡夫の音がする

少年A家の宝であったはず

見られるより見てあわててるキッスの場

大阪市 奥田良子

豊中市 安藤寿美子

情熱の果てかもしれない流れ星
掛時計わが余生をばきざみおり
還らざる君待つ旅路まだつづく
父母の背を流すが如く墓洗う
イヤリングとりネックレスとる暑さ

大阪市 稲本凡子

豊中市 井上直次

賞味期限切れた命を医者へ向け
ペランダで夏をのりきるバーベキュー
真夏日へおしゃれごろは失わず
三叉路へ来ると矢印消えている
目の位置をかえると幸せが逃げる

大阪市 川内 咲

豊中市 江口 光

犯人は手変え品変え顔も変え
逃げました両手に余る名を使い
世紀末犯罪さへも異常なり
夢を買い夢と散り行く宝クジ
核の無い世界平和が僕の夢

大阪市 小林 周 信

豊中市 湯浅 馬 洗

何はともあれ気付いてくれた髪かたち
ごきぶりを掴まえたのは妻のほう
それからと先を急かせる艶話
ぎこちない女の混じる艶話
入場料払い背広の蜚狩り

ガン検査もうどっちでもいいのです
お食事中すんまへんかと蚊をたたく
命令の好きな男がいなくなる
バーベキュー私はお客でいてられる
ニュージールランドの肉をマングローブの炭で焼く
監視する人が上司と謀り事
約束を破る男にある魅力
思いやりすぎて優柔不斷です
遺伝子のテープをつなぐ蒙古斑
三世代笑いのテンポずれたまま
無視をするカラスへ弓のいかかし
パレードの主役女が尻を振る
美しい別れなどない旅に出る
夕焼けの雲の小波に酔いしれる
ガラクタの中から未来甦る
旬の味こころの健康呼び戻す
ハードルをいくつ越せるか喜寿の道
話し合い腹を割らずに背を向ける
ハンドルの遊びで知った処世術
考える人うなずき過ぎてまた思案

箕面市 岩 津 ようじ

老人の一揆 長生きしてやるぞ
見えすいたお世辞が好きでウマが合う
食べながら携帯電話ラーメン屋
巴里 羅馬 羅府 読めるかい
にここに癌でしょうねと医長さん

箕面市 椎 江 清 芳

大海を翔んで見たいと蝶の夢
酸性雨あれは地球の涙かも
秀才のように見られている無口
過去帳に残る我が家の氏索性
片肌をすぐ脱ぐ金もないくせに

岸和田市 高須賀 金 太

息子とは特別喋ることもなし
早足の息子を必死で追いかける
外出を異常気象にたたられし
梅干しの選別うめにむせながら
尻込みをする勇氣なら僕もあり

岸和田市 芳 地 狸 村

だんじりに燃えに燃えてる城下町
だんじりをこよなく好きなおばあちゃん
だんじりへあの子この子が鐘太鼓
だんじりがこなから坂で見得を切り
スタミナをつけてばあちゃんニールック

岸和田市 古 野 ひ で

他人には見せてはならぬ顔がある
対話する遺影優しい顔になる
追憶もあらたに仏具磨きする
仏様に言いわけしてる病みあがり
老いの身に病ずかずか入り来る

岸和田市 原 さ よ 子

八月を無駄にはしない原爆忌
落第のない主婦業の怠け癖
要領のコツへ母さん手を添える
隠しごと何と私の不器用な
女三人体重計へかしましい

岸和田市 田 中 文 時

孫の身案ずる二十一世紀
六畳に枕が六つ祭りの夜
天高く許さないとか許すとか
溜息をついて朝刊折りたたむ
なす術もなく通帳の目減りする

岸和田市 寺 田 甚 一

苦勞せずまだぼんぼんの顔で老い
死ぬ順番話をしてる通夜の席
水茄子のうまさひと夏満喫し
肩書の名刺息子は見せに来る
保険満期有難味ないさやかさ

和泉市 西岡洛醉

夢と言う言葉追いかけて六十路越え

酒二合 天気晴朗波高し

妻の味満足の日々嬉しくて

渋滞の焦り忘れた古希の日々

螺旋階段下りは考えぬ事にする

和泉市 岡井やすお

りんくうタウン海をかじったまま倒れ

聴診器右手に左手でコンピュータ

素麺が往ったり来たりお中元

ハードルを一つ越ゆ大阪の五輪

念願の五輪共催なんていや

高石市 浅野房子

この先にまだ未知数のあるこの世

当り前と思つたことがありがたい

許すとは気楽に言えぬ意地がある

使い捨てにしようとしたがされている

浪人は何も学生だけでない

堺市 桑原道夫

城壁の銃座から見る家族の頭

カヌー漕ぐ光みれのしぶき浴び

宿の下駄闇を覗いて引き返す

浴後呆けて居しが娘に虚を衝かれ

分別をもてあましたる残暑かな

堺市 河内月子

母さんをたのむと父がわろている(父の命日)

誕生日元気が倍になるわたし(8月8日)

信号をきっちり守り事故に遭う

三男がぎょうさん愚痴を聞いてくれ

姦しい妹たちと昼の酒

堺市 柿花紀美女

主婦業へ私の信念持ち続け

背伸びする膝がだんだん痛くなり

凡夫婦にも歴史あり五十年

二十一世紀的に頑張る老夫婦

八方美人の奥様と軽い話する

堺市 黒田真砂

思慕未だ消えず未練な昼の月

父母の待つ彼岸へ行きし君哀れ

眠る如く花にうずまり逝き給う

夫もなく子もなく独り白むくげ

何しても空しきものよ妹の死

堺市 志田千代

残念と思うこと減りキュウリもむ

思いやり鬼になりまた蛇になつて

江戸鎖国長崎ギヤマン華やかに

大切なことを小さく書いてある

一寸より小さい虫なら殺せます

河内長野市 井上喜醉

傾いた人生日除けはないらしい
物忘れ晩酌だけはきつちりと
目立ちたい天狗ばかりの山登り
首へ鈴つける主役へ選ばれる
気配りへ疲れた宴で酒まですい

河内長野市 植村喜代

二人の娘が嫁く寂しくてほっとする
テレビから外へつれ出す車椅子
自由とは幸せなり夫の介護して
来年こそ行こうよと誘われる旅
神が地に天に怒りを見せて来る

富田林市 片岡智恵子

宅配のように子だけを置いていき
まっ当に歩いただけの満ちた日々
曰くありげな鍵のかかった小引出し
こりもせず読む気の本がまた並ぶ
親と子の夢はどんだんずれている

富田林市 松本今日子

知らない知らない何と便利な言葉でしょう
クーラーの一室暑がりも寒がりも
人の輪が切れそう神様仏様
夏休みおにぎりにぎつてもにぎつても
同窓会釣書一通託される

藤井寺市 吉岡美房

戦争が昨日のような夏巡る
嬰樂と神のカルテで生かされる
遠い日を覚えて今日のこと忘れ
退屈な悠々自適羨まず
巣立つ日をつばめ記念日に決める

藤井寺市 高田美代子

にわか雨すこしは濡れていい暑さ
サヨナラが言えてスキップして帰り
馬鹿正直な話をあほやなあと聞く
辛いこと沢山あって笑うてる
齢重ねて風の戻りも読めてくる

藤井寺市 中島志洋

実りの秋 娘車で里帰り
膝枕軒をかいて外される
下積みに渡りに舟の良い話
はらはらとさせて転ばぬ千鳥足
お向かいの窓が気になる露天風呂

藤井寺市 福元みのる

毎日が休みになると惚けやすい
気休めに勉強と言ういい身分
休日でない方が妻くつろげる
忙中の心身休めよう見事
良心をしまいこんでるような人

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

人魚像白夜に乳房恥じらいぬ(コペンハーゲン)

八月の氷河の天地いのち置く(フルウェー 二句)

断崖の岩山迫る身は船に

並んでる二匹の鮎も添い遂げよ

その時も髪撫でてやる思いやり

羽曳野市 田中 透太

雑学でぎっしり詰る父の書架

切り捨てた尻尾は誰も拾わない

ひと言で済む話だが長くなり

飛び乗って座った椅子が生臭い

盃が時々尻尾振り過ぎる

羽曳野市 吉川 寿美

さるすべり表沙汰には出来ぬこと

背もたれがほしい人生七転び

平凡な幸に気づかぬ梨の芯

コピ―溢れる街で転んでばかり居る

紙コップ軽い約束ばかりする

羽曳野市 酒井 一壺

週二回家庭のゴミを出してます

主婦という給料のない大仕事

大切な仕事任せてもらえない

目の動き心変わりを見抜かれる

一杯を飲まずと見えてくる心

松原市 玉置 重人

老犬と信号待ちをする散歩

フロメシネル昔々のことでした

べんちゃらの下手な男の固い椅子

天敵のように赤ちやうちんが揺れ

ブリクラに孫とホッペをくつつける

八尾市 宮西 弥生

本当の夏に戻って来た氷菓子

タコ焼きがよく売れ河内の盆おどり

暴走から逃れて田んぼをつぐ茶髪

職場では仕事の鬼になって主婦

ある時は少女にかえりたい赤い靴

八尾市 内海 幸生

絞ってもしぼりきっても灰汁がでる

炊飯器優等生の味ばかり

自信なく捲った辞書に励まされ

手刀をきるようガイド客を読む

花替えて先祖に長旅叱られた

八尾市 宮崎 シマ子

止めに行つて男喧嘩を負けてくる

杖ついた夫になったコスモス畑

世帯主は変らず主導権変り

追憶の島はみかんの匂う時季

五十三回目の迎え火よ戦鬨帽

八尾市 高橋夕花

八月の空はかなしみいろで澄み
ご先祖に美味しいお茶をよろこばれ
今更に向田邦子買つて読み
梅しようが優しい人に嫁がせる
秋風に身のほころびを縫い合わせ

東大阪市 森下愛論

頑固など捨ててまた良し友と飲む
考える余地なくあおるコップ酒
空ボトル奇麗に並べ一切空
風流は知らず小石にけつまずき
野仏の膝でカマキリひと休み

東大阪市 指宿千枝子

涼しげに背広を着てるお金持
先生もドレスアップの参観日
ご老体酔うてにこにこ届けられ
青りんご幼い香り味になり
りんごジュースネプタに熱い思い馳せ

東大阪市 安永暁子

台風を追いかけあこがれた尾瀬に
行きずりは声かけ合うてみな笑顔
湿原のブルーの空は絵のようだ
浮雲よ水芭蕉はどこに咲く
風の波ニッコウキスゲは笑つて

吹田市 栗谷春子

台風の日テレビなりありがたし
蟬の声これは大きな声援ぞ
おばあちゃんテントウ(転倒)虫と名がついた
電話口ほくそ笑むとは何ごとぞ
いくたびも聞いた話がなつかしい

吹田市 山本希久子

朝毎の償い仏飯盛っている
黙礼で過ぎゆく人よ萩の寺
忘れるという天恵や母卒寿
越えられぬ川たそがれの岸に佇つ
ピラミッド支える底辺の力

吹田市 茂見よ志子

眠つても軒は止めてコンサート
言い訳を聞く暇はない発車ベル
角の立つ智も働かずうとくなり
歯科医からメンテナンスのお呼び来る
喪の服を仕舞いこめない続く葬

守口市 森川まさお

渡船場老婆が低く口ずさむ
蛇羽音船に乗つてもついてくる
流木はどうでもせよと横たわり
夏帽を真深にみたと町歩く
円描き争いのない水すまし

守口市 結城君子

六道の辻もこみあうあの世から
尊厳死だなんて何だか気恥ずかし
仏さまこぼさず上手に召上がる
めでたしで終る映画が好きになり
年寄りを暇人とみな思ってる

寝屋川市 江口 度

渋滞の車便秘になっってくる
原爆忌忘れてならぬ蟬もなく
明石大橋あつと言う間の里心
ずぼん吊りしたらと思う友の腹
ノッポビル群都会は少しずつ沈む

寝屋川市 平松 かすみ

これもまた記念に残すテレカード
明日のため靴を揃えて折ります
保険屋が九十歳のことを言う
正直なスナップ生年月日出る
じいちゃんの好きな赤ちゃんバスケット

寝屋川市 堀江 光子

大通り静かに街も盆に入る
夏休み街へ泊りに田舎の子
好きなこととする休日の早暮れる
山登る身には余計なもの付けず
父の日の父を立派な眉に書き

寝屋川市 酒井 勇太郎

母危篤半年間に六度聞く
保護してるつもりの妻にガードされ
孫二歳もう始まった反抗期
見送って嫁がせ青春取り戻す
メルヘンの世界求めてする手品

寝屋川市 富山 ルイ子

娘の暮らしに包み込まれている老後
しっかりと大地を踏んで歩きたい
老若男女杖つく人の多いこと
し残した事思い出す午前二時
シリアスな話題にそつと外す席

寝屋川市 後藤 黎之助

あれうれし七十にして五十肩
少し嘘ませて背中を押してやる
浴衣着て下駄ばきでみた天の川
旬の味切った西瓜を買ってくる
生きるべし鳴け鳴け鳴けよ蟬の声

寝屋川市 太田 とし子

褒めもせずけなしもせずになにかいな
潔し俺が先だと死ぬ話
こんちわお早ようがない朝寝坊
残酷は心の底のまた底に
ちよつとおじぎして別れた人に逢いたいナ

寝屋川市 北岡 波留吉

見せ場の無いドラマ演じて老いて行く

妻を見て動揺してる花名刺

鯉こくが美味い床上げ近いかも

踊りの輪広げて飛ばす不況風

浮き浮きとひとり旅する恐妻家

枚方市 前 たもつ

尊厳死 父の願いを聞き届け

真剣にマンガ読んだら恐ろしい

一日後で逝くも夫婦の思いやり

寝たきりの見抜いています思いやり

先生を一生肩に下げている

枚方市 森本 節子

シンボルのえくぼは昔のままだった

さまざまの思い出姑の五十回忌

セロリ食む口も心も澄んでくる

しらむ頃目覚めチャイコフスキーの序曲きく

待たされるから余けい空虚な奥座敷

枚方市 八田 敏

娘や孫と西瓜を囲む夏の陣

蚊が付けば孫に機嫌をとられてる

蚊も進化小型無音ですばしこい

タマゴツチ騒がれるわけ解せぬ老い

介護三年娘と同居など出る弱気

交野市 福岡 しげお

靖国へバッジ付けたり外したり

産廃で文化に遠き富士築く

マイホーム空の広さは限りなし

全自動つけて気になる太り過ぎ

長電話叱られ孫の書く手紙

茨木市 藤井 正雄

失敗へ素知らぬ顔の思いやり

とろろ汁孫がすり鉢持ちたがり

禁酒禁煙電話の声も低くなり

箱庭に里を偲んだ丸木橋

駆け引きに応じてからの酒の量

茨木市 堀 良江

この次の休みは家に居ることに

願いごと似顔も添えて絵馬吊す

ただ今と言うが早いか缶ビール

ママさんと思えぬバレー赤いシャツ

すずやかな一礼残し球児去る

茨木市 井上 森生

ご縁とや沙羅樹眺めてお茶を飲む

法名を唱和してくれ蟬時雨

香港の未来を知っている花火

はるかなるあぐりの里の幼き日

同窓の中に輝く顔がある

高槻市 川島 諷云児

京都市 都倉 求芽

無欲にはまだまだ遠い余命表
年寄りと思わんことに決めている
引き締めた後は緩める子の手綱
ちぐはぐな二人三脚でも夫婦
年金の枠でもがいている余生

高槻市 井上 照子

向日葵がクワツと開いた原爆忌
迸る水が迷いをふつとばす
大文字気宇壮大な右払い
盆の墓ひときわ高き雲を背に
裏道を訳ありそうな高級車

京都市 大河 未佐子

十二匹金魚一匹運があり
伝統の漆器の艶にある心
名も知らぬ国のコインをペンダント
自販機は思慮なし実にお人よし
虫すだくしい夜を影の貴方みる

大阪府 榎山 隆盛

托鉢の声あさがおの露こぼし
台風と孫がごつちやにやってきた
夏座敷絹のすだれをゆする風(杉本繁)
冥土へのみやげに馬に乗ってみる
ライラック咲けば行くよと孫送り

富山市 酒井 輝

総会屋も老人会も紅葉狩り
鰯雲乗っけてくれよ恩返し
亡母の闇光が遠くなつてゆく
印象は声の小さな女だった
妻でない名前を呼んだ秋夜長

大阪府 八十田 洞庵

負けたなと思う言い訳せぬ笑顔
CDで母子もろともよく寝付き
どのレジも同じ台詞で札を言い
娘が戻る気配エアコンONになる
ひと類がハトとカラスの街に変え

羽咋市 三宅 ろ亭

ジョークともとれる誘いに少し揺れ
カチューシャが未だ耳にある母の歌
ほほ笑みに男やっぱりくすぐられ
足もとをすくう笑顔へ近寄らぬ
ヘルメット脱いで飯場の昼にする

わが郷土名刹永光寺持つ誇り
参道の桜幼き頃の遠足路
眉丈山邑知の渦も歌となり
ノスタルジアに浸るも郷土の豊かさか
盆踊りまだすまぬらし隣村

富山県 増田 紗弓

車椅子をとりまく家族遠花火
七人の敵へ冷たい面にする
血圧が高い顔色褒めないで
年金課ちよつと横目で見て通る
日の丸の孤高みどりの風の中

静岡県 安本 晃 授

腕ふたつ妻の望みの虹を織る
人許す彩の蒼さよ秋の空
不器用な靴で裏道歩く癖
ストレスが溜まるとのぞく焼き鳥屋
チチハハの石碑もしやの声がする

富士宮市 渥美 弧 秀

霧雨の白蝶を追う冴えた朝
回向の譜亡友と語らううら盆会
年金を待つて夫婦のフルコース
富士山の借景滝は空に映え
老衰へブレーキとなる詩とピアノ

静岡県 蘭田 獏 杏

短夜に役終えた白い月
話にも毒を混ぜると面白い
土の捏ね足らぬお皿がすぐ割れる
草繁る如く煩惱絶えもせず
風荒む時に淋しや無月なり

横浜市 菱田 満 秋

幸せに見え税金に悩んでる
未亡人さえも戒名憶えてず
整頓の極意 動かさないことだ
太陽の恵みを暑いなどと言ひ
秋田杉花粉の行方想いやる(男鹿にて)

横浜市 清水 潮 華

これからを委ねる神の御手に会う
この夏を乗り切る薬飲み忘れ
水やりに出社してます夏季休暇
ペット屋の休暇ベツトが気にかかる
弱冷房猫に残して通勤車

町田市 竹内 紫 靖

父の経理 祖父の書簡の才継げず
勤め大事で亡母の作品味わわず
笑覧を乞えばフームと煮え切らず
手術台また鼻先が痒くなる
編集長がルールブックだ句読点

弘前市 斉藤 荔

稲の出来誉め合いねぶた引いている
弘前は弘前の音がねぶた笛
帰省の子まっすぐ西瓜採りにゆき
灯籠の闇に引かれていくものぞ
青りんごかじる音から秋になる

弘前市 高瀬霜石

歳とつた分だけはある友の数
忘れないことは中々忘れない
買うだけは買うが読書家にはなれず
銀婚や食後に薬のむふたり
借金に追われるわたし蠅を追う

弘前市 浅田隆樹

村じゅうが線香の匂い盆休み
ねぶた行く あしたも夏であればいい
ぜんまいを緩めて入る家庭風呂
酌む酒は悔悟の涙になるばかり
台所妻のはなうた原爆忌

弘前市 佐治千加子

原爆忌兄の夏雲ちぎれ雲
背のびして兄の声聞く原爆忌
原爆忌膝ひと抱き偲ぶ兄
原爆忌われのみ老いて北の国
ひまわりも母の乳房も老いてゆく

弘前市 中山雅城

ねぶた絵は昔のまんま三国志
送り絵ばかり見てるねぶた笛
拍手せば子供ねぶたは目を覚ます
大阪弁に相性のいいねぶた
窓開けて電話で聞かすねぶた笛

弘前市 岡本花匠

佛ヶ浦 石を積む掌になみだ雨
かっぱの湯 慈覚大師にあやかりて
米櫃と共生の恩噛みしめる
ねぶた流し女傑かなしく見送り絵
ねぶた流し夏残照へ出穂する

弘前市 肥後和香子

不用意に男うつむくから母性
許されぬ男に味つけしたくなる
うつむきの角度太宰を上回り
おもいやりの信号赤に変わる時
したたかに息子がきれいになってゆく

弘前市 小寺花峯

両隣 仲間にしたく焼くサンマ
またひとり抜け出る籍の立ちくらみ
櫓を無くしてからの舟がおもしろい
酒を酌む話に空気丸くなる
したたかな嘘は寝返りばかり打ち

弘前市 一戸ツネ

笑い声ねぶた囃子に溶けてゆく
孤独に生きその日その日の足の裏
バーコード生命線を読みとれず
衰えに拍車をかける古浴衣
雑念がめらめら燃える熱帯夜

弘前市 相馬銀波

稲を刈る今年の僕の願い刈る
最高の願いはオール一等米
新米の一膳でんこ盛りに食う
株稲を僕の小さな自慢とす
隠したい泪乾くまで空を見る

弘前市 須郷井蛙

ポケットのマッチ昨夜が焦りだす
誰も居ぬ駅でステップ踏んでいる
信号がまだ続いているちちの遺書
運動会親に似た子で尻を駆け
テレビより孫の笑顔という楽し

弘前市 櫻庭順三

喜寿祝 教師冥利に咽んでる
「先生のお陰」と言われその貌に
感謝溢れる感激満ちる肖像画
タイムカプセル修羅のねぶたが疼き出す
教え子の宇宙旅行を夢みてる

黒石市 相馬一花

素敵だと思ふ人には妻がいる
親しくて請求できぬ貸した金
巨乳には飽きてしまった乳搾り
暑すぎて昼寝しているアブラゼミ
帰宅してまず梅干の蓋をとる

十和田市 小笠原敏人

晴れ続き枯れる草木に情を寄せ
墓掃除先祖に声をかけながら
ご先祖のおすそ分けねと賞味する
たまごっち命の値変えさせる
滲む汗澄んだ音色のバイオリン

十和田市 阿部進

いただいた俸半分をおすそわけ
男なら苦しい時に意地を張れ
初孫を母の土産に里帰り
たつぷりと手間暇かけた母の味
師の言葉心の奥へ刻み込み

青森県 西谷大吾

少子化に老いた河童が淵守る
ふる里のメダカの川はダムの下
擦り減った靴が真つ直ぐ行くという
輪の中に夕陽を包む観覧車
善人の顔した狐狸の類いかも

青森県 諏訪柳々

長雨が晴れても醒めぬ倦怠期
鉄鉢に今日の喜びほどこしぬ
木偶の坊努力の才にもめぐまれず
聞き訳のない子に育て子を叱り
家路急ぐ人にみな幸あるのかナ

熊本県 高野宵草

七十年毎日嚙んだ歯が抜かれ
つかまれた藁もたまげた浮き沈み
まっさきに罫に乗ったは欲の虫
暇だからセールスマンとわたり合う

高知県 北川竹萌

先祖より家守りきた杉囲い
杉囲い伐り倒し積み息子逝く
家の側杉垣伐りて積みしまま
火に早い杉葉乾燥恐ろしい

松山市 丹下美津子

隅にいる無口を甘く見た誤算
口にしたら怒鳴られそうな今朝の夢
祖父母と同居 漢字は強い子に育ち
盆帰りハッピーエンド見合いの娘

香川県 成重放任

咲きすぎたシャクナゲ来年咲くかしら
開発に用水の川姿消し
流木も磨けば床の飾り物
口々にもの言う中に僕もいる

竹原市 古谷節夫

寅さんの風がトンボに染まってる
少年の瞳は宇宙探索機
蟻が見る夢は労働大臣か
幾山河越えて白髪と皺が増え

松江市 柳楽鶴丸

経験と体験との差姉妹
エイスケさん僕に勿体無い仇名
出雲弁で国際交流しています
見えなかったものを見付けたノーカーデー

出雲市 福田蘭水

坊ちゃんの団子しきりに世を嘆く
自動ドア私が来るときしんでる
初孫と遊ぶ日課が苦にならず
古代史の霊叫ぶ出雲展

島根県 藤原鈴江

八十歳未だ口紅をひくころ
里帰り想いの丈を夜明けまで
老化した頭をよぎるちぎれ雲
お盆です一氣に咲き出す女郎花

鳥取市 前田一枝

みな機械もう牛の出る用はなし
赤飯に小豆と栗が良く馴染む
一人居にダブルベッドが置いてある
雨上がり月見草も色が良い

鳥取市 岩原喬水

商いの先読む眼鏡売ってない
裏金をやってあべこべ罪を受け
電線は無いが世界の声が聞け
少しでも言訳ほどを貸してくれ

米子市 石垣花子

良い話めつたに聞かぬ母の耳

こんな良いチャンスと母を送り出す

針箱の空気近頃動かない

母のグラス三猿主義を通し抜く

米子市 林瑞枝

夢みなと鬼太郎いつもわが味方

ビル林立届かぬ星を追うている

人の観察犬の尾っぽはよく見分け

万葉からにんげんと生きてきた野菊

米子市 政岡日枝子

万華鏡しばらく刻を止めてみる

素顔のままで見栄を張るのは難しい

忘れ去るためにも思い切り忘れ

思い切り多く明日の予定たて

鳥取県 土橋はるお

紫に包まれ女らしくなる

使い捨てに舌打ちをするお爺さん

悪友がわたしに錆びついて困る

鳥取県 田村きみ子

格好よく松の剪定して秋に

あら嬉し娘と喫茶行く休み

二日三晩干して梅干とろけそう

人生の午後はイロハニホヘトなり

鳥取県 幸家單車

お隣と背伸びごっこをして暮す

現代娘言葉も始末して喋る

甘い声隣の部屋に洩れて来る

女の意地が破れ洪水堰が切れ

鳥取県 太田幸枝

年の差は飾りつけても埋められぬ

汗流し後は恋しい缶ビール

飾るより素顔の君が美しい

言葉巧み飾ってメッキすぐにはげ

鳥取県 西川和子

四面楚歌 魔法使いを待っている

その層の中にいるには荷が重い

それなりに飾り六十歳の青春

その時を飾るお花の種をまく

倉敷市 井上富子

生まれ家を訪えば迎えるサルスベリ

反対を唱えた舌の大やけど

鈴虫のソロを満喫する枕

岡山県 福原悦子

絵筆には絵筆の悩みコップ酒

残照に自問自答をくり返す

的にした父の背中も老いている

打ち返す鉄は先祖と私語交わす

あくせくと働く夏の蟻が居る

神戸市 山口 美穂

頑張ってと言うあいさつは聞き流す
道草が楽しく犬と今日の道

蟬しぐれ朝のコーヒー甘くする
エアコンを朝から入れて曾孫待つ

西宮市 亀岡 哲子

ちようつがい油差してる妻の役
良い事が一つしばらくこれでよい

お喋りさんに逢うて元気を貰う雨期
お茶漬の音も年ごろ赤い箸

伊丹市 小熊 江美

バス待つ間いつも飴玉くれる母
定年日男が花束もらう時

負けそうな方へ応援したくなる
老いて来て口八丁になるばかり

宝塚市 黒台 伊佐武

螢火は恋の炎か舞い狂い
無駄も良いそれがゆとりに繋がれば

恋に鳴き灼き尽きたのか蟬骸
やせ我慢したばかりに大食らい

宝塚市 上田 佳秋

行方不明のわたしを探す夜の街
秋灯下吉川英治読み直す

秋の絵の中にさまよう僕が居る
みちのくの句友と弾むネプタ祭

川西市 松本 ただし

五十年平和に慣れた靴みがく
戦前の話になると膝が出る

ゆるせない人を許して花に水
難聴へ無言電話が割り切れず

和歌山市 青枝 鉄治

鬱の日に落語全集読んでみる
嫌な奴相手もいやという目付き

充電が切れたか男舞いもどり
死に体となって顧問の席へ追い

大和高田市 岸本 豊平次

故里に思い出残る裏通り
巣立つ子に金の苦勞が気苦勞に

汚れ札気軽に使う販売機
付合いを知らずに頼む宅配便

大阪市 渡部 さと美

手早さは積木の技の家が建ち
弟より妹がよいふるさとよ

いずれ来るジャンプへさざ波のホップ
草の路しばしとんぼと道連れに

大阪市 北 勝美

友来る昔話をひっさげて
あの頃の情熱句帖にかい問みる

揮毫帖開けば墨は語りかけ
デーサーピスその日を待っている投句

大阪市 藤田 頂留子

年の差がなんだ追いつけ追い越そう
見つかった缶詰すぐに食べなはれ
つごう良い忘れ方して生きてます
戦争もいじめも片方だけが悪やない

大阪市 小糸 昭子

若者が下駄はく街を見つけ出し
庭の隅ひまわり一際高く燃え
蜂達のマンション上手く整備され
現役を譲って肩が軽くなり

大阪市 寺井 東雲

おかしいぞ日付の違う旅土産
器用だとかかにつけて便利屋に
心配いらぬ流れるように天下り
踏切の鐘に毎朝起こされる

大阪市 川原 章久

ゴム付きの流行の野暮な下駄の音
紙一枚籍が許さぬ重い枷
まだ蓄未完の恋の蓮の花
熟年の女の膝の温さかな

大阪市 福岡 雅楓

思い出の先生みんな暖かい
恩師とのあんな頃やらこんな時
先生の後ろ姿を今思う
思いやり当てにしないで終われたら

貝塚市 池田 寿美子

凌霄花ひと日の情熱惜しみなく
振りかえる道づれは亡き終戦日
木漏れ日にスケッチの瞳生き生きと(南禅寺にて)
今更に儚き恩師「路の臺」

岸和田市 井齋 一齋

彼岸僧携帯電話に悲鳴あげ
夕食に各自異なる時計持つ
汗水で母はみやげに無農菜
戦争の話になると席を立つ

岸和田市 藪野 けい子

梅雨前線百ミリこえて土石流
盆おどりラジカセながす世話係
空腹が衝動買いになるこわさ
子育てに良い子悪い子みわけぬ目

堺市 近藤 豊子

蟬しぐれやんで速達配る声
青柿の梅の実よりもおもくなり
明日香川瀬音と蟬の二重奏
明日香風青田をよぎる采女たち

富田林市 池森 子

ナイフ研ぐとき良心が折れる
ひと言に愛の存在感がない
地平線までを走った亡兄のちぎれ雲
十指みな開いて余る挫折感

羽曳野市 福田満州

青千両をむち打つごとし暴風雨

休耕田あわだち草の背くらべ

カメラアイ怪我した指も阿波踊り

お痛いのレーザー光線手術料

八尾市 高杉千歩

食欲の秋に食べたいものがない

ジーパンが穿ける自慢にはならぬ

人工の波で溺れることもある

長々と書いて苗字が浮ばない

八尾市 吉村一風

風鈴の音をもらって花鋏

タンゴ聴く茶房の窓を日傘ゆく

なつかしい夜店で下駄の音をきく

苦労話するな自慢に聞こえるよ

八尾市 生嶋ますみ

姿見のしぐさだんだん母に似て

電話すぐ切って息子の味気ない

故里に知る人もなく墓参り

片すみがやっぱり好きな喫茶室

豊中市 吉田あずき

ある記憶久々に見るカンナの新

雷のはげしさに揺る冷奴

腹掛や下駄のフアッション平成九年

子や孫の帰ったあとが夏休み

豊中市 松岡久留美

子の寝顔何度も覗く母の笑み

一人居る母をねぎらうプラン立て

妻の留守遊び仲間がやって来る

愛し子の未来に希望はげむ母

豊中市 滝北博史

若者も古典落語を聴きに行く

土用丑とにかく平和鰻焼く

陸渡御の軸になりそうギャルみこし

一回の見合いで夫婦ばくを産む

池田市 岡本吉太郎

親拒む目になりて娘は育ち行く

人生の片道切符で出でし駅

山寺で見事な出来の山菜を

学生孫嫁と曾孫を連れて来る

池田市 藤井計光

鷹揚に笑って幸せかみしめる

二十一世紀へ自然の秘境残したい

来客にヒヤシンスの花目立ちすぎ

木蓮の雪洞のような花頭

池田市 栗田久子

空の色誰の好みか青く澄む

逆らわず手折られてまた咲く野菊

風に乗り香りが季節連れてくる

少年の罪の背景見えぬまま

摂津市 井上源一

夏の雲老いの闘志に火を付ける
ひたむきに素敵な歳を積み上げる
この歳を忘れて恋に溺れよう
フルムーン亡妻の写真をポケットに

寢屋川市 岸野 あやめ

わたくしの影に疲れが出ています
隠忍自重開き直れば強いひと
デパートは歩く運動するところ
再会へせめてルージュの色を選び

寢屋川市 籠島恵子

お茶漬けをわが家で食べている安堵
飲み残し風邪ときっちり書いて置く
水道が止まる事など思ってみる
最初で最後夫も子もいる絵画展

寢屋川市 坂上高栄

肩の手を払いのけてる妻の乱
肩パッド均等法が闊歩する
肩組んで同期の桜宴終る
骸の蟬をそーっと地に返す

高槻市 芦田静江

童顔になって門出のデスマスク
兄抱くとチューしてくれるにっこりと
祭だまつり夫人同伴眼の温さ(友好都市の客)
体形に自分忘れたニユールク

枚方市 二宮山久

まず飲んで今日一日を考える
今日もまた一日過ぎた酒を飲む
妻や子のいてるローンの終えた日々
幸せの靴をみがくは僕の妻

京都府 稲葉冬葉

満点の笑顔に騙されてあげる
指が太くて頼られている造園主
百日草少し疲れが見えてきた
プラトニッククラブそんな昔のことでなし

富山市 島ひかる

富士山に憧れていた登山靴
告白は出来ずに帰る雨の中
平泳ぎ水の怖さをまだ知らぬ
母の染み付いてる父の雑記帳

弘前市 今生恵子

遠ざかるねぶたの音に秋が立ち
迷い花水に根を張ることもなく
道端にビールの栓が目立つ秋
京の街夾竹桃がよく似合い

八戸市 島田昭治

人を賞め心の花が咲きそうで
一枚の挨拶状に返答なし
改めて他人の冷たさ思い知る
恋心誰かマツチを貸してくれ

自選集

藤村 女

夜遊びの好きな狸に秋が来た
 廃坑の山美しく紅葉する
 リンドウの淡紫に亡母恋う
 夢担ぎながら傘寿越えました
 枕だけ知ってる老母の涙壺

波多野五楽庵

盲点をつかれた肺のたちくらみ
 蜉蝣のはかない影にまだ逢えぬ
 つねならむ日もゆつくりと風車
 喪に耐えるうなじの白さ見てしまふ
 なにを残そうと一行愛を書き始め

黒川紫香

肩組んで沖のカモメを見ている
 ビルとビルの狭間で秋の気配知る
 尾道で知らない女と坂を降り
 岩風呂でおいでおいでをしてくる奴
 曾孫に買ってやりたい赤い靴

八木千代

紫陽花枯れてからすれすれの低飛行
 予約日などは無視 仏さまご一行
 お盆だな仏の行方解りだす
 菩提寺の路は仏の大通り
 月の下 仏千手の盆踊り

松川杜的

何処の何方か札をして擦れ違ふ
 光背の一つ一つに仏の眼
 ポスト迄影の露路ろじを選つて行く
 甲子園カメラは美人の胸も撮り
 長蛇の列見て鐘は諦める（六道語り）

奥谷弘朗

要点をばかして逃げる手を使い
 辻褄を合わす気ままを笑うまい
 風格がにじみ出ている筆の跡
 若さとは年齢でなく心だよ
 笑顔こそ最も美しい花と知る

金井文秋

頑張れぬ齡です無理をしなさんな
うぬぼれといつも同居の樂天家
脳の活動いつも睡魔に邪魔される
暫く見ぬ間にえらく小さくなった老い
老化への一段階の杖を持つ

月原宵明

連敗へ長鳴だから投げ出さぬ
あぐりから朝が始まる無為無策
榮養がよくて肥えるをなぜ嘆く
胸襟を開くたんびに借りが増え
女史の名に欲求不満耐えている

小林由多香

寝たきりも困るが姑元氣すぎ
口下手で口をすべらす事がない
吸い殻を数えてたばこやめきれず
蟬しぐれ抜歯の痛みまだとれぬ
賽銭をはずむと神が近く見え

正本水客

目に見えて恢復してるのがわかる
ゆつくりと沈む夕陽にまけていず
このままでいいと夫婦とも思う
紀伊国屋おとこの待合い場所という
旅にいて豆の青さを目にのこす

恒松叮紅

見栄八分あって糸目はつけぬ金
包丁を研いだら妻のテープ絆
涼しさへ男冥利の大ジョッキ
電話ならいいが苦手な手紙文
旅の恥捨てて宿下駄闊歩する

辻白溪子

引き金になって噂が結ばれる
羅漢まで踊り出しそな顔がいる
言葉尻本音が愚痴になっている
胸借りて泣きたい日があり妓酔う
方言に温みが残る島の地図

藤井明朗

親の愛が乾く子が迷路を走る
老人に聞える耳をきらわれる
いい話題選ぶ待合室の話
人生の縮図病気で巡り合い
残暑きびし豊作型に風なびく

遠山可住

五寸釘スパツと打って男なり
年寄りのたわごと糠に釘と聞く
着ることも最後叙熱のモーニング
パレードの先頭この子も親を継ぐ
お口には合わねど洋菜供えとく

小西雄々

理想郷にはほど遠いわが故郷
鳩尾に溜った汗が炎えたぎる
かじかの声も川から消えて風の音
自分史を起爆剤にし立ち上がる
蛍飛ぶ村にするまで流す汗

西田柳宏子

歓喜会に善男善女阿弥陀経
しなやかさ鍛え抜かれたウルトラC
殺人犯判決までの永いこと
新盆に同情集まる不倖せ
よいところは独り占めしてボスと言う

野田素身郎

孫が泣く油蟬が鳴く猛暑
思い出のすこし煤けた喫茶店
休みたい散歩にちようど雨が降り
貪欲に吸い飛べなくなっているやぶ蚊
秋が来た油断していて蚊に咬まれ

野村太茂津

近畿の盲腸手術に行った甲子園
関西の寄り道と歌山城をアッピール
弁天さまに和歌山起こされる
優勝和歌山弁財天さまホームラン
鬼監督時に弁天面被る

高杉鬼遊

しのびあい すし屋はそれとなく分かり
シルクロード歩き疲れた馬の骨
会席はいらない老いの松花堂
電話から食べていますかおじいちゃん
自転車で百夜通えるのが男

河内天笑

誉められて百足は歩けなくなった
蟬昇天 行き倒れとはこのような
まだあてにされているからがんばろう
奥さんの字でパーティーに招かれる
矢じるしや夏至のあじさい憎らしき

橘高薫風

母十七回忌
仏恋数珠持つことの多い年
親不孝者も七十一になり
秋ふたりまるで果物静物画
世紀末絵巻暗澹ダイアナ妃
この恋というものの抜け殻亡骸

麻生路郎著「新川柳講座」から

川柳とは人間及自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる内容を、平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩である。

川柳太平記 (233)

川柳の群像

小出智子

東野大八

小出智子さん、小生の愛称「智ちゃん」は、大正15年10月28日の誕生で、エトで言えばちょうど私の一回り下のトラ歳である。

七十はさほどに遠きことならず 智子
の句を詠みながら平成9年6月22日、享年71で逝去。法名も昨日にかわる智光院浄譽妙重大師の長つたらしい名になった。

五十九歳これから川へ洗濯に 智子
「おや、貴方ももう還暦だな」とこの句を眼にして思わずそう口走ると、この人、例の人なつつこい微笑を少し苦笑気味に

「いよいよ楢山行きの適齢期ですよ」と応じられた。この人が昨年秋だったか、川柳塔社理事長の要職につかれた時は、「どうしよ、どうしよ」というお便りをつけて

胸のバッジと討ち死にをするまでだ 智子
の句にホッと一息ついたのを想い出す。

「川柳塔のお母ちゃん（天笑）とか、肝っ玉智子さん（紫香）と慕われながらも、そこはやはり芯の強いトラ歳、内心「こうとなればやるまでだ」という決意が見てとれた。

生前の智子母ちゃんは、『川柳塔』誌の目次下へ、さりげなく素直な、ほほえましい柳文をよく書かれていた。それは数えれば十指を越えている。その中から、彼女の生活ぶりの一端を抄録し、彼女ならではの秀吟を添えておこう。

「主人（小出常晴氏）は、定年後病氣をしたらせいもあって、引き続いて仕事にはつけず、元来が商家の生れで、至ってこまめな人であ

るだけに、毎日をもて余していた。それだけに新聞に載った『男の自立』記事をすっかり読んでいたようで、それからというもの、以前からやりかけた趣味にも積極的になり、医者からも運動を勧められていたこともあって、掃除と買物は自分の仕事と決めているようであった。どこで習ってきたのかてんぶらは主人の十八番で、味も私のよりも美味しい。私が出掛ける日など、決ったようにてんぶらを揚げてくれる。息子からゴキブリ亭主呼ばわりされようが、一向気にしていない様子だ。我々戦中派の人間としては、何か夫婦の存在感とか、相互の愛情の交換とかが希薄になりそうなのがしてくる。そこで主人にはできるだけ負担をかけないように、甘えてしまわないように心掛けておれば、お互いに楽しくやってゆけるのではと考えるようになった」

（昭63・『川柳塔』「夫もたのしく」）

こうした間柄の夫婦仲だけに、その暮しぶりの智子調の句が面白い。

うちの酒が美味しいなどと言いはじめ 智子
一緒に死ねない夫婦茶碗かな

諍つた夜も枕が二つある

夫にお伽噺をしてあげよ

妻とした約束だからすぐ忘れ

” ” ” ”

夫婦にも黄門さんの来る時間 智子

「長男が大学を出て就職してから初めての連休に、思ったように『母さん、北海道へ連れて行ってやろう』と言いつ出した。二泊以上の旅をしたことがなく、まして息子と一緒になんて私は思いがけないことであった。寒い所というだけに、バッグにあれもこれも詰め込んだのだが、息子の点検で防寒用の半コートと肌着四、五枚と決められ、ついそこまでというようなスラックス姿で旅立った。(略)さっきまで大阪に居たのに、もう千歳の滑走路を滑るように走っている。滑走路の両側には、眼を疑うばかりの大きな露の臺が一面に並び、それは見事な出迎えをうけた。(中略)それから十年の歳月を経た今も、私の得難い宝として胸の奥深く仕舞い込んである。その後、北海道を訪れたが、あの日のような感動はもう無かった」(昭60・『川柳塔』「息子との旅」)

長男の写真が少し多すぎる 智子

平成元年ごろの小出智子句集『路の臺』はこの時の感動によるものと思われる。

「十年程前になるでしょうか、夫と二人で私の先祖の墓を探しに出かけたことがある。

(中略)和歌山県伊都郡かつらぎ町志賀。こ

の土地では自分の持ち山の一廓に墓を作る風習がある。私が十二、三歳の頃、父に連れられて歩いた遠い山道を思い出しながらたどりついたのは……。八畳の部屋ほどの広さの墓地に、数えてみると二十基ある。墓石の裏側を見ると隣にある人の名が刻まれ御先祖の墓地に相違ない。言い知れぬ懐かしさと感動で私は落ちる涙をどうすることも出来なかった」(平6・『川柳塔』「仏縁」)

『川柳塔』目次下の「智子随想」十数編を重ね読みしながら、彼女の並々ならぬ、氣どらぬ才筆に胸うたれた。

道を聞くだけでも人の選り好み 智子

人には情けお地蔵様によだれかけ
あじさい寺の冬を想像せぬことだ

銀色で描く故里の冬景色

智子夫妻には二人の息子たちが居て、その孫たちも二人いる。その孫たちとのあどけないやりとりの一文「好々婆」などは、ほほえましい一幕で語られている。

合格をしたのか会釈してくれる 智子

母の瞳にこの母鳥も苦勞性

失敗でふくらんでゆく雪だるま

可愛らしい鼠に描いてやりましょう

短冊に小さな過去が書いてある

ほっとした処に置いてあるみかん 智子

「もう八年位前のこと、智子さんからの電話で、おたくの近くに木本八幡宮があるかと聞かれ、家の二階からよく見えるというのと、智子さんが私が嫁いできた時、このお宮に小出家の先代の献灯籠があるはずと言われ、調べてみると、小出仙次郎の名があると答えたのが縁で、お話を交わすうち、なんと智子さんは和歌山の生れで、大阪でのお住いと、私そっくりなお身の上に、思わず大阪市歌を電話で合唱しました」という桜井千秀悼文がある。その他、親交のある人々の悼文と、遺影に飾られた『川柳塔』の平成九年八月号をくり返し目にしながら、遠い弘前の旅の日のことを思い浮かべた筆者は、弘前公園のベンチで二人して向い合った日のことを昨日のように思い出したことである。その柳談の中で

「貴方は中尾藻介さんの句が好きですね」と口走ると、つましやかな彼女が大きくコックリと「図星です」と満面に納得の微笑を浮かべられた陽の明るさを今も忘れない。

魂はハンドバッグに入れてある 智子

今にして子が膝に居た頃はよし

名曲をゆっくり聞いている仏

▼次号は「岩本雀踊子」

古川柳歳時記

10

『神無月』

清 博 美

陰曆十月を神無月という。では、なぜ十月を神無月と言うのだろうか。

俗説としては、十月十一日から十七日まで七日間、日本中の八百万の神々が、出雲大社において、男女の縁を結ぶため、銘々の社を留守にして出雲に立出されるので、この十月を神無月と呼ぶというのである。

しかし、この俗説は神無月に付会した説のようで、今一つ納得出来ないものがある。そこで、手もとにある、二三の江戸随筆をひもといて、本来の意味を探り出してみたいと思う。

まず、『北窓瑣談』には、「一、本邦の俗、十月を神無月といふ。和書を説人、種々の異説有れども、皆牽強附会の説にして信ずるに足らず。余考るに、本邦倫家用る律呂の

配当、毫越し律を黄律に当て、十一月の律とす。故に十月の律は上無律に当る。是に依て十月を上無月といふなり。」とあり。

『年山紀聞』には、「十月を神無月と名付けるを、奥義抄には、此月諸神出雲の大社に集りたまふ故に名付けるとあり。つれづれ草には、此月大神宮へ諸神あつまりたまふ故に名づくといへど、おぼつかなしと書たり。西山にて御夜話の次で、此事に付て仰にいはく、万葉集第十三の歌に、露^{つゆ}之^の日^ひ香^か天^{あま}之^の九^こ月^{つき}乃^の鐘^{かね}礼^れ乃^の落^{おち}者^{もの}といふ歌あり。月令には仲春之月雷始収声とあれど、されは大方の事にて、右の歌には九月にさへ霹^{ひそ}靂^{れき}をよめり。されば十月は純陰の月なれば、雷の声をさまりはつる故に、無雷月といふなるべし。同書に、神の如聞ゆる滝とよめるも、後撰集に、

『ちはやぶる神にもあらぬ我中の雲井はるかになりもゆくかな』とよめるも雷神なり。伊勢物語に、神さへいといみじつなりと云々。此外猶証歌おほし。考へてしるべしとのたまはせたり』とある。

『嘉良喜随筆』は、「神道者ノ申スハ、十月二神社ノ御留守ト云ハ、十月ノ十六日ヨリ廿五日迄ノ事ト云。是モ理不通。只十月ハ無陽月故ニ神無月ト云事也（幸充『箸』云、徒然草ニモ説アリ。又出雲風土記抄ニモ、又三部ノ書ニモ説アリ。神在月等ハ不意会）」と記す。

そして『卯花園漫録』は、「神無月の説、或書に、十月は極陰の月也、陰は則鬼なり、陽は則神なり、依て陽無月といふをなん、神無月といふと、又或人の説に、十は極数にして上なし、故に上無月也、といへり、十二律の名目を考るに、十の調子を上無と称せり、神無月の称、慥に此数より出たるならん、と語られし、」と人様の言を引用するのみである。

なおもう一つ、『屠龍工随筆』をひくと、「十月を神無月いふは、諸神伊勢へ集給ふゆへと徒然草に書たれど、伊勢にては其沙汰なし。出雲にこそ諸神集り給ふとて、彼国にては神有月といへど、我世に専ら言所に随ひて

左はいふにや。又古くより言ひ来れる事にや。然れども十月はからさてといへて、国中大祭にて家々門戸を閉、海浜より白蛇の上るも此時なりとぞ」と説明している。

さて、神無月の称の由来は何かということ、諸説を長々と引用して来たが、どうもこの説だといって納得出来るものがなさそうである。そこで致し方なく、現在の国語辞典中最も大きい『日本国語大辞典』の説明をひもといへることにしよう。

「かみなづき」の項を開くと、次のように説明されている。すなわち「（『かみなづき』とも表記）『かみなづき（神無月）』に同じ」とある。

そこで「かみなづき」の項をみると、「（「な」は「の」の意で、『神の月』すなわち、神祭りの月の意か。俗説には、全国の神神が出雲大社に集まって、諸国が『神無節』になる月だからといひ。広くしんじられた陰暦一〇月のこと。かみなづき。かみなづき。かみなづき。」とある。そして、以下一一項目にわたって、その語源説を記載している。すなわち、①諸神が出雲に集合し、他の地では神が不在になる月であるから。②諸社に祭のない月であるから。③陰神崩御の月であるから。④カミナヅキ（雷無

月）の意。⑤カミナヅキ（上無月）の義。⑥

カミナヅキ（神嘗月）の義。⑦新穀で酒を醸

すことから、カミナシヅキ（醸成月）の義。

⑧カリネヅキ（刈稲月）の義。⑨カはキハ

（黄葉）の反。ミナは皆の意。黄葉皆月の

義。⑩ナにはナ（無）の意はない。神ノ月の

意。⑪一年を二つに分ける考え方があり、ミ

ナヅキ（六月）に対していま一度のミナヅ

キ、すなわち年末に近いミナヅキ、ミナヅ

キ、カミ（上）のミナヅキという意からカミ

ナヅキと称された。などと列記している。

さらに、「かみなしづき」の項には、

「『かみなづき（神無月）』に同じ。＊奥義

抄―上『十月 神無月 天の下のもろもろの

神、出雲にゆきてこの国に神なき故に、かみ

なし月といふをあやまれり』」とも説明して

いる。

どうやら、「神無月」の語源に未だその定

説はなく、曖昧模糊としたままで、さすがの

『日本国語大辞典』も、定義づけが出来ず十

一に及ぶ諸説を紹介するにとどめざるを得な

かったようである。

つまり、十月をなぜ「神無月」というか、

ということについては、様々な説があるが、

皆目わからないというのが正直な答のようで

ある。

＊

風の手で木の葉を削る神無月

かなな月木の葉も削るやうに落

―右二句、落ち葉する模様を「カンナ」と

「ケズル」の語を掛けた狂句。

神無月都へのほる両大師

御寺号がかますに余る神無月

―慈恵・慈眼の両大師は上野三十六坊を順

々に遷座されるが、十月だけは御本坊に

遷座となる。また十月二日には練供養が

行なわれるのでお賽銭の寛永通宝（寛永

寺に掛ける）がかますに入り切れぬ程集

まる。

神無月菅人りのこつて笑つてゐる

―他の神様は皆出雲に行かれるのに、夷様

だけは江戸に残り、恵比須講の主役。

神無月かまどの絵馬も閑古鳥

―荒神様も出雲へ。

神無月さんせん箱の肉がをち

―神様が居られない神社は参詣者も少なく

賽銭も減る。

神無月鳥居の内の閑しき

―出雲大社では神々が縁結びの作業でだい

そがし。

出雲で八十一ちあると神無月

―出雲では十月以外の十一月が神無月。

秀句鑑賞

同人吟 林 瑞 枝

— 9月号から

ずい分永い間、川柳にたずさわってきた私にとって、修身のような句よりも、やはり現在の世の中に立ち向ってゆくハングリーのある句に興味津々というところです。

鳥取県出身の東京帝国大学卒業という、自由律の俳人、尾崎放哉の墓のある四国の小豆島へ、柳友五人で連絡船に乗って行ったのは七月二十日、墓所は坂を登っていった一番高いところにあった。放哉記念館にも入り、生前の手紙や愛用された道具を見て感動した。眼の前、魚がとんで見せる島の夕陽に来て、
いる
放哉

いれものが無い両手でうける
一日に一度は感動をして作句したいと思っている私に、少し詩歌の世界に近付いたような凄じ刺戟であった。川柳も説明句は面白くないが、比喻を利かして柔らかく表現されると、感動を与え、ご自分の体験で鑑賞して頂けるのではないのでしょうか。

世の中を見る目が変りそうギブス

宮 尾 みのり

思いがけない災難に会い、ギブスをさされて身の自由を失ったら、きつと手足の有難味がよく解る。世の中は思い通りにならないことを子供に教えてやるのが親だから、神もきつと反省をうながしていらっしやるかも。苦あれば楽あり、全治されて翔ぶ日も近い。

曲れない胡瓜にストレスたまってる

都 倉 求 芽

昔は曲った自然の胡瓜が、一山いくらで売っていた。曲った胡瓜は野性味があつておいしかった。どんな栽培法なのか、自由を奪われた胡瓜はストレスを溜め、いつか発散したい気配。曲つたら市場価値が落ちるからと、気を付けの姿勢をくずさないのだ。

蟻たちが葬るひたすら鳴いた蟬

高 野 宵 草

蟬の亡骸に多くの蟻たちの群がっている庭の隅。その上を被うように木の葉が散り、秋雨が降りそそぐ。昆虫たちの死骸もろとも腐葉土となり、土の栄養となる。そして、あくる年はおいしい茸が生えるから、自然の営み

は時間と共に美しく展開される。
九十の親に逆らう馬鹿でなし

神夏磯 典子

父が亡くなってから十年の歳月を、ひとりで頑張っていた母。その九十歳の母を、我儘だと叱つたりした私。何という親不孝なことをしたと、九十二歳まで生きてくれた母に詫びることしきり。典子さんは優しいから大事にして上げられるのですね。九十歳の気持は九十歳になって初めて解るのですもの。

深い秋絵画にとかすひとりの言

柴 田 英壬子

野も山も秋の美しい情景を、どんな気持ちでどんな絵を画こうとしていらっしやるのか。落ち着きと自信に満ちた女としての秋の彩をいろいろな色で描いて下さい。新しい明日が展開されることでしよう。

露天風呂に昭和担った手足あり

古 川 喜美子

こちら境港市の「夢みなと博」の会場にも温泉が湧いた。日本列島あちこちに露天風呂があつて、激動の昭和を生きてきた私たちの年代が、漸く、重荷をおろしてゆつくりと温泉に浸れるようになった。刻まれた皺の一つ一つが永い歳月を物語っている。朝のNHKドラマの「あぐりさん」たちも、温泉で手足

を伸ばして欲しいですね。

欲みんな消えると体透けてくる

田中 正坊

地位も名誉も財産も、すべて儚いものとして欲を離れると、人間の毒気が脱けて身も心も研ぎ澄まされて透明になると言ふ。なかなかそういう風になれないのが人間なのです。

友の計へ蠅一匹がたたかれず

吉田 あすき

この春の同期生会で笑って語り合い、電車に乗って帰った友だちが、新聞の死亡欄で心不全で死すとは、青天の霹靂、仰天した。この世に一度しかない命なら、油虫や蠅でも叩くのは止めようと思ふ。

杖にする木にはたっぷり水をやる

小池 しげお

誰もが期待をかける子には、お金をかけて望む学問をさせたいのが親心。だが期待をかけ過ぎ、たっぷり水をやり過ぎて木を枯らすこともあるからご用心。

生き様を問われる靴が脱いである

門谷 たず子

人は靴の脱ぎ方にその人の品性が表われる。靴の形の履きぐせや、靴底を見ると性格が解る。わが家の孫たちの靴は、でかくてこの世をはばかりず、自己中心的だ。二十一世

紀を双肩に荷う若者たちのエネルギーが漲っている。

幸せだったの一言何より重し

奥田 みつ子

母が膝を揃え座りなおして、主治医の先生に手をついて「私は本当に倅せ者でした。有難うございました」と挨拶をして、九十二歳で明くる日に逝去した。智子さんもそうだったのですねと、思わず手を合わす私です。

愚痴捨てて海は荒れてるほうが良い

山本 義子

おだやかで青く美しい海には愚痴は捨てにくい。夏の日本海では水難事故が発生する。今年も沖へ沖へと流されて波にのまれたボートの大学生を助けようとした男性が、荒波に吞まれて行方不明のニュース。荒れてる海へ愚痴ぐらいは大声で叫んで捨てて下さいね。波があらうに水平線はおだやかだ

白根 ふみ

渚はざんぶざんぶと波打っているが、遠く弧を描く水平線はとても静かで波は見えぬ。遠い沖は、人生の終着駅か、始発駅かよく判らないが、遠くにいる孫は可愛いものだ。

グラウンドに立つと走ってみたいくなる

柳 楽 鶴丸

人間いくつになっても母校のグラウンドは

懐かしい。鶴丸様のお若い頃を想い出すと、精悍な顔つきで、母校のグラウンドを、高校野球のランナーのように、すばやく走ってみたい。その気持は素晴らしいですね。

影を見てごらんよ人はみな同じ

時 広 一路

人は皆一つの自分の影法師を持っている。秀れている人も、私のような者も、影を一つは持って生きている。メロンとトマトとを比べて、どちらが秀れているかは比較は出来ない。それぞれに個性があつて、誰も生まれた時は丸裸だった。

借りがあるだからほこ先すぐ曲がる

川崎 ひかり

太陽という大恩をうけ地球上に生を享けている私たち。人と人との摩擦を生じる借りがあつたら言いたいことも言えぬのが社会です。花ばさみわたしが羽化をする時間

倉 益 一 瑤

これから花鍬を持って一瑤さまは、ご自分をどのように主張しようとしていらっしゃるか。日頃の想いを花に託して自己投影のポーズでしようかしら。

迷いみち蜜に明かり借りにゆく

春 枝

減点法私がすぐにゼロになる

重 人

シャープペンシル男の愚痴がつまつて

武庫坊

水煙抄

西田柳宏子選

今治市 野村清美

コスモスが揺れてやさしい里の道
振袖の写真は孫のお年頃
ドラマだと知りつつ涙止めどなく
煮て焼いて食べてひとりの皿洗う
今日も無事沈む夕日に手を合わす

高槻市 傍島克治

猫だけが膝で甘えて四面楚歌
土用丑うなぎ嫌いの子が一人
外出についての頼み多すぎる
どの顔も賢母に見える参観日
なん人が分かつて見てる美術展

河内長野市 大西文次

妻に似て隙も油断もない娘
掬われて金魚仮設に身を寄せる
間違えて妻に渡したラブレター
ほどほどと言っむつかしい塩加減
酪農の体験をする乳しぼり

富田林市 藤田泰子

開かずの間となり久し四畳半
頑張らぬようにと医者に諭される
ゆつくりと本をお読みと雨が降る
若い気でいるのに小さい針の穴
老眼鏡だんだん狭くなる世界

八尾市 村上ミツ子

寝たきりの老母に心配かけている
ため息を演技と見抜く妻の勘
羽伸ばすところを広くとっておく
ほんとうの歳を知ってるベレー帽
父さんの汗がしあわせつれてくる

横浜市 保田絹子

温もりの智子句抄に降りしきる
野暮用も家事も省いてショッピング
持ち出しの多い農夫で元氣です
締切日作家並ねと皮肉られ
月末の財布小銭でふくらませ

豊中市 石川 勝

欲しいものなんでもあって不自由な世

疲れたなあ善人の振りもうやめた

さびしいと自分に聞かすハーモニカ

3ミリのじゃこにも3ミリの命

留守電を逆に使っている居留守

今治市 塩路 よしみ

病窓の夜景に飽きたつりしのふ

虚も実も捨ててひたすら医者通い

余白いま刻む時間が速すぎる

初対面交わす名刺におじぎする

脇役でサシミのつまに自負がある

高槻市 江原 秀夫

見栄八分 本音は二分の酒を注ぐ

与野党の境の道が混んでいる

目が肥えてしみじみ思い知る恐さ

いつからか父の威厳の消えた背な

ばけの振りほんとにほけるかも知れぬ

和歌山県 杉山 精子

砂をかむ明日の糧にするために

エゴイスト消えない限り核が増え

骨相も手相も幸に縁遠い

負けて勝つことだつてある青い空

言い出せぬ言葉ずっしり腹の底

伊丹市 樫谷 郁子

手摺みで海の男は鍋を炊く

セピア色の写真と語る雨の午後

行きずりの亡夫に似た人樂しげに

孤独とふたり自由もあつた一周忌

初盆に涙を拭いてさあビール

寝屋川市 瀧本 八十八

条約を破られ悲慘大地の子

国民の勘忍袋破れそう

水車小屋暮しの知恵が脈を打つ

旅の恥 黄表紙に書く膝栗毛

恥も芸 人生茶化す春団治

大阪府 澤田 和重

みな陽気に河内音頭がしてくれる

梅雨晴れ間 朝から洗濯機が笑う

温泉とお寺になじむ歳になり

傍目には気楽に見える老いひとり

嘱託で仕事の鬼も丸くなる

大阪市 杉澤 汀

八・二五 二度とこの身は捧ぐまい

国敗れ修身丙の大富豪

目と耳を塞いで汚濁駆け抜ける

伶俐者ばかりでこの世息苦し

何のかの言うては飲んで食って寝る

愛媛県 中居善信

畑を打つきつと陽の目はあるだろう
駆け引きの出来ぬ男のストリート
言い訳がすらすら言えるから恐い
定年へ半端な役を持つてくる
躓いてそれから貝になっている

北九州市 岡田幸生

朝弱い妻の自慢がお漬物
潮騒と汽笛が好きで住む港
偶に来る嫁の料理がカタカナで
老いた医者 酒のことなど問いもせず
ふんふんと相槌うてば済む話

高知県 百田幸

思うとおりに言える夫婦で仲が良い
おせっかいと思うだろうが口に出る
何時の間に咲いていたのか百日紅
くまぜみが夏だ朝だと急ぎたてる
何時逝くか分からないから夢がある

寝屋川市 角野仁清

間引かれた菜っ葉が主役朝の膳
滑らかな菩薩の背に満ちる慈悲
女ひとり生きてくための肩パッド
窓からの景色を僕の庭とする
自転車に三人乗せて母強し

和歌山市 森口美羽

燃えつきるまではあなたと歩きたい
素直さが取り柄で主婦に甘んじる
金婚の夫婦すっかり枯れた味
ブランコをゆらゆらさせてまだ迷う
信じ合う人と歩いて満ち足りる

日立市 加藤権悟

八月の黙禱せみの声ばかり
少年にもどれば故郷の絵は描ける
土となら似合う遠慮のないくらし
良く笑う愚直な妻が居て安堵
ひめゆりの塔が悲しい八月よ

泉佐野市 稲葉洋

もう絵にはならないなあと老い水着
蛸焼と麦茶であきず身を嘆く
昇給の倍率だけが遅れとる
落胆もせず感激もまた薄れ
足元を見る余裕出来恐さ知る

高知市 細木子龍

幸いの確認をする爪楊枝
七十路に藁をも掴む物忘れ
歳時記を背中に張った儘の古稀
都落ち土佐に馴染んだ酒の味
世辞一つ言えぬ男が丸く逝く

鉢植えの限界を知る茄子トマト 高槻市 乙倉武史

台所の死角ゴキブリ夜を待つ
大阪でオリンピックの皮算用
おしゃれっ気まだあり人生あきらめず
墓参り済ませ心が風いでいる

札幌市 三浦強一

リストラの切り取り線が伸びてくる
セールの話題も尽きてから粘り
七色の絵の具で足りぬ陽の恵み
憲法に第九条のある誇り

カチワリと汗と涙の甲子園

益田市 岡田たけを

嫁さんへ作り笑いが上手くなり
茶髪の子五人が墓を建てにくる
笑顔だけは絶やさぬように年をとり
三狼で妻と嫁とが睦ましい
いつ死んでもよいからと今日生きている

羽曳野市 川田晋

孫が来て現役主婦に戻る老婆
論すほど頑なになる反抗期
あいまいに笑うと余計笑っ込まれ
気になるが嫁に気兼ねの孫の箸
妻に注ぐ分だけ減った缶ビール

家中を子供が占拠夏休み

おかめひょつとこ仲良く踊りの輪に入る

冷や飯を茶漬ですます老い二人

七人の孫どの子もみんな母に似る

味噌汁の味に安堵す帰省の子

横浜市 田中笑子

肩書きを捨てた途端に友が減る

暑いねの他に挨拶でてこない

洒落っ気をなくさず歳を重ねよう

熱帯夜 時計音だけ元氣よい

暑くともサラリーマンのネクタイよ

和歌山市 楠見章子

郵便番号増えて落ちつく場所さがす

のたうちながら台風拳固ふり回す

カーナビがあってもやはり地図を見て

若いなあちようちよ結びに腕組んで

分別収集主婦の仕事がまた増える

今治市 越智青園

心配がふえて櫛まで通らない

毎日がニアミス肥える暇がない

気短でエスカレーターでも歩く

出来もせぬ長寿の秘訣聞きたがる

土つけて野菜新鮮さを競う

晩酌もいつもと同じ誕生日

横浜市 金森徳三

靴下を立った姿勢でまだ履ける

考えるトイレに欲しい冷暖房

鉢底になめくじじつと堪えている

鳥取県 原みさを

慣れた道えらんで老いの保身術

教育論太い根っこが枯れている

枯れ果てた鎮守の森で笛を吹く

枯れ枝の上で大言壮語する

兵庫県 大谷幸次郎

土用丑うなぎがビール所望する

長すぎる祝辞ビールも汗をかく

古希迎えやつと自分に辿りつく

万策が尽きても負けぬ母がいる

愛媛県 黒田茂代

人嫌い魚と遊び鳥と飛び

過去の糸たぐり小さな自伝書く

葬送の音色がチェロの性に合い

気紛れな指と見抜いているピアノ

大阪狭山市 伊藤尚子

若かりし頃ふり返るよき余生

下駄履いてカラコロ孫と夜店の灯

余所行きの顔して孫がやって来た

待っている部屋の不気味なハト時計

真っ直ぐな道を歩いて歪む靴

富田林市 杉本とも子

親切を素直にとつて笑われる

風鈴が無口になって暑い午後

相生の松も耐えてる余生なり

今治市 村上久美子

やじろべえ やはり情けに傾いた

差し障りあって自伝はまだ書けず

傍目には喜劇ビエロは命がけ

酔うたふりしてもやっぱ言いそびれ

岸和田市 不破仁緑

旨すぎる話 途中で酔いが醒め

借金返済ぐつと飲み干す大ジョッキ

天井もまむしも食べて蚊に食われ

元氣のない金魚ばかりが狙われる

京都市 勝山美千代

ごね得のはんこ一つにしわが増え

価値観の違いでもめる母と娘が

共稼ぎ置き文交わす走り書き

ばあさんの生きざま語る丸い背な

羽曳野市 安芸田泰子

一刻を少女にかえずシャボン玉

熊蟬に明け蜩に暮れてゆく

綿飴に昔話が溶けている

灯を消して月の光を招き入れ

池田市 木村 一 笛

北新地素面で通る昼下がり

炸裂の花火に浴衣誘われる

祖母の背でデンデン太鼓泣き寝入り

勇み立つ祭り囃子がコンチキチン

河内長野市 水谷 笙 子

塩胡椒足りぬ娘が嫁にゆく

葡萄の種とばす遊びを知らぬ子ら

向日葵が嵐のあとも咲いている

長男のやさしい言葉我も老い

今治市 渡 邊 伊津志

母偲ぶ匂い袋が捨てられず

テトラポット昔の音はもう出ない

灯台の光は今日も温かい

決心がついた女性が海へ来る

三重県 佐々木 森 哉

酒ちびりちびり明日のブランを組み立てる

歳かさね罪を重ねて瘦せる骨

三代同居皿にしあわせ盛ってある

河内長野市 印 藤 智 子

孫連れて通天閣の戦争展

被爆した弁当箱はただ無言

子に我慢 夫に我慢もう止めた

定年後 夫が主婦の座を占める

鳥取市 山 本 崇

暑くても緑の木の葉笑ってる

独り者自由奔放に見えるだけ

病院でお久しふりと友も老い

睦まじく頼りあってる老夫婦

横浜市 秋 元 和 可

ハイチーズ条件反射Vサイン

限られた脳に情報溢れ出す

話題作読んで会話の仲間入り

我が家にも不正融資がたまにある

尼崎市 田 辺 鹿 太

留守番の犬も居眠りする炎暑

開運のきざしか金をよく拾う

消しゴムが未練の文字を消したがる

世渡りの達人いつも腹八分

松江市 浦 辺 静 江

エプロンがたまにストレス溜めている

良く動き良く眠れてかちよつと肥え

晩酌が過ぎて口数多くなり

幸せを逃がしてならぬ妥協する

大阪府 奥 野 義 夫

極楽を見て来たように僧は説き

気休めの嘘みな置いて見舞客

大阪弁一円値切るしたたかさ
うるさいと怒鳴って夫負けている

横浜市 川島良子

大往生綺麗に生きた人だもの
末っ子は歳をとらないものらしい
老いてゆく母には一日が長い
塾へ行くみんな行くから僕も行く

海口市 谷口義男

苦労した親の子育てなど知らぬ
言いたいのが負けて置くのも親の知恵
味も香も外国産に慣らされる
空気のように見過していた妻の愛

大阪市 一本勇太

得手不得手それぞれ何か一つ持ち
光ってる夢に余白を賭けてみる
無駄な日もあって世間が面白い
ほんとは空っぽだった知恵袋

八尾市 驚見章

朝食を待つ病床に蟬時雨
何処へ行くあてもないけど鬚剃って
川柳にふけり自ら慰める
再びは還らぬ歳と病む足と

横浜市 宮村ちよ路

風船もお喋りしたい風がくる
短くて痩せる暇ない夏休み
見てられず時々遺影抜ける母
代表の献花靴音ひびかせる

和歌山市 木村親路

嘘一つ真実負かす時もある
石仏悩みを聞いてくれる顔
戦中派私も古くなりました
資産より調べて欲しい脳軟化

八尾市 平川幸枝

煩惱に蓋をしてから生き延びる
浮気する天衣無縫が憎めない
百の目のたたみいわしの空の青
風景を愛して過疎の嫁になる

横浜市 岡田芳江

紅色の絵の具私を染めていく
チョコの苦味チョット大人をかみしめる
旅カタログながめながめて夏終る
不ぞろいの野菜それなり自己主張

大阪市 三浦千津子

愛貰う昨日と違う今日がある
微力出し切り冷や汗を溜めている
碁仇のひとりに口で負かされる
生きのよい言葉と出合う市場籠

八王子市 井上京一郎

盗む刺す殺す野球の物凄さ
言い負けた背なへ二の矢が容赦なく
戦いはおんな二人の台所
投函のあとで名句が浮かぶ悔い

大阪市 中井正秀

この体取扱いに注意する

山小屋でびしょ濡れの靴干している

定年後お前が大將ついで行く

掃除機がたまには俺も掃除せえ

和歌山県 中後清史

波に乗り損ね路傍の石でいる

落ち込んだ背なへ追い討ちかけてくる

苦勞人らしい気配り行き届く

星空を仰げば亡母が微笑する

伊丹市 延寿庵野鶴

乗り継いで車窓がかわる鶴飼船

棚田より案山子と望む大花火

祭囃子眠りを覚ます山里の駅

カード時代札より多いカード持ち

兵庫県 森脇和子

居心地がよくて居眠りしてしまふ

負けん気を出してみたとして齢は齡

朝が出る背なを信じている家族

万歩計に論され軽い靴選ぶ

尼崎市 内田美也子

ひと晩中雷と戦い朝疲れ

わく雲も見つめて通る甲子園

戦争の足跡遠く入道雲

青田風 河内音頭をのせて来る

八尾市 篠原いつふみ

新調の服が何処かに行きたがる

いずれまたご一緒に住む慕洗う

新しい恋生まれたか髪型の型

幸せは小さくてよい夫婦箸

兵庫県 円増純子

束の間の足跡だった波に消え

いい話蹴って心が落ち着かず

神様の怒りにふれる山削る

削り節今日のドラマの幕が開く

横浜市 近藤道子

美しく老いたい花を見て暮らす

重要と書いてカードの請求書

じれったい男としてるかくれんぼ

振り向いて欲しくて駄々をこねてみる

堺市 梶本哲平

子後試す炎暑に挑むひとり旅

来た列車乗れば降りたい駅に降り

因幡から安芸へドラマを追いかけて

うちのより倍もええ鯉街の川

堺市 上野楽生

百五歳きんときんとが良いい笑顔

開き直り心の殻を脱ぎすてる

中ジョッキ一杯ほどの陽気です

ひとつずつ親のり越える反抗期

横浜市 伊藤ふみ

問うわたし一步一步の山登り
お題目我流に唱え尽きるまで
夫婦茶碗どちらともなく欠けていく
枯枝に鳥とまつて騒がしい

北海道 中里つね一

三歳の孫の欲ばり目を細め
面一本先手をとって度胸つき
寝つかれずふる里はただ波の音
指定席今日も空いてる過疎列車

鳥取県 国森武子

小三の魔法にわざとだまされる
掃除して花を飾って仏待つ
此処だって天使もいれば鬼も住む
私を信じる孫が此処にいる

静岡県 大村正雄

台風が過ぎて風鈴秋の曲
スタンドを埋めて絵となる色帽子
つば広の帽子知ってる夏の恋
青信号そろそろ行つて怒鳴られる

横浜市 鈴江純子

紅差して残り火をみる旅に出る
まだともう使い分けさす年になり
隠し味入れて主婦業板につき
賑やかな食事が出来て胃も弾み

出雲市 加藤スズコ

雨しきり高下駄はいて見なくなる
京みやげにおい袋がよく似合う
荒れる世に球児の汗に気もなごむ
よい知らせ話して盆の墓掃除

横浜市 後藤早智

熱帯の花に旅人迎えられ(沖縄の旅)
鎮魂の紺碧の海魚棲まう
石垣の島保存され息をつき
無人島マリンスポーツ花ざかり

大阪市 中澤孝子

何となく警察手帳頭が高い
おみやげをテレカにきめて旅気軽
孫のマジック騙され上手に見えます
しゃがみ込み児の目の高さで蟻みてる

鳥取県 山内芳江

飲むとすぐ調子はずれがマイク持つ
沢ガニもメダカも住んでうまい水
そのままの飾らぬとこにある魅力
ありもせぬうわさ話が風に乗る

兵庫県 安達厚

舗装道割れ目に草の意地をみる
帰宅して心安らぐしじみ汁
輪になれば皆善人の顔をする
菊づくり菊鉢よりも友がふえ

八尾市 村上剛治

愚痴溜めた顔が揃っている屋台
今日の靴妻の呪文が効いている

豊作の茄子がみてきた汗の量

ご先祖の墓からフアイトもろてくる

富田林市 山原昭水

五百羅漢ああ亡父がいる亡母がいる

骨董市 梯子している老紳士

仏にも鬼にも出会うバスツアー

いつ逢っても真つ赤な薔薇のような女

島根県 武島 ちよえ

一生を憎まれ役でバラの棘

はみ出さぬように大きな輪を描く

連れ糸見かね手を添え口を添え

話好き嘘と真を織り交ぜて

尼崎市 古川正子

蟬の声聞いて目ざめる今の幸

遠花火ベランダに見る山の家

珍しい揚羽蝶みるバス待つ間

松風に衣ずれ聞こゆ薪能

鳥取市 岸本孝子

ありったけ見せてもたかが小銭入れ

お隣の好物聞いて旅に出る

もう一度炎えてみたいと紅を引く

計算に入れた祝いが届かない

鳥取市 岸本宏章

エルニーニョ夏をすっかり狂わせる

健康な百歳だから尊ばれ

別れ際やつと名前を思い出し

親と子が違う物差し持つ同居

秋田県 湊修水

ああ小出さん智光院になりはつた

丸い月ひとりじめする無人駅

帰省してもつと長生きしたくなり

生かされる今日のいのちをありがと

東大阪府 松山隆

大上段構えて脇の隙だらけ

向う岸立つと何でも見えてくる

休刊日 朝の出足の重い靴

家の軒深入りしたい揚羽蝶

倉吉市 山中康子

ルンルンを何時も見送る側にいる

おじいさん一時力出して悔い

缶コーヒー飲んでしまつてからの乱

見上げればにつこり笑うさるすべり

川崎市 和泉見早子

水を得た魚は海へ帰れない

音たててグラスの水驚かす

クーラーを消すと小癪な蚊の羽音

人恋うて少し疲れの残る齡

米子市 大野 蒼 流
海の色見たくて海に向く帽子

雨は静かに八月の天に泣く
雑草も明日を信じて背伸びする

東大阪市 今岡 貞 人

一点を守りつづけた座り胼胝
五百羅漢明日のポーズを考える
自適には遠いが好きに生きている

鳥取市 徳田 ひろ子

一本は友達に貸す傘である
花活けるもう蟠り消えている
野の花を鉢に移してから無口

愛媛県 安野 案山子

先生のジョークヘクラス中笑う
パレットへざっと絞った僕の色
当直のナースが走る深夜二時

兵庫県 植村 雄太郎

断りを言うむずかしさ情けなさ
病氣より検査検査で参りそう
億という数のすごさをまだ知らぬ

鳥取市 森 明 美

玉の汗 男の顔になつて来る
赤トンボ先祖供養に来てくれた
知名度にかたむきはせぬ花の首

西宮市 古谷 ひろ子
無人駅がこみあつてくる盂蘭盆会
酒もおはぎもごったに並ぶ盆の墓
もののない時代に育ち親思い

高知市 桑名 知華子

花火観て母は戦火の日を語り
母が来た百万力の味方得た
メガネ替え天下国家の記事を読む

出雲市 柊 ミツエ

旅先のみやげ話で夜が更ける
旅に出てみやげの数を指で折る
藁家わらやに七夕かざりがよくにあう

横浜市 生坂 サト子

ひぐらしが夕餉の仕度急き立てる
画面からはみ出しているホームラン
甲子園近頃みんな美少年

羽曳野市 徳山 みつこ

行きずりの悪にはおずきもぎとられ
長男の嫁で盆提灯吊るす
万事よしと勝手に決めている余生

羽曳野市 西村 りつえ

かつと燃えさつと消えゆく夏の恋
潮時を忘れた椅子に眼がささる
触れられて心を閉ざすねむり草

紫の着物に亡母をしのぶ夜

鳥取市 富山雄幸

窓辺から名もない花を観ています

ジョッキ手に泡がふつつ喋り出す

八尾市 砂田八寿子

好きな人居るのか娘適齡期

痴呆でも故郷だけは鮮やかに

善き友は酒も話もうまくする

唐津市 岩崎實

トラックに乗りたる牛の目と出合い

ことごとどこかすぐれぬ妻の愚痴

出かけたる妻への電話ばかり鳴り

枚方市 二宮紫鳳

たまごっち育て上手で孫はまだ

里帰り娘がたくましくなってみえ

肩の力抜いたら世渡りラクになり

尼崎市 野瀬昌子

お人好しの父に勝気な母がいる

偶然のように振る舞うのも情け

参加して裏と表を見せられる

尼崎市 河津正治

思い出を溜めて老母は背を丸め

ビリで良い試練にたえた参加賞

ささやかな暮しと老母は邪気がない

鳥取県 藤山弘子

雨が降り願い届かぬ天の川

これだけが明日の活力生ビール

将棋さし会話が弾む三世代

横浜市 豊田羊子

センサーの取り扱いは娘にまかせ

新築に灯パチパチ消し回る

引越した先へは行かぬ猫必死

松江市 安食友子

おきゃんな娘 浴衣の柄は少し地味

どた靴も晴ればれとしてソンブレロ

自画像が別嬪すぎてすいません

川西市 田中喜俊

どの枝も切るのがおしい台風後

盆おどり一度踊ってみようかな

応募作 紙上にのってむくわれた

豊中市 みきわきみ

まだ生きる目耳駄目でも口達者

老い二人娑婆の戦友まだ続く

向こうにも言い分あった裁き沙汰

鳥取県 権代康女

はずんでる孫のピアノがかるやかに

まろやかに生きた足跡残したい

いらいらはすまい体の毒になる

靴下が売れない下駄のニールック
口喧嘩似たものどうしの歳月よ
今ようの恋ようせんとたそがれる

八尾市 井 尻 民 子
大阪市 榎 本 日出子

ダイエツト ムギ茶ばかりもバカに見え
これはねえこう読むのよと子に習い
焼いも屋顔見て値段決めている

大阪市 小 泉 久 子

へそくりが半分消えたペンダント
倅せの尺度が違ふ夫婦仲
叱られて一つ大きく息を吸う

兵庫県 西 川 一 繁^{さき}

万歩計見知らぬ人に励まされ
わらび餅元祖本家と軒並べ
貝のごと口を閉ざした妻の勝ち

鳥取市 西 村 半 畳

ついて来いたった一度のこれで愛
わだかまりゆつくり話し合つて解く
空蟬の爪がしつかりつかんでる

尾 宮 弘 治

母が居て父も空気のように居る
六十歳で書く履歴書の手が震う
終電に乗る気時計と飲んでいる

東京都 井 上 つよし
暑中見舞 帝国ホテルロビーより
朝顔が咲いて日記のネタが出来
若葉マークペンツダンプを引き連れて

兵庫県 北 川 とみ子

地蔵さんだけに伝えて村を出る
押し通す裏のうらから見る明日
クラス会温い記憶の中で酔う

兵庫県 中 野 とよ子

ボランテニア存分にする車椅子
ボランテニア出来て我が身のありがたさ
雑草が春一番にやって来た

豊中市 岸 田 知香子

マンホール溢れ金魚が家出する
元気ですこれしか取柄ない夫婦
餌もらう当主の足音知る金魚

米子市 猪 森 スミエ

研いだ爪隠して猫は昼寝中
子育てに手抜きは駄目とタマゴツチ
ミンミンジイジイ今日は三十四度なり

和歌山県 村 中 悦 男

迷うことないごきぶりの逃げ上手
裏道へ入る自動車大きすぎ
告白ととれる言葉を吐く目つき

兵庫縣 德平毬子

チビ孫が家族みんなのまとめ役

楽しみのニュースは今日も悪ばかり

被害者は誰が償う少年法

八尾市 與田明

クーラーも好きと嫌いの老い二人

有頂天の度に失う帽子買う

台風にへし折れそうな日本地図

鳥取市 藤ふうこ

直球が好きな女の化粧映え

ともかくも結果は明日眠ります

生きるのが辛い日紅をぬってみる

西宮市 井上俊二

金かけず楽しむ術が巧くなり

丹精の野菜が旨い元気です

うす紅の爪の色よしうなぎ食う

出雲市 川島和歌子

先頭で仕切っているのは母の声

うれしい日母から届く宅急便

食べ頃のぶどうそろそろ届く頃

横浜市 平達也

声出して吾を励ます独り言

生きた甲斐 浦島太郎が集う会

雑踏に飽きて夫婦の山歩き

大阪府 平井露芳

歯磨きの後でおやつだどうしよう

明日また逢うが別れに手を振って

降り過ぎて地固まらず土石流

羽曳野市 森田四三郎

あと二十日 時効も空し悪の道

参観日は子にも親にもライバルが

嫁ぐ娘にやっと教えた母の味

尼崎市 軸丸勝巳

完全武装 子供に勝てぬ甲虫

おみやげは荷物にならぬ孫自慢

につぼんのおんな見にゆく阿波おどり

兵庫縣 緒方美津子

家の鍵 嫁に手渡しフルムーン

母と娘は三人以上に姦しい

初盆に亡母が踊れと夢で言う

福岡縣 本田忠男

上がり込む回覧板の長話

発想は奇抜 行動ともなわぬ

鏡掛け上げると亡母が立っている

八尾市 神原まさと

茶のうまい店に昼飯食べに行く

ペン牝牝も消えて無職に慣れてくる

長命の相だ眉毛が伸びてきた

綾部市 藤 田 芳 郎

本物と思う二度目のありがとう

ノックする面を笑顔に取り替えて

シルバースートを拒んだ足がつんのめる

横浜市 福 田 由美子

海の中太ったことも忘れてる

帰省した孫に期待の声かかる

眠気さえ嫁の立場がふきとばす

鳥取市 福 永 ひかり

冗談と言っではいるが本音だな

時々やはり達者で留守がいい

辻褄が終ってみれば合っている

兵庫県 仲 井 素 水

巻き代が未だある明治の古時計

よろけてもまた立ち直り九十路

天国の亡妻七夕も会いに来ず

羽曳野市 山 本 たけし

夏休み孫のびのびと漫画読む

何人か子ら甲羅干す河川敷

炎天へ遮断機おりてどっと汗

尼崎市 小 川 富 江

悲しみをかくす女は紅を差す

新聞の窓で社会を視るわたし

この猫と顔馴染みでも猫きらい

米子市 門 脇 晶 子

ファッションが古希になっても目に映る

硝子で映す姿を見ては背のびする

遠い話はしない正直な時計

出雲市 岡 あきら

胃カメラに白告げられて缶ビール

輪の中に居たくて持論瘦せ細る

蟬りとけないままに夏の雲

島根県 福 間 博 利

ジョギングで当分死ぬこと考えぬ

陽が沈む五右衛門風呂を焚く平和

日の丸で嫌な日のことみな忘れ

島根県 菅 田 かつ子

台風を糸瓜ぶらぶらやりすごし

まだ役にたっているのか忙しや

夏やすみ留守番役も汗みどろ

横浜市 荒 井 広 和

ゆとりとは見ずに無駄だと決め付ける

便利さに踊らされてる足と腰

快適な暮らしになれて喘ぐ夏

吹田市 西 岡 豊

教え子の渾名浮かんで幼顔

仮縫いの針は素直に差し替わる

につこりと部下に囲まれ赤頭巾

新潟県 高野不二

携帯電話行く先々を監視され
ファンだから負けた巨人に旗をふる
次々の事件をテレビ嬉しそう

米子市 池尾保子

大の字に遠慮がいらぬ草布団
デパートへトイレを借りただけのこと
青い目も交えて今日もボランティア

横浜市 山梨雅子

夏休み日がな一日子を叱り
根分けした花を土産に友を訪う
花一つ避けて芝刈機が動く

和歌山市 福重美子

腑に落ちぬ点を問い詰め左遷され
肩叩き他人ごとでない日を送る
核のある限り地球は脅かされ

今治市 中村好恵

蟬しぐれあの八月の雲おもう
判決が怖くて避けるドック入り
猫の手の代わりに母も駆り出され

八尾市 田中トシエ

飽きることなく月を観る遠回り
古い鍋でこぼこの蓋ちゃんと合
いのんびりと母娘で笑う露天風呂

和歌山市 和田美寿子

梅干をお供にさせて旅枕
今一度色気を出してピンク着る
人生は大手を振って歩くくせ

香川県 神保坊太郎

妻の振るタクト頼もし小憎らし
嘲笑うしかない私の行きどまり
異端とは言われたくないインク消し

堺市 桜井莊次

雑音を聞きたがってる外野席
あったかい心に出合う村はずれ
二枚目の舌が本音を喋り出す

千葉県 大川晩翠

垣根から落ちてる栗は拾われず
モデルさんと恋人気分ツショツト
盆休み朝寝朝酒予定組み

鳥取市 福田登美

美しい老いになりたく鏡見る
町中が祭りの暮色酔い痴れる
そうめんが冷たく泳ぐ夏祭り

横浜市 菊地政勝

蒔いた種よりこぼれた方が美しい
生き方と考え方が見える嘘
日本の幽霊だけにあるカタチ

忍の字がどこにも見えぬ新刊書 徳島県 安宅美代子

コマーシャルいらぬ知恵までつけてくれ 暗闇で拾った杖が温かい

横浜市 丹下智洋子

焼け跡派自給自足を夢とする
政治など異次元世界よと茶髪
新聞の見出しに学ぶ省略法

吹田市 石原靖巳

初めての親孝行だ墓建てる
断りの返事へ筆が重すぎる
度の合わせぬ眼鏡で明日が見えますか

岸和田市 加藤基

朝飯がすめば寝るまでずっと余暇
とぼけてる顔に急所を掴まれる
母さんは優しいけれどくどすぎる

沖縄県 杉谷一栄

切り売りの西瓜甘くて得をした
花造り上手な嫁に負けている
手始めのカメラで花のいのち撮る

羽曳野市 三好専平

雨風に履いたボロ靴捨てられぬ
コンビニでコロッケひとつ買ってくる
生かすことだけの医学にない温み

スーパ―と義理の小店で買い分ける 唐津市 宗弘
世話好きの尻の軽さで副会長
雷を落として戸主の顔になる

富田林市 中井アキ

巣立つ日にひとこと触れる母のこと
三世代まあるく暮らすにぎりめし
触れられたところから疼く白桃よ

倉吉市 大下智子

嫌だった夫にやつと慣れてきた
残りもののビールで本音しゃべりだす
地ビールととれたて野菜送る母

岸和田市 亀井皎月

B面の唄に懐かし過去がある
友人と旅は遠くの遅い春
負けまいと歌う演歌はセピア色

唐津市 井上勝視

故郷の句 送料問わぬ親心
左遷にも君が頼りと握手され
背の丸さ人の丸さも見えて来る

和歌山県 中村君枝

ごめんねが素直に言えた子の勇氣
そうめんて夏をのりきる老母達者
採算はさておき趣味の借畑

尼崎市の場 十四郎

丸木橋八十路の肩で底い合い

待つうちが花だ蝶だと出遅れる

夏海素肌焦がして意気が合い

尼崎市の森 安夢之助

嘘ひとつついて雨傘干している

平均寿命すぎて優しくなった夫

不意の客に機嫌の悪い冷蔵庫

大阪市の島崎孝一

本棚で読まれぬ本が威張ってる

鬼瓦昔と今を較べてる

浅き夢いつも見るのは老いの坂

富田林市の大橋鐘造

口下手な弔辞涙を誘いだす

縄のれん同じ目線よく弾み

覗きたいところに丁度穴がある

和歌山市の松本良

丁度いい妻に育って連れ歩く

生き方が好きで野良着が離せない

役所不信オンブズマンが開ける窓

大山市の早川盛夫

何もかも好きです恋という病

一匹の蚊が旅先を睡らせず

みんないい人ばかりで嫌になる

大阪府の井上千代子

箱寿司のように前向くエレベーター

イヤリング祖母は似合っているつもり

母危篤逢えぬ気がする胸さわぎ

横浜市の明渡トヨ子

過ぎし日がすべて恋しい老いの日々

だるそうに眠りをくれる扇風機

白内障手術するまでつらい日々

島根県の槻谷仲子

さりげない言葉の中に刺がある

式場の花が囁く幸の声

初盆の若さ悲しい灯がともる

和歌山市の木村初子

しあわせすぎて幸せを見失う

まわり道したが明日の風を待つ

笑って歌っていそぐことない鈍行車

和歌山市の武本碧

虎の威を借りて風切る肩パッド

平成の虹に我慢の彩がない

木が我慢するから山が崩れない

和歌山市の吉村さち子

この場合知らんぷりする思いやり

しょうもない事だけ老母の記憶力

一歩引くことで治まる一つ屋根

大阪市 立 蔵 信 子

シャッターを押してしあわせ確かめる

解放感仕事かえりの御堂筋

大阪市 尾 崎 黄 紅

美女と野獣のきずな金婚式がくる

目安箱置いて出来ないことばかり

静岡市 中 西 雅

選挙カーがなる効果は無視される

カットした髪にあわせる服を選ぶ

米子市 小 塩 智加恵

短パンが似合うと嫁に褒められる

旅の宿女中見たてて「大」を置く

和泉市 横 山 捷 也

病窓で音の届かぬ花火見る

書きさしの日記みだれて父が逝く

滋賀県 中 宗 明

欲を出し余生以上のプラン練る

暇がなく家庭サービスプランのみ

唐津市 林 公 一 朗

川上る蛙の気持がいじらしく

夏が逝くもう行くのかと蟬がなく

島根県 岩 田 三 和

好き同士倉庫の中でコンサート

産卵がすむまで月はじっと待つ

横浜市 山 下 省 子

讃美歌にチャペルの蟬も唱和する

犬の目と合って散歩をせがまれる

兵庫県 高 見 末 野

生きているうちが花だと墓掃除

みんな揃っていい顔してる七夕さん

静岡市 増 田 扶 美

新しい浴衣が並ぶ地藏盆

世を拗ねた赤髪の娘よ母が待つ

八王子市 播 本 充 子

頑張ってますと仏に胸を張り

募金箱世の中捨てたもんじゃない

広島県 山 本 示 風

生きとればこれから喧嘩できたのに

主婦の業こんな沢山あったとは

鳥取県 高 尾 京

無事生きて仏をまつる有難さ

嵐にも負けず朝顔咲きました

唐津市 江 川 青 琴

寝ていても口だけ達者な友見舞う

散歩道いつか挨拶交わす仲

鳥取市 山 本 益 子

太り過ぎベルトの穴が一つ増え

ありったけ財布をはたく縄のれん

交野市 山川 日出子
世界地図個室に貼ってにらめっこ
虫干しに亡父の匂いの剣道着

岡山市 清木 金太郎
限りある生命へすがり今日を生き
七人の敵は男と限らない

尾張旭市 三浦 きぬ
騙されるほど銭持ってみたいもの
今日一日生きた証の日誌書く

寝屋川市 井上 すみれ
記念樹に緑の風が吹いていた
多目的集まり話まとまらず

高槻市 執行 稲子
ウインクで勘違いする待ち呆け
ふるさとの畦道やたら古跡づき

宝塚市 飯西 ミサヲ
ハリヤイトくすり一式明日は旅
ご免よね蒔くの忘れた花の種

松江市 川本 畔
あなたと出会った不思議大事にする
自信がなくて鉛筆ばかりなめている

兵庫県 谷田 多美子
両親と祖父母の夢を背負う孫
常備薬しつかりもってバスの旅

島根県 松本 聖子
友の訃報聞きたびやさしく強く生き
頑張れと負けそうな心にむちを打つ

熊本県 増田 一乗
甲子園出場記念の砂みやげ
川柳に明け暮れ余生早や米寿

鳥取市 近藤 秋星
台風が来るぞイルカも避難する(夢みなど博)
「平和宣言」ヒロシマの声確と聞け

横浜市長 島 亜希子
ゆかた着た娘サンダル履いて出る
一等が出た籤売場ばかりある

檀原市 西本 保夫
はかどらぬ増築施主もやかましい
施主として意地があります背を伸ばす

松江市 佐野 木みえ
台風のくるらし鉢を取り入れる
生かされて供養の寺にかしこまる

姫路市 服部 一典
いつもより丁寧に洗い逢いにいく
女過去 男は未来を口にする

和歌山市 水田 秀男
ビルの上にビルが立つ香港島
仮設住宅 総理は直視できませんか

泉佐野市 大工静子
夏祭り茶髪揃えて若さあり
買い足した鈴虫少し声違う

羽曳野市 内田さとみ
綻びを繕い今日の晴れ姿
老いてなおゲートボールに燃える朝

松江市 松浦登志子
ミニトマト鉢に重たく街に住む
新旧が考えぬいてする同居

河内長野市 木太久正一
思いきり植木屋が切る夏の庭
飛行機は危険と思う歳になり

横浜市 上野天々
大の字を二つに折ってヨガ眠る
リハビリ好調カルメン口ずさむ

愛媛県 宮本末子
先のない母へ決意をした同居
世渡りが下手ですらすら嘘も出ず

鳥取市 宮脇道子
夕焼けに童子の声は地に響く
胸を打つメロディーにのせ被爆の詩

和歌山市 岡本八重子
軒ツバメ子育てすませそれつきり
赤トンボ今年は秋が早そうだ

鳥取県 石谷昭恵
八月十五日兄は海から帰らない
らっきょうで家も建てるし機械買う

松江市 松本知恵子
水やりの花と話している日暮れ
校庭に夏草伸びるドーナツ化

大阪市 川久保睦子
本棚に並ぶ私の好奇心
口裏を合わせ穴から出られない

河内長野市 妹背尽呂久
さり気なく窺う横に居る美人
身辺に大蒜好きが居るらしい

羽曳野市 芦田絢子
朝顔もひまわりもミニ陽が嗤う
子離れの夫婦茶碗を買い替える

東大阪市 谷口義
ちよぼちよぼで張り合っている嫁同士
親の金だから安心して使え

八尾市 山本宏
しあわせの道の茨は気にしない
おいしさは自前の歯で噛む嬉しさよ

大阪府 団野恒
夏バラの赤白ピンク庭匂う
道徳も地に殺伐の世となりぬ

横浜市 結城明玄

洗い干す幸せ女だけのもの
見渡せば地球は丸い本当だ

大阪市 鈴木トヨ子

新生児触れてるだけで夢が湧く
寄り添って艶の消えない老夫婦

尼崎市 長谷川佳山

あだ花が一つもなくてひそと咲く

青春の青い火花は柔らかに

枚方市 大昇隆広

立ち枯れた竹も節目は確と持ち

一人旅うんと自分にわがままを

鳥取市 石上悦子

ありったけ欠点みせてゴールイン

お互いに先に逝かない心がけ

鳴門市 八木芳水

真心を友のこぶしに教えられ

猛暑をば飲み干しているピアガーデン

吹田市 野下之男

捨猫が居着いてしもた思い遣り

同じなら美人の団子買ってみる

尼崎市 中澤向西

三浪の苦勞見て見ぬ振りをする

河川敷清掃参加汗が飛ぶ

岡山県 富坂志重
つまずきを重ねながらも八十路生き
今日も倅せ丸い心を抱いてねる

東京都 清原悦子
脱サラへ土のぬくもり教えられ
心にもない詫び状でうまくいき

高槻市 左右田泰雄
独り来てひとり降り立つ過疎の駅
遠花火 団扇が二つ白く揺れ

この一句

生きるべし玉葱の芽が出る如く 智子

から元気で生きているけれど、立ち上がれないほど辛い時がある。そんな時、ふっとこの句が浮ぶ。そうだ、生きるべし！物置の隅に転がっている玉葱の青い芽。何という逞しさだ。智子さんは幼い頃あまりお倅せではなかったとお聞きした。あなたに人の心の本当の辛さ、苦しさが分るかしらと言われて私は自分の甘えを恥じた。お元氣そうにお見受けしたが「身も心もボロボロなの、でも人に言っても分らないことよね」と。私も黙って精一杯に生きようと思う。どうぞお安らかに。

(松本文子)

平成九年度 路郎賞



母乳呑むまるで太鼓を打つように

米子市 政岡 日枝子

準優秀作 第一席

古き良き時代優しく貧しかり

岡山県 矢内 寿恵子

推薦句

小池 しげお

準優秀作 第二席

一徹の骨の硬さが邪魔となる

生駒市 北山 悟郎

吉岡 美房

古き良き時代優しく貧しかり
一徹の骨の硬さが邪魔となる
矢内寿恵子
北山 悟郎

柳歴

昭和五十年頃から新聞柳歴に投句

昭和五十六年 川柳塔社同人

川柳塔きやらばく会員

政岡 日枝子

知らせを受けた時は一瞬信じられませんでした、刻がたつに従って、喜びにかわってきました。
特に川柳塔本社の賞を頂くなんて、夢のような出来事です。家人の都合で途中何回かの休憩をしながらも、続けてこれたのは、引っぱって下さった方々、押して下さった方々のお陰と感謝いたしております。これからも一層の精進をと思っております。有難うございました。

小島 蘭 幸

母乳呑むまるで太鼓を打つように 政岡日枝子
母逝き妻ゆきこの家に壁の多いこと 麻生アト

板尾 岳 人

北の人北の形をして生きる 榎本 露児
煩惱消えよ消えよと茶筌ふる 島 ひかる

河内 天 笑

目は開けているのに何も見えていない 鈴木公弘
母乳呑むまるで太鼓を打つように 政岡日枝子

二賞 寸評

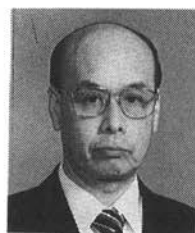
橘高 薫風

路郎賞の政岡日枝子さんの句は二人の推薦があった。
生まれた子が乳にむしゃぶりつくひたすらさは自然の摂理、生命の根元である。それを若者が太鼓に挑む姿になぞらえて形の上で繋がりを持たせたのがこの句の味となっている。また、母として乳房の受ける実感もふくまれているようだ。

茴香の花賞の石垣花子さんとの母娘受賞を心からお祝いする。

林荒介さんの推薦作品も、すぐれた手

平成九年度 川柳塔賞



仲のよい夫婦で通すバスツアー

八尾市 篠原 いつふみ

準優秀作 第一席

子育てを終えて夫と恋をする

横浜市 川島 良子

推薦句

川島 諷云児

準優秀作 第二席

往復の切符がないと

落ち着かぬ

大阪市 立蔵 信子

宮口 笛生

ふる里で息吹き返す国訛り
ローン地獄わが家が重いかたつむり

桜井 莊次
石原 靖巳

柳歴

この度思いもよらぬ賞を頂くことになり恐縮しております。これひとえに川柳クラブ「わたの花」で指導下さる高杉鬼遊先生、よき先輩の方々のお陰と感謝し有り難く思っています。

この受賞を契機に心新たに老木ながら精進して行きたいと思ひます。今後ともよろしくご指導お願い致します。有り難うございました。

昭和二十八年 貝塚千石荘
病院川柳会入会その後中断
平成二年 川柳瓦版入会
平成八年 川柳クラブ「わたの花」入会

平成八年 川柳塔社誌友

仕事と自然の力の、文明の脆弱さをしのぐ具体性は、現代への批判として力強い。しかし、川柳塔きやらばくに賞の偏るのを避けて、今回は譲ってもらった。これは古久保和子さんと三宅保州さんの和歌山、北山悟郎さんと麻生アートのさんの生駒にも言えることで、推薦句に地域の偏りが目立った。

川柳塔賞の篠原いつふみさんは穩健な句柄の作者であるが、この句は川柳の一面である辛辣な表情を持つ。

長い人生の道程の並々ならぬ起伏を偲ばせ、世間体をつくらう夫婦にインパクトがあり、準賞の二句に抜きん出た。川柳塔賞はこれから励ます賞であると言える。

小林 由多香

口きかぬ日もあり夫婦こんなもの 早川盛夫
往復の切符がないと落ち着かぬ 立蔵 信子

榎本 吐来

仲のよい夫婦で通すバスツアー 篠原いつふみ
ウインクの片手拝みにまたやられ 一本勇太

福本 英子

ジャンボ機の中の運命共同体 藤田 泰子
長生きの予定表にはないおむつ 川島 良子

受賞作品

和歌山市 古久保 和子



古久保 和子

合鍵を売りに行こうか朧月
存在感あるかあさんのいなりずし
皿を割る爽快感が怖くなる
ピンキング鉢で冬の絵を切ろう
座ぶとんの縦横知らず五十年

評 この渺湖賞は和歌山の古久保和子さんに輝きました。しっかりと生活感を志にしている表現は自由自在です。特に「合鍵」のすれすれの危なさや「座ぶとん」の対照、人間の女の両極を書いてくださいました。小池しげおさんの耳触りのよい作品は人生の処方箋です。その中に流れる澆ともなる感情の塊りの力には通り過ぎることが出来ませんでした。山本希久さんの句から一歩だけ引いた動きを感じます。けつして強くないのですが、引き寄せられるのです。智子さん！「貴女ならどうする」と選考しました。殆ど同じラインの方々を心に残しながらでしたが。

(八木 千代)

準賞作品

松原市 小池 しげお

妻の絵に俺の知らない澆がある
古希からは自分で漉いておいた和紙
痛い歯に触らぬように噛んでいる
激流の中へ流しにゆく涙
父に似てきて母に似てきて黙って居よう

吹田市 山本 希久子

ふたしかな記憶と雨の街歩く
いつもひとりいつも誰かを待っている
三ヶ月たつと忘れる他人の死
仏壇の前では油断してしまう
やがて冬になる錯覚のてのひら

受賞のお知らせをいただいて驚き、どうしていいのやらと、おろおろしてしまいました。自分の言葉の範囲で精一杯想いをぶつけて来ました。
諸先生や先輩の皆様方の情熱に接し、励まされ、温かいお心を頂いたおかげと思っています。
今後とも、御指導をよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

柳 歴

昭和六十年

昭和六十三年

平成八年十二月

三幸川柳教室入会

川柳塔社誌友

川柳塔社同人

受賞作品

米子市 石垣花子



石垣花子

評 受賞の栄冠を射とめられた花子さんは、すでに曾孫をお持ちという高齢を感じさせない、みずみずしい感性と好奇心、巧まざるユーモアで独自の境地を完成しておられます。この境地へは川柳を愛し、不断の努力あってこそ到達出来たものと思います。準賞の方とは、作品自体に優劣の差があったわけではなく、五人一直線に並んでのゴール・インであったことを、申し添えさせていただきます。

(西出 楓楽)

思っても見ない受賞におどろいております。知人に誘われて、新聞柳壇へ投句してから川柳にのめり込み、下手の横好きというのか一向に上達もせず、さりとて川柳と手も切れず、つづいております。この度の受賞も、あきらめず作句を続けたほうびを頂いたのだと思います。これからもよろしくお願い申し上げます。本当にありがとうございました。

準賞作品

富田林市 藤田泰子

散骨をするならクジラいる海へ
私を励ますための赤い服

和歌山市 川上富湖

小心者が酒に呪文をかけている
駆け込めば森は迷彩色になる

大阪市 三浦千津子

無為無策 私に夕陽赤過ぎる
泣きなさい笑いなさいと花が散る

和歌山市 福井桂香

夕暮れは埴輪の口になだれ込む
確執へ雪が積もってゆく時間

柳 歴

昭和三十八年 新聞柳壇に投句
昭和三十九年 グループ八名で

勉強会

昭和四十三年 川柳塔社誌友
昭和四十八年 川柳塔社同人

受賞作品

枚方市 海老池

洋

縄文の蕾で咲く日待った種

準賞作品

海南市 三宅 保州

恐ろしいことがはじまる多数決

評 五百年前の椿の種が芽を出して可愛い五枚の若葉がすすくと伸びているそうです。悠久のロマンはこんなところにもあったのです。したたかな生命力よ。

一つの意見が議論を交わす前から多数派によって事ものに踏み潰されてゆく有様。

(河内 月子)

古代運やメタセコイアの発芽に見られるように、種の生命力には恐るべきものがあります。じっと耐えるものには、いつしか咲く日が訪れます。

(田中 正坊)



海老池 洋

思いもよらぬ受賞のお知らせ誠に恐縮に存じます。諸先生方はじめご指導お励まし下さいました方々のお陰と厚くお礼申し上げます。幅狭い人生経験しか持たず、文才もない私ですが、これを機に更なる自分らしいいい句作りに励むとともに、更に柳友の輪を広めて参りたいと思います。今後とも宜しくお願い申し上げます。

柳 歴

平成二年 新聞ラジオ柳誌に投句

平成三年 NHK文化センター川柳講座受講

平成五年 川柳塔社同人

候補作品

融通のきかぬ時計に縛られる

矢内寿恵子

夜逃げした女が戻る孟蘭盆会

土橋 螢

気まずさに座り直してばかりいる 小池しげお

味方にも敵にもならぬゼロの位置 川上 大輪

風化してやがて消え去る男の名 山田 高夫

手伝いに来たふるりのうまいめし 片上 明水

受賞作品

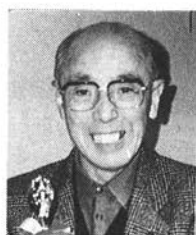
北九州市 梅田宣司

片方の靴が昭和を脱ぎきれぬ

評 長かった激変の昭和を生き抜いて来て中々に平成に馴染めないでいる者達の実感である。名人達者というものには些細な事でも疎かにせず心を配るものだ。人生の黄昏にひとりしみじみと呟いている。(宮園射月芳)

平成になって早や十年近くなるが、昭和一桁以前に生れたものには大戦の暗黒時代と敗戦後の政情不安な日々の生活を、終生引きずって歩かねばならぬ宿命を負うている人生を画いた奥の深い句である。(春城武庫坊)

前向きにと頭では考えながら、心の奥底には激動の昭和が居座っている。片方の靴という宣司さんの巧みな表現に脱帽。澄子さんの若々しい感性にも、春蘭さんのしみりした句にも深い味わいがある。(奥田みつ子)



梅田宣司

準賞作品

尼崎市 長浜澄子

極めればパセリ一つの置きどころ

赤とんぼそうしてみんな居なくなる
奈良県 長谷川 春蘭

候補作品

探してる物をときどき考える
稲葉 冬葉

煩惱と同じ重さのいのち抱く
板東 倫子

忘れることも神が与えた痛み止め
楠 昭子

満点の人でないから好きになる
石谷 昭恵

柳歴

昭和六十三年 NHK川柳教室入会

平成二年 翠洋会入会

平成四年 川柳塔社同人

各地柳壇賞に選ばれましたとのお知らせに私は耳を疑うばかりの驚きで暫くは言葉も出ませんでした。薫風先生始め諸先生諸先輩の方達の温かい御指導のお陰だと只々感謝致しております。このような大賞は初めてだけに、その感激の度合は計り知れず、これを機に川柳の心は人間の詩であることを更に一生懸命勉強したいと思えます。今後共よろしく御指導の程切にお願い申し上げます。

沙湖抄

八木千代選

月の出の大ききへ手をさしのべる

螢羽化 葉書一枚投函す

ハンカチを小さくたんで老い給う

経にまみれて八月の寒さかな

炎昼のわたしに誰も気付かない

墓穴から知らん顔して這い出そう

鼻の高さ分からぬままにバラを抱く

八月の天はひととき氷のしずく

泣き場所は夜店で買った面の中

葦でよい無理に木などにならぬよう

哀しみがひとつふたつと階昇る

愛を拒んで毬は高所恐怖症

たつぷりの薬味で夏の褒め言葉

レストランで手を合わせるのも歳か

運という不思議はだれの指図かな

すこし土あると植えなくなつて秋

よう来たと泣いてくださる土偶の目

悲しみを繋いだ首の飾り玉

鋸を打たれたとこへ溜まる鬱

蟬しぐれ急に整理をしたくなり

横浜市	横濱市	菱田	満秋
米子市	林	荒介	
吹田市	山本希久子		
島根県	松本	文子	
米子市	白根	ふみ	
鳥取県	鈴木	公弘	
西宮市	奥田みつ子		
岡山県	矢内寿恵子		
和歌山県	古久保和子		
大山市	早川	盛夫	
和歌山県	野々	圭子	
富田県	池	森子	
和歌山県	川上	富湖	
松原市	小池しげお		
岡山県	富坂	志重	
西宮市	牧淵富喜子		
和歌山県	木本	朱夏	
米子市	茂理	高代	
宇部市	平田	実男	
八尾市	高橋	夕花	

この辺で敵にうしろを見せとこう
 ビルは幻 被災地の土乾ききる
 階段の下でいつもの待ち合わせ
 もうひと花咲かせたいよなたかぶりも
 落し穴の中で何かが動いている
 百歳の素足にはかす銀の靴
 いろいろとあつて今年の秋茄子
 見逃して下さいタンポポの自立
 木綿のシャツに治してもらうかすり傷
 似たようなおとぎ話を聞かされる
 拡大鏡 めがね二つは重すぎる
 外見も大事とどんぐりは思う
 笑い仏に笑ろうた顔で京の露地
 御堂筋 添い寝の形に天の川
 裏編みの間は結果急がない
 炎色着てわたしから誘い出す
 いい言葉でない中途で落っこちる
 矢印の反対側へ誘われる
 坂下で見れば頂上 敵ばかり
 ああ忙しい引き出しの三段目
 わたくしの登る梯子にきたとんぼ
 居高なお人へ負けず居高
 どこからが高齢者がが難しい
 今一度試して捨てる乾電池
 仲間とは悲しきものか冷奴
 喋り足りない埴輪は口を開けたまま

西宮市	西口いわゑ
尼崎市	春城武康坊
鳥取県	土橋 螢
尼崎市	春城 年代
米子市	石垣 花子
羽曳野市	田中 透太
藤井寺市	高田美代子
八王子市	播本 充子
鳥取県	新家 完司
米子市	青戸 田鶴
和歌山県	岩本美智子
寝屋川市	籠島 恵子
京都市	松川 杜的
寝屋川市	坂上 高栄
米子市	政岡日枝子
堺市	河内 月子
和歌山県	榎原 公子
八尾市	村上ミツ子
奈良県	鍛原 千里
和歌山県	福井 桂香
鳥取県	田村きみ子
和歌山県	桜井 千秀
横濱市	田中 笑子
和歌山県	福本 英子
岡山県	小林 妻子
和歌山県	川上 大輪

神様は優れ者から召されるか
傘の雫を切つてあしたを待つことに
まだ首は洗つていない不意だから
開いて閉じて三行半も擦り切れる
さらさらと生きよう喜寿がもう近い
狩人に変わる階段いま登る
壺の蓋がずれているのは罠だろう
仮縫いのままでおわつた人生さ
噴水の高さはひとり芝居です
子の夢が花火に育つまでの雨
よろこびの波をゆっくり咀嚼する
高だかと干すうちの子の柔道着
仮の世と思う一時負けている
暗やみに寝てはおれない地蔵さま
からくり人形首が動いて生き返る
ぎりぎりに生きて果たせぬことがある
桐の木のてっぺんにある自尊心
やみくもに祖母は優しいものならず
不確かな愛に戸惑う湖のいろ
コスモスが夏の出来ごと聞きにくる
輪からでて行こうとしないイエスマン
花盗人を笑つて許す快復期
手術から醒めて朝だと知らされる
現役の傘寿 磯笛誇らかに
整形の美女なまぐさく老いてゆく
バラの棘拒み続けて不整脈

横濱市	保田	絹子	西宮市	門谷たず子	米子市	木村富美子	富田林市	藤田	泰子	豊中市	田中	正坊	唐津市	山口	高明	綾部市	藤田	芳郎	羽曳野市	吉川	寿美	川崎市	和泉見早子	鳥取市	石上	悦子	米子市	驚見	正子	今治市	矢野	佳雲	寝屋川市	森	茜	鳥取県	乾	隆風	米子市	門脇	晶子	鳥取県	さえきやえ	中井	アキ	富田林市	中井	哲子	松江市	川本	畔	大阪府	榎山	隆盛	和歌山市	青枝	鉄治	倉敷市	小野	克枝	海南市	三宅	保州	大阪市	本間満津子	弘前市	佐治千加子	出雲市	園山多賀子
-----	----	----	-----	-------	-----	-------	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	-------	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	---	---	-----	---	----	-----	----	----	-----	-------	----	----	------	----	----	-----	----	---	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	-------	-----	-------	-----	-------

横書きに慣れてけじめのない暮らし
変換キー押して気楽な嘘を吐く
仕合せを語れば星がよく見える
次の幕開くのが怖い世紀末
昔の音でねぶたが行くぞヤードウ
人間が好きで紅引く爪を切る
朝の記事 喉のかわきが止まらない
丁寧に洗つて返す菊の鉢
人間がこころを忘れニンゲンに
騙される喜びを知る水中花
尾を振らぬ男で村の土になる
いい話いい顔をして聞いている
雲海の下にあるのは地獄だろう
本当は歩きたくない万歩計
産褥の妻がまぶしく見えてくる
追伸の鬼が嫌味を言っている
透明になりたい時もある夫婦
この人は病氣と折れておく喧嘩
絶対と言う男にある隙間
読み終えるまでは命をもらいたい
宇宙人が降りて来そうな空模様
カマキリの構えのどこか僕に似て
物差しで測れるものに縛られる
ただならぬ事さりげなく医者が言う
大国の苦悩 無用の核抱いて
うつくしい人の計を知り眠られず

八尾市	高杉	千歩	大阪市	板東	倫子	米子市	林	瑞枝	川西市	松本ただし	弘前市	一戸	ツネ	岡山県	山本	玉恵	和歌山市	玉井	豊太	鳥取市	武田	帆雀	鳥取県	谷口	次男	横濱市	清水	潮華	砂川市	大橋	政良	富田林市	片岡智恵子	枚方市	森本	節子	米子市	野坂	なみ	倉吉市	米田	幸子	堺市	上野	楽生	唐津市	久保	正剣	和歌山市	堀畑	靖子	大阪府	神夏磯典子	福岡県	本田	忠男	米子市	光井	玲子	枚方市	海老池	洋	大阪市	一本	勇太	唐津市	樋口	輝夫	寝屋川市	江口	度	鳥取県	乾	喜代志
-----	----	----	-----	----	----	-----	---	----	-----	-------	-----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	------	-------	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	----	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	-------	-----	----	----	-----	----	----	-----	-----	---	-----	----	----	-----	----	----	------	----	---	-----	---	-----

シヨウトンボ大姉童女を乗せてくる

銅鐸よ少女の化身写しだせ

ひと恋し われに哀しき孤独癖

生きているうちが華です髭を剃る

遊女にも鬼女にもなれます覚悟石

泣きにきた海だが今日は荒れていた

アピールが下手でいつでも縁の下

広島で只うつむいて来た男

頂上の男正解はぐらかす

園児みな銀杏の陰に抱かれない

向こうからポケベル踊りながら来る

傷ついた場所で自分を取り戻す

玄関の蘭菊の香に迎えられ

子には子のいい人きつといてくれる

よく当たる予感自分を怖くする

この試合ちょっと待ってとめがね拭く

紙一重の差で天才にはなれぬ

牛羊 産みの苦だけの子を受す

蟬の声からもらう夜明けのブレッシャー

椰子の実が流れ着いたと言いはなし

秋の夜は破戒に溺れたい迷い

駅の匂い哀しすぎます私には

あの時は不覚だったとあきらめる

マニキュアにミステリアスな色ヤング

何をもうぐもくはつきり好きと言ってほし

歓待をされて酸欠気味になる

唐津市 井上 勝視

島根県 岩田 三和

三重県 佐々木森哉

松原市 玉置 重人

弘前市 肥後和香子

仙台市 川村 映輝

八尾市 大内 朝子

弘前市 中山 雅城

兵庫県 大谷幸次郎

奈良市 平松かすみ

今治市 月原 宵明

鳥取市 春木圭一郎

横浜市 丹下智洋子

鳥取県 西原 艶子

岸和田市 井齋 一齋

吹田市 栗谷 春子

八尾市 宮崎シマ子

横浜市 上野 天々

貝塚市 池田寿美子

倉吉市 松本よしえ

泉佐野市 稲葉 洋

鳥取市 坂田和歌子

和歌山市 森口 美羽

横浜市 豊田 羊子

倉吉市 野口 節子

香川県 木村あきら

ざりざりの我慢を叱る聴診器

履歴書のためらい傷は拭いておく

極楽へ来いと仏の目が笑う

時効にも心はもとにもどらない

わだかまり心の襷にまといつく

足跡を思う人生一度きり

よい知恵が出るかも知れぬ爪を切る

スモッグが何だ屋上ピアホール

我儘な花で横向き決めている

アリバイを印しなめくじどこへ行く

雨がやんだら百姓じつとしておれぬ

三歳の虫好き 虫を思いやり

疑えはもぐれぬ海女の命綱

息かけて撫でて磨いたグラスです

共通の刻に悔いあり逝きし人

高野山 蓮の笑顔でお迎え

ふるさとの榎の木 話あると言う

和歌山県 中後 清史

弘前市 高橋 岳水

箕面市 椎江 清芳

羽曳野市 酒井 一壺

和歌山市 山田 高夫

大阪市 町田 達子

羽曳野市 川田 晋

箕面市 岩津ようじ

松江市 広江 利徳

横浜市 山下 省子

愛媛県 中居 善信

枚方市 前 たもつ

東大阪市 松山 隆

大阪市 松尾柳右子

河内長野市 水谷 笙子

倉敷市 田辺 炎六

奈良市 井上すみれ

菱田満秋さんの月の出の感動に全身で浸りました。高々と手をさしのべた作者とそれに応える月との大きな風景です。まして秋の月の暗々とふところ深く昇りゆく清らかさ。太陽より優しく思えるのは傾きながらも見つけてくれるからでしょう。月の出を待つて待つての一瞬が切り取られています。林荒介さんの螢はボストの底でも発光を念じています。そして遂に成虫となった頃には届く事でしょう。幼虫を育んできたプロセスも川柳といっしょです。螢は火垂るの意、それは火となって舞います。山本希久子さんのハンカチの表情には参りました。細やかで静かな想いの視線が、畳まれたハンカチの襷に入ってゆくのを、老い給うた人は気付かれていますでしょうか。

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(81)

橘 高 薫 風

路郎先生は数え切れぬほどに職業を変えられた。古本屋を営まれたこともあり、古書から得た知識も豊富であった。

「書齋にて」と題する文章には、橘守部系の歌人で明治初期に活躍した辨玉という僧籍の人の長歌集「瑣々室集」(二巻、明治十二年刊、長歌二百余篇を収む)から一篇を取り上げ、川柳作句への考察をなされている。

辨玉には「由良半呂集拾遺」と名付けた短歌集もある。その長歌一例。(元文のまま)

過横濱異人館歌

武蔵の海横濱の津は まるなぬる異国人の
わけてすむ町も八十町 やちまたにつづく高
屋の 庭ひろき厨を見れば ゐの子は垣つに
放ち 牛は杭打つなぎ 庭鳥はふせじにかへ
り 生膚をたちて烹らゆか 逆剝にはぎて焼
かゆか 朝なのあへ夕けのまけに しが親を
とらくを知らに しが子をとらくを知らに
遊ばひをるよ 鳥もけものも

(皮肉な風俗面を見る思いがするではないか)

看蒸汽車走鐵道偶爾作歌

久堅の空のどけきを 鳴神かいづれおちくる
龍神かいまきのぼれる かきくらし雲ぞ起
れる 鳴り響き音ぞとどろく 其雲はたく火
の煙 其音は車の響 立ちとまり見るまもあ
らず 連れるやかたのうちに こぼくの人
つどへ乗せ 敷渡す黒がねの道走りて過ぎぬ
(一篇、文明の機関に対する驚異と賛嘆の情
が愉快に現されているではないか)

以上の辨玉の長歌を読んで、なる程歌った
材料は新しいが古い言葉であらわしただけに
まことに悠長な表現でしかないと貶し得る人
が幾人あるであろうか。それにしては後者の
如きはあまりに生々として蒸汽車なるものが
眼に見えるようではあるまいか。

今日の川柳が徒らに陳い材料を新らしい言
葉や奇を好んだ叙法によって表現して、なお
右長歌だけの力を充分に發揮し得ないとい
うば、そこに考えなければならぬ問題が確
かに横たわっているのではあるまいか。

まだまだ従来の十七音字形式で、しかもあ
りきたりの言葉によってさえ相当力強い句が

創作し得べきではなからうか。

新しい言葉、新しい材料、新しい表現
法に拠って独創的な句を得ることは、ま
ことのぞましいことではあるが、必ずしも、
新しい言葉、新しい材料、新しい表現
法が独創的な名吟佳句を生むとは限らないこ
とも思い及ぶべきではなからうか。

古来、平談俗事によって創られ、平言俗語
によって綴られた一片の川柳ではないか。

私は試みに『川柳雑誌』の中から二三の例
句を抜いて吟味してみたい。

猿の顔子猿のくせに老けている 春秋
人間と思われている邪魔くさき 同

えらい人の朝日一本だけでもいい 豆 秋
これらの句は何れも佳句として推奨するに
足ると思うが、特に新しい言葉や新しい
形式を踏んでいる訳でもない。けれども、子
猿に対する観察の凡手でないことには何人も
異論なからう。平言俗語によって綴られてあ
るからして独創的新味を忘れてもいいと言わ
ない。むしろ独創的新味があつてこそ、その
句が光るのであることは辨玉の長歌を見ても
頷くことが出来よう。(以上)

右の二篇のほか、写真鏡、伝信機、瓦斯燈
など特異な万葉風を以て詠い上げた長歌「瑣
々室集」は国学大系に入っているという。

尚香のむ

宮西弥生選

生きるだけ生きてやろうと薬飲む

親友には表も裏も見てもらう

傾いてもカカシ田んぼを見捨てない

星占い細い絆を大切に

黙禱が続き蜻蛉見失う

あいまいに出来ない紙のもつ重さ

過去どうあれ今の笑顔は本物だ

活力はときどき夢を食べている

匂い袋の数から恋が零れ出す

笑い袋小さくなって老いてゆく

大凶のみくじを高い枝に吊る

線引いてからの空気が固くなり

花びらをむしゃむしゃ食べて蝶になる

ほんとうの歳を隠している帽子

クローゼットに眠る喪服に香水振る

百歳を想像したくなる美人

都合よい耳を育てて七十年

もう誰も言わなくなった適齢期

ひまわりの勇気が欲しいなと思う

様ざまの空を見て来たとなばの目

寄りかかる一本杉のある未来

掃除屋のおばちゃんになる更衣室

落石注意その時きつと鳥になる

おかめひよつと二人には見えぬ裏の顔

先を読みすぎて転んでばかりいる

火をつけた男が風になって去る

追い詰めて吐き出させたは嘘ばかり

雑学の知恵でまとまる婦人会

繕った顔しか知らぬコンパクト

青虫よわたしの緑食べないで

種蒔いて愛の形に実りだす

いらいらが悪いと内科も外科も言う

別れても光る貴方でいて欲しい

狂わない時計を持って狂ってる

港に帰るかもめに温い飯を炊く

女にも魔の風が吹く刻がある

鯛の目も骨もしゃぶるも思いやり

開発に山は悲しく崩れ落ち

待たされて待たせて話くい違う

ライバルの塩は企み秘めている

ひと筋の趣味に広がる小宇宙

心がけ次第ですなと占いさん

鴉が見て歩けますかと首かしげ

一〇五歳まだ脚光は衰えず

コンタクト洗浄中です 寄らないで

米を研ぐ一粒ずつの命研ぐ

米子市 澤田 千春

堺市 河内 月子

米子市 林 瑞枝

尼崎市 長浜 澄子

富田林市 片岡智恵子

和歌山市 榎原 公子

今治市 村上久美子

大阪市 板東 倫子

鳥取県 岩崎みさ江

鳥取県 田村きみ子

大阪市 稲本 凡子

八尾市 高杉 千歩

大阪市 三浦千津子

横浜市 近藤 道子

鳥取県 土橋 睦子

和歌山市 山口三千子

堺市 志田 千代

尼崎市 内田美也子

鳥取県 西原 艶子

羽曳野市 芦田 絢子

米子市 光井 玲子

大阪市 藤田頂留子

吹田市 栗谷 春子

大阪市 津守 柳伸

寝屋川市 森 茜

岡山県 矢内寿恵子

雲百熊やっぱり雲がつかめない
 キッチンにナイフとフォーク多くなり
 善人の面が重たくなって来た
 封印をしたはずの記憶がもどる夏
 蟬を追う児を見ぬままの夏休み
 白黒をつけたがるから座がもめる
 水門を開けねばダムが苦しそう
 ハーブ育てて芸のないフライパン
 土曜日の献立八百屋知っている
 病名に老人性をつくシヨック
 匂い立つカサブランカは眩しくて
 罪のない話しに行く美容院
 長靴ではいってみたい水たまり
 洋式トイレだったらきつと脚線美
 二世帯の風それぞれの彩を持ち
 夏草と競って勝った事がない
 何かへん私だろうか世の中か
 茄子胡瓜きれいに漬かる魔法の手
 孫曾孫思わくのある墓まいり
 ちびた口紅防災袋へ入れておく
 雨に飽き湿った傘を折り畳む
 どの指も深い情けのある家族
 暗証番号夫に教えてはならぬ
 半分っこ母は小さい方を取り
 年金に花買うゆとり消えていた
 毬栗に文句つけた靴の裏

米子市	中井	ゆき
和歌山市	玉置	当代
倉吉市	野口	節子
鳥取県	さえきやえ	
鳥取市	植田	一京
今治市	野村	清美
寝屋川市	籠島	恵子
羽曳野市	吉川	寿美
出雲市	園山多賀子	
大阪市	大森	年子
横浜市	保田	絹子
寝屋川市	岸野あやめ	
横浜市	田中	笑子
和歌山市	楠見	章子
西宮市	門谷たず子	
米子市	鷺見	正子
岡山県	富坂	志重
和歌山市	古久保和子	
和歌山市	福本	英子
横浜市	山梨	雅子
富田林市	藤田	泰子
兵庫県	北川とみ子	
今治市	野村	京子
大阪市	日阪	秋子
弘前市	一戸	ツネ
寝屋川市	平松かすみ	

こうなったら長生き組と肩を組む
 幸せを計る目盛りが見つからぬ
 平凡でいいです昼寝しています
 大人気ない人だ飴でも差上げよ
 あたたかい心をつなぐ木の玩具
 異常なしの言葉に心蝶になる

尾崎市	春城	年代
鳥取市	福田	登美
和歌山市	堀畑	靖子
八尾市	高橋	夕花
今治市	塩路よしみ	
八尾市	生嶋ますみ	

千里さんの句―心丈夫な方が身近に現われました。千里さんらしく銜のない素直な心情がそのままこの句を作らせたのでしょう。どうか何時までもお元気で川柳塔の為に活躍をお願い申し上げます。富美子さんの句―謙虚な作者の内側に秘めた情熱は、誰と接しられても同じ気持ではないでしょうか。女はややもすると裏は見せないものです。だから親友も長く続くんですね。何時までも今のままでの間柄を大切にしてください。人間にはそれぞれ相性があり、これは動かし難いものですが、お互いに大人らしく許し合えるお友達は素晴らしいと思います。花子さんの句―長い人間生活での実りの句であると思います。乱れた現世に生きる私達に、ひと筋の光を与えて下さいました。何事もゲーム的に物事を片付けしてしまう狂いに生きる事の大切さ。生命の大切さを教えられます。みつ子さんの句―女性性は古いを好むようです。生きてゆく世には絆に結ばれ幸福にならねばなりません。だから努力をするのです。明治、大正、昭和の一言は一本の筋を通します。貧困にも堪えました。占いだ一笑しないでその奥にあるものを見つめたいです。富湖さんの句―重い重い句に受けとめました。すいーと飛んで来た赤とんぼに救われました。作者の斬新な感覚に日頃から注目させていただいています。

店

江口有一朗選



聞き上手話し上手で店はやり
コマシヤルしないお店がよく流行る
流行らない店でゆっくり本が読め
駆けこんだ店にもあった温かさ
スパーに無い味老舗守りぬき
ハンドルの欠伸が搜す喫茶店
お祭りの夜店に子等の夢がある
幼稚園数覚えさすお店こっこ
惚れている方が待ってる喫茶店
値切っても五パーセントは付いてくる
横文字の屋号にしたい三代目
残業の土工がならぶ屋台店
客一人のどかな午後の理髪店
少し混む店で土産を買っている
身内みたいな客が支えているお店
行きつけの店に納まるはしご酒
へんくつな店で自慢の味を売る
子が継がぬ店細々と老い二人
店内の遊具で過ごす家族連れ
駄菓子屋を守る老婆の顔の艶
夢がほしくて花屋へ夏の道急ぐ
傾いたのれんに再起の夢を賭け

喬水 和歌子 美代子 忠男 德三 正剣 正 省子 高夫 輝夫 周信 隆風 正雄 たもつ 勇太 清史 清美 甚一 登美 勝美 玉恵 寿恵子

杖貸して帰り待ってる土産店
帰りには寄ってやろうと思つ店
開店の花輪ライバルばかり来る
段差ない店だから行く車椅子
立ち止まる店が夫婦で遠う旅
店員が妻で社長に指図する
辻と辻つないで古い灯がともし
バーゲンの値札に蜜がかけてある
ブティックと変えてすんなり客を呼び
裏街で本当のコーヒー飲ます店
おふくろの味へ集まる小さい店
宝石店ため息ついて見て通る
店頭の日玉の目玉にしぼる知恵
店番の読書も修業古書の店
冷やかしを買う気にさせた女店員
住
駄菓子屋へ少年の日を買いに行く
被災二年やつと馴染みの店に逢う
朝市はあの婆ちゃんの店と決め
店の奥から老舗の風が吹いてくる
朝市のおばさん日本海の顔
人
味の店並んで待っている平和
地
天秤棒家宝にしている古のれん
天
やつと店構え夫婦のよい笑顔
軸
先ず店のちらしに主婦の目が走り

佳雲 清芳 保州 あずま 克治 愛論 志重 鉄治 杜的 一風 よしみ まさと 哲子 洋 岳水 やすお 日枝子 典子 武史 俊子 深日白光子

柿

岩本美智子選



落ち柿も拾った昭和二十年
手の届くところに柿が熟れている
柿すだれ老母は達者で陽に染まる
新鮮な柿がうれしい無人店
菓草にも名画にもさされ柿若葉
柿の葉すし買いに大滝まで出かけ
陶匠のこころが解る柿の色
見栄えのよい艶々柿の渋さかな
二日酔い舌に樽柿甘くとけ
樽抜きもおはきも好きな母だった
過疎の村 柿の木坂を守る老い
塀越しにどうぞとぞと柿が熟れ
露冷えの柿の一皿座が和む
少子化を笑つて柿の実はたわわ
故郷の軒が絵となる柿すだれ
越境の柿民法で始末する
柿の木の鴉あるじを威嚇する
アトリエの柿はんものでないらしい
リストラへ落ちてしまった青い柿
木守り柿父は毎朝空を見る
柿の木に登り夢みた少年期
てっぺんの誰も取れない柿の自負

文時 典子 たず子 狸村 好恵 ミツ子 黎之助 幸夫 白光子 隆盛 義男 宵草 忠男 寿恵子 権悟 鉄治 有一朗 京子 勝巳 善信 正雄

路 集

柿の木がおまへんなあと法隆寺
美しく熟れて夕日も柿も落ち
くるくると柿剥く老母の手は老いず
お供えの柿が熟れてる道祖神
柿の木に触れてと温い少年期
柿熟れて亡母と話がしたくなる
柿の木の下に童話が埋めてある
柿熟れて七堂伽藍秋深む
青柿の色づく頃に娘は嫁ぐ
柿の種たわな夢をみています
柿剥けば亡母の十指が透けてくる
柿たわわ過疎をふり向く者がない
渋柿のしぶさよ父の喪に服す
柿のれん四郷の里で太い指
優しさに溺れてからの柿の渋

佳

渋柿と知らずかじった跡がある
美味そつな柿が画廊で売れ残り
村捨てた男が街で柿を買った
青柿の落ちて決心つけました
柿の木を植えて時効を待っている

人

青い柿ぼとりと落ちている逆縁

地

両隣の柿を毎日みくらべる

天

沢庵に柿皮も漬け母の味

軸

渋柿の抜きたいような渋を持つ

かじる

上田俊路選



文学集かじったままの青春期
親のすねやせたら子のすねをかじる
雑学の指はいつでも生鬚り
喜んでかじられている儒もある
退院日かじってみせる青りんご
子はファミコン父はバチンコかじりつき
法律をかじり世間を狭くする
二十一世紀老いも英語をかじりとく
聞きかじり程度のことと強請られる
老化した脳でかじった英会話

週刊誌見出しかじれば用が足り
渋柿をかじらされての不自信
かじられた分だけ伸びた娘の背丈
仏前でかじったばかりの経唱え
おいしくて貴男のハートまでかじる
見たくない僕の遺産のかじり合い
留年でまたよろしくと腰かじり
割り箸をかじってお代り待ってます
白蟻がかじる美味しい家らしい
七癖にも一つ齧る癖も持ち
かじっても舐めても無駄な正義漢
中途半端に男かじって捨てている

編

洋

さち子
ミツ子
和枝
幸次郎
高夫
良知
強一
典子
政良
喬水
周信
満秋
重人
登美
とし子
旋風
愛論
大輪
杜的
一花
はるお

佳

人

地

天

軸

天

軸

軸

愛深く一つのリングかじり合い
少しずつかじり倒さぬようにする
社会学かじった妻の投書癖
文芸をかじり始めた青蛙
ワープロをかじる一本指の祖父
一寸だけかじった知恵で花咲かせ
生かじりの知識で生きて来た不思議
六法をかじって搜すけもの道
商法はかじったことない蛸焼屋
栄養学かじって妻のまずい味
本棚の隅にかじった趣味の数
マルクスも神も仏もかじりかけ
聞きかじる噂ばなしが着ぶくれる
禁断のリングかじってからのうつ
ほんとうの味はトマトの丸かじり

編

洋

時弘
よしえ
あらた
源一
正雄
洞庵
有一朗
岳水
正剣
あずき
みさを
正子
ちかし
荔

朝子

宵草

あずま

子龍

日枝子

俊子

松本良

松本良

松本良

松本良

松本良

松本良

松本良

松本良

松本良

松本良

初歩教室

題 — 触る (さわる)

吐田公一
はんだ きん いち

○親切な顔が心の傷さわる まさと

顔がよりに。この場合はやはりふれるであらう。題意に忠実の余り、少々無理な表現をなさったものと思う。

▽親切な顔で心の傷にふれ

○近頃はスキンシップも心して 奴夫

添削句もいま一つだが

▽度の過ぎたスキンシップがいやがられ

○瘡蓋をちよつと触つてはがしてみ 専平

これは川柳とは言えない。傷あとに触るとなれば、一考が欲しかった。

▽過つて触つた友の過去の傷

○久し振り蟬ぬけがらを置いて出る 山雅子

三句共「触る」には離れすぎた作句

▽空蟬に触る恋路のやるせなさ

○ゆれる窓踏んだ触れたとこぜりあい 三代子
ゆれる窓としなくても、素直に通勤車とすれば——。窓と踏んだ触れたとは直接関係はないのである。

▽通勤車踏んだ触れたとこぜりあい

○古傷を触る夜風が憎らしい 利徳

下五にやや難

▽古傷に触る夜風が身に滲みる

○触られてうれしい人いやな人 久子

作句には読み手の意表を突くことも必要

▽触られてハツと息のむ好きな人

○マネキンのスーツじつくり目でさわり トシエ

スーツだけではなく流行を。下五の表現はすばらしい。この感覚を大切に

▽マネキンのモードじつくり目でさわり

○触るからそつと懲しめ赤いバラ りつえ

そつとが余分

▽触るから懲しめているバラの刺

○触る神よけいなことに口にせず 晩翠

ことに口にとにが重なり、リズムが悪い。

▽触らぬ神よけいなことを口にせず

○さわるなと立札つきで並ぶ桃 ふみ

桃に触るなの句は実に多かった。これだけでは人間が詠まれていない。桃を擬人法にすれば句が生きてくる

▽触りたくなるよな艶の桃の肌

○触つてはいけない桃を目が選び 和可

ふみさんの句評を参考に

○ぎりぎりて法に触れない線で生き 捷也

原句の下五も領けるが

▽ぎりぎりて法に触れずに生き延びる

○故郷の水に触ると声がする 楽生

単に声がするというより声の内容を

▽故郷の水に触れば過去の声

○豊満な胸触れてみたようなゆめですみ 公一朗

創作性が欲しい。川柳も文学作品だから

▽豊胸に触れたその夜が眠られず

添削句
○おばあちゃん肩を揉みましょ帰省の子 政子
○ありがたい揉み手ゆるめず話聞く 政子
二句を一緒にして
▽肩を揉む孫の話の果てしなく

○満員電車触れてチカンと間違われ 郁子
満員電車 〓痴漢の句も多かった。三代子
さんの句評を参考に

○悪い個所さわれれば治る地蔵さん 宗明
中七で言い切っているところが難

▽薬にすがる思いで触る地蔵さん
○触るなら火星の肌も夢でない 雄幸
スケールの大きい句で面白い着想だが、火
星では少々大げさすぎる。時事的には否定
しませんが、せめて月ぐらいでお願いします

▽月の肌触ってみたいフルムーン
○逆鱗に触れて通った意地の悔 幸次郎
この場合中八にした方がよく分かるのでは

▽逆鱗に触れても通した意地の悔い
○ウインドのタイヤにそっと触りたい 多美子
なぜ触りたくなるのか、小さなタイヤでは
そのような欲望は起らないはず

▽触ってもみたいタイヤのゼロの数
○汚れない心に触れて深呼吸 サト子
下五がとつてつけたような言葉 句は一読
明解で深みのあるのがよいとされている。

原句の場合は下五を軽く
▽汚れない心に触れて気も弾み
○わざと気にさわることを云う好きだから 省子
いい句だが、この場合、気に障る↑広辞苑
である。

○秋ですぬ風のベエゼがこちよい 睦子
○軽く触って素通りしてる秋の風 明美
二句共秋風を詩っているだけ

▽涼風のベエゼが誘う湯の煙
○どろんこの子供育む好奇心 君江
原句のままでは触るが詠めてない。

▽どろんこでなんでも触る好奇心
○人情に触れた旅なら忘れない 啓子
原句もいいが

▽人情に触れて思い出残る旅
○触られた生徒の抗議首が飛ぶ 一乗
セクハラに触るが含まれるので

▽セクハラの教師抗議で首が飛び
○触ったら感電するほどの元氣 ミツ子
元気がとつてつけたよう。下句の言葉の選
択はむずかしい。参考句も今一つだが

▽触ったら感電しそう恋最中
○新築の柱にそっと触れてみる 徳三
感慨を詠むには背景が必要

▽新築の柱へ妻と共に触れ
○芽吹きたる盆栽の梅触れて見る タツエ
中七で触るを詠み込まずに表現

▽盆栽の枝振り直す春日和
○痛いところふれぬつもりがつい触る 宏
句が浅い。要するに上つ面の句である。

○岩田帯触り幸たしかめる まさ
一寸 順序を入れ替えてみると
▽幸せを確かめ触る岩田帯

佳句
償った罪に触れられ心病む トヨ子
(病む心とすればなお)

春風に誘われ触る鬼の面 美寿子
(よく頑張られた)

都市砂漠触らぬ神が多すぎる 一典
(上五で俚諺が活きた)

触らずにおられぬ今朝の月見草 トキ
(美しいものへの感動がある)

デイケアで触れる笑顔のあとけなき 方子
(お年寄の無邪気さを見事)

核心に触ったようだ眉ピクリ 八寿子
(下五が面白い)

北風に隠した傷を触られる 玲子
(上五の着想がいい)

琴線にさわれると落ちる青い梅 芳水
(下五の転換がいい)

私に触発されて蝶が翔ぶ アキ
(三句共佳句。よく頑張られた)

触るのを待ってはじける鳳仙花 苑子
(すばらしい一言)

私の句
傷口に触る容赦のないカメラ

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 9月号から

田中輝子

北斎の波の中よりサーフィン

宗弘

葛飾北斎の風景画から、作者の視線はその荒々しい波を捉えた。ただ単に波間でサーフィンを楽しんでいる構図なら平凡。北斎の描かれた波の中からユニーク。

本命を狙って鮎をまいている

大橋鐘造

時期外れですがバレンタインチョコを思い浮べましたが、いえいえこれは男社会を詠まれた一句。鮎は比喩、成功を祈りたい。

恋ひとつ拾った水着干してある

一本勇太

夏も終わり想い出いっぱい詰まった水着：を干してある事に余韻を覚える。作者の視点で優しくって明る。

過去を消す消しゴムがない日記帳

大野蒼流

哀しいかな、過ぎていくものは川の水の流れる如しで消すことも止める事も出来ません。足跡の一つです。そっとしておきましょう。

これからが私の時間昼寝する

森安夢之助

このようにはっきり宣言された事に好感を覚えます。自分の時間を大切に自分の世界でありたい。

ひまわりの下で可憐につめきり草

小泉久子

女性ならではの句。つめきり草に憶いがこもる。太陽を追いかけて遅く咲くひまわりとは対照的。こまやかな風景を一句にされた。経終わる頃にピタリと仕出し屋さん

岡あきら

おもしろい着眼。思わず肩の力が抜けた。

時間を告げて注文したとはいえ、丁度経が終った。正座から解き放たれ、法要の空気がもやわらぎお膳の支度が整う。現世と来世の狭間に：そこに人間の生がある。

ここまではうかうか来たがまだ死ぬぬ

亀井皎月

このような発見が出来ることも句作りの楽しさの一つ。幾山河を夢中で来た歲月、うかうかではなかったにしろ、「まだ死ぬぬ」と結ばれたあたりには強い意志が働く。日々を大切に過したい。

投票へ白紙を出しに行ってきた

中居善信

内緒だが薬をやめて全快す

木村親路

それぞれ日常の事をやさしい言葉で詠まれていて、この背景にある人間模様等、一句に達するまでの心境に心を打たれました。

川柳の間口は広いのですが、佳い句をうみ出すための苦しみもついてもあります。川柳と係わっていく程に奥の深い事にも気付きます。試行錯誤の繰り返しの中で、新しい発見と着眼等に句作りの楽しさがあると思います。そして又「継続は力なり」とも言われています。人生の過程を緩やかに楽しみながら川柳と対話していけたらと思っています。

線引いてよい子悪い子普通の子

渡辺南春

神戸市須磨区の小学生殺害事件に視点をあてた連句の中の一節と思われます。戦後五十二年、世の中は随分変わり、豊かになった分何かが置き去りにされている憂うべき事件でした。原点に戻って学校も家庭も、そして周囲の大人達が丸一となって見直す時かも知れません。子供を育てるのに線引きはいりません。作者もそう詠まれているのです。

犬が怖い？

瀬戸 まさよ

犬が怖い！という世の愛犬家から笑われるだろう。抗議を受けるかも知れない。が、私は未だに日本の犬が信用できない。

私は友人と近くの公園をよく散歩する。そこは犬の散歩道にもなっていて、いつも犬と出会う。中ぐらいの犬とは目を合わせぬよう距離をとって歩く。大きいのは道を譲り通りすぎてから元の道へ戻るようにしている。友人は「怖がるから犬の方も恐がるのよ」と笑いながらも付き合ってくれる。

なぜ怖いのか？突然飛びつかれた幼児体験、小学生のときに叩き込まれたこわーい狂犬病の話、犬を飼ったことがない等々、それらも原因にあげられるだろう。が、はあ、はあ、息をはずませている犬、犬の行きたい方へ引っ張られている飼い主を見ると、犬を制御できない危さを感じてしまふ。これが怖い。日本では飼い主と犬が訓練を受けていないこと

を思い知らされるのだ。というのも十年ほど前、パリで出会った犬は少しも怖くなかった。宿舎に近いオペラ通り周辺の店を何日間か歩き回ったが、狭い歩道で出会う犬は、どの犬も主人の側にビタリと寄り添い、主人の歩幅に合わせて真つすぐ前方を見て歩く。よそ見をしない。だから私もドキドキすることなく安心してすれ違ふことができた。次はチューリッヒ空港で見た犬だ。ミュンヘン行きの便を待合室のベンチで待っていたとき、私の隣に座っていた中年女性の足元に大きなシェパードが長々と寝そべっていた。女性は本を熱心に読み耽っている。と、そのとき友人が買いた。「瀬戸さん」と大きな声で呼ぶ。私は青くなった。ベンチから五十糎は、はみ出しているシェパードの長い尻尾に気付いたからだ。近頃の友人は絶対踏むに違いない！その後を想像するともう恐ろしい！その瞬間、件の女性は、つと本から目を離し犬の方をチラッと見たとたん、シェパードはやおら身を起こすと、すつとベンチの中へ尻尾を入れてしまったのだ。すごい！阿吽の呼吸とはこのことかと感心してしまった。犬も電車賃を払えば市電に乗れますと言ったガイドの言葉にも素直に頷けた。

半年ほど前、外国での犬の訓練の方法をBSで放映していた。やつぱりという思いがした。外国では犬を飼うとき必ず飼い主と犬が同時に訓練を受けるそうだ。（外国とはヨーロッパを指すと思われるが）犬は主人の命令には絶対服従させるということが基本である。主人より前を歩かない。主人が止まると必ずとまる。座る。主人も犬が歩きやすいよう定位位置で行動する。命令を果たしたときは必ず褒める等々。主人の命令が守れない犬は守れるまで根気よく繰り返し、覚えるまで実践させていた。こういうのを見ると、犬の行動はすべて飼い主の責任であることがよく分かる。飼い主の愛情に応えさせているだけに満足しているのは余りにも視野が狭い。犬も家族の一員なら、社会性をもたすべきなのだ。私はときどき肥後橋から西梅田までの地下鉄車内で盲導犬を連れた女性と一緒にいるが、大きい盲導犬に頼りたくない気持ちになる。大勢の人の中で押されても揉まれても、じつと耐え主人を守っている姿はすばらしい。さて、当然のことながら私に犬を詠んだ句は一句もない！そこで厚かましく薫風先生の佳句を借用させていただいた。

— 女性の独占的分野……長閑な光景 —
立話長うて犬も坐り換え

小出智子追悼

本社 九月句会

九月八日(月)午後五時半

メゾン・ファッション・センター

残暑なお去りやらぬし暑い中での九月句会を、理事長小出智子さんの追悼句会とし、百十一名の参加を得て、定刻開催された。席題、兼題いずれも智子さんの句に因んで出題され、遺徳を偲ぶにふさわしい句会となった。はじめに相談役黒川紫香氏が、川柳家としては初の兵庫県高齢者特別賞を受賞された旨報告があった。

お話は高杉鬼遊氏。智子さんとのこれまでの係わり合い、思い出を語る。

智子さんを食事に誘ったのは二度、気取りのない二人にふさわしく、いずれもうどん屋であったと言う。智子さんのあたった真面目な人柄は誰もが認めるところ、氏にとっても年下の智子さんは時に姉のような存在であった。また住まいのある生野区勝山南の庶民的な土地柄をこよなく愛し、地域に密着して川柳の普及につとめられた智子さんの句は日常の暮らしの中から生まれ、平明にして深く、

誰にも納得される句であると例句をあげて鑑賞する。

理事長現役にあつて病いの中、六月の四先生追悼句会を案じておられたので、その成功を草葉の蔭から喜んでいただいたであらうと結ぶ。

初出席に奈良市の伊藤定子さん、大阪市の三輪式美さん、小泉久子さん、堀いくのさんの四名を迎える。

月間賞は堀端三男氏(和歌山市)に輝く。

(司会―隆盛)(記名―天笑・月子)
(受付―金太・寿美・朝子)

席題「師」

鍛原千里選

この齡になつても恩師まだ苦手

諷云児

師の影も踏んで大きくなりました
たよりないお師匠でした好きでした

美代子
正一

かなしいな僕の恩師が痴呆症

かすみ

先生なんて言わんといつてと智子さま
忤の弟子師の溜息を見逃さず

暁子
天笑

先生が一番怖い一年生
どれ程のものか師匠を越せという

笛生
シマ子

鳥がたのような恩師のタフなこと
弟子無くも師と呼ぶ人はたんといる

恭昌
哲夫

一徹がとつとつ師匠怒らせる
うるさいが師匠やっぱり味方です

妻子
諷云児

師に恩を返すゆつくり咲く花よ
二次会になつて恩師ははつとかれ

森子
洋敏

未完成の師も人間でたのしい

雅文

師の影が逆光だった十四歳
先生といつとも一緒に風邪をひく

弘一
義

達筆の恩師へハガキ二三行

かすみ

師を越えたときから修羅がはじまつた
師の影を踏むまい いつとも後ずさり

保州
悟郎

お師匠はまだまだだと言つばかり
師を偲ぶ当時のわがが幹事役

妻子
正雄

師から恩を受けた小言は弟子に伝えるとく
人生の恩師はきつと妻だろつ

千秀
鹿太

暴力もここまでできたか師を殴り
ふりむけばやわやわとくる師の温み

文秋
君子

お師匠はんに氣に入つたから従いていく
お師匠はんに氣に入つたから従いていく

哲夫
金太

渾名まで覚えてくれた師の教え
晩学に光をくれた師の教え

いつふみ
雅文

師の恩をしみじみ思ふ路のとう
上方落語うちの師匠は国宝や

正坊
柳弘

師おわす爪を煎じて飲めるなら
師と仰ぐ人が僕より若い人

義子
悟郎

師が多く頭ばかりを下げる会
師の業を盗んで無罪出世する

会美
とし子

師の一喝か陰で今のボクが在る
人

寿美

師は母と菩薩にかけている志功
地

ダン吉

師の涙見ながら余所見もつ出来ぬ
天

英子

師の星が流れて闇が深くなる

鹿太

幾たびの師恩報いる石を積む

千里

兼題「洗濯」

桜井千秀選

洗濯機せわしいうちが花だった

(安)美代子

好きな本ころ洗濯してくる

剛治

洗濯をしながら母が泣く川だ

文子

結婚後洗濯上手になる息子

弘一

うそ洗うことにも慣れた洗濯機

とし子

ストレスも洗濯ものもすぐ溜まる

希久子

洗濯板でございし思い出す昔

ルイ子

病む人がいると洗濯ものを見る

恵美子

あの人の香りを知った洗濯機

白洋

約束はあした洗濯弾んでる

いくの

のり効いた浴衣をたたむ陽の匂い

英子

ペアルック仲良い姿竿に干す

洞庵

やがてやがてはたった一人の洗濯機

森子

嫁姑仲よく分ける洗濯機

狸村

洗濯をしても落ちない夏の罪

佳秋

洗濯もの取り込むだけを思に着せ

千歩

洗濯も料理も出来て嫁がない

鬼遊

母ちゃんの下着は誰も盗まない

金太

洗濯機きょうの迷いが渦を巻く

千里

洗濯機妻の機嫌を知っている

弥生

北新地の路地に洗濯干してある

ダン吉

洗濯のきかない過去をもっている

みつ子

失った切符が浮かぶ洗濯機

洋敏

いさかいをした日も回る洗濯機

冬葉

三浪がチマチマ洗う色パンツ

再婚へ洗いなおした割烹着
洗濯機私の心も投げ入れる

豊太

洗濯機の反転に合う自己批判

高栄

コインランドリーに私の前科おいてくる

シマ子

昨晚の秘密が回る洗濯機

勇太

へそくりも洗濯されてきれい好き

佳秋

三人の子が居てジャンボ洗濯機

哲夫

洗濯機が触れ合う愛のシンフォニー

かすみ

海外へちよつといのちの洗濯に

白洋

子離れができない母の洗濯機

桂香

釣り竿を見つめ命の洗濯日

満州

動熱の体質洗濯してみた

落児

子

正雄

雪月花いのち洗濯できる幸

隆盛

お陽さんの匂いが好きなシーツたち

天笑

洗濯機の渦が吸い込む夏の汗

天笑

はらわたを洗濯してる滝の音

天笑

秀

天笑

洗濯の好きな女に脱がされる

天笑

軸

天笑

洗濯は交代制の共稼ぎ

天笑

兼題「あじさい」

天笑

七変化してあじさいは寺守る

千秀

紫陽花の花の終りの花を剪る

千秀

あじさい寺にきつとあなたが待っている

千秀

あじさい寺に行けばあなたに会えますか

千秀

あじさいよ大事なひとが逝きました

千秀

兼題「あじさい」

千秀

宮西弥生選

千秀

あじさいの雨も涙も七いろに

千秀

紫陽花の彩に惹かれて途中下車

千秀

亡姉をさがしにあじさい寺に来てしまふ

千秀

あじさいと女は恋の罠に墮つ

千秀

紫陽花に雨が好きかと聞いてみる

千秀

あじさいが好きと花屋へお嫁入り
あじさいとお喋りするちひろの絵
あじさいは愛終るたび雫する
あじさいの明日の色知る管理人
あじさいの花弁は女の涙いろ
雨の日にあじさい寺を訪ねよう
あじさいの多彩な性を見飽きない
あじさいの色も変つて姑になる
夢色に染めてあじさい我を捨てず
降る雨にあじさいはしき過ぎないか
空梅雨であじさい色が出ぬ絵皿
あじさいで語る二つの乳母車
あじさいの雨へ落目と言う女
あじさいが奇麗で話まだ続く
あじさいの末路哀しい音がする
あじさいが自分の色を決めかねる
紫陽花のお前も嫁が後れたか
あじさいをこよなく愛し雨おいる
あじさいが病んで女も病んでいる
あじさいで客を呼んでる矢田の寺
紫陽花の存在感を知った雨
心変りと見られあじさい涙ぐむ
あじさいの坂でもの思いにふける
あじさいに仮面などない人柄よ

恵美子

久子

希久子

澄子

洋敏

岳人

桂香

正雄

倫子

柳宏子

凡子

シマ子

千里

諷云児

凡子

白洋

萬的

大輪

富湖

武庫坊

妻男

三男

路児

利武

和子

頂留子

楽生

寿子

あじさいの哀れ散りどき忘れてる
あじさいも私も水をたんと飲み

三男
月子

佳

あじさいの切手は誰に貼りましょう
あじさいの咲く頃黒を着てみよう

文秋
一步

あじさいの絵皿は僕の彩で老い
あじさいを壺に満たして佳人の忌

一風
いわゑ

あじさいに惚れた内気な雨蛙

雅文

人

あじさいもわたしも今が見頃です

月子

地

あじさいの寺に女の駅がある

勇太

天

あじさいも人も迷って生きている

美房

軸

乗りかえて乗りかえて行くあじさい寺

弥生

兼題「祈る」

水に感謝森に祈りがとどいたか
祈り通せば石も仏の顔になる

蟹
恵子

兼題「祈る」

身ごもったときから母は祈るだけ
タイアナの冥福祈る国民葬

柳弘

天も地も祈り続けた父の鍬
母と子の祈りいとしい花手桶

和子

けなげにも何を祈るか茶髪の子
子等の無事コンニチ様を合す

秋子

マザーテレサの祈り世界をかけめぐる
原爆展祈りが深く深くなる

正坊

一生をあれこれ祈ることばかり

寿美

洋

わが祈り届かぬままの蔭の臺
狂ったらもうおしまいだ先ず祈る

節子

母の掌はいつも祈りのかたちして
あの日から祈るかたちでめしを食べ

弥生

体調がいいので祈り忘れかけ
ふろしきに母は祈りも包み込む

月子

明日が来るように祈っているのです
病む窓の白さに祈る千羽鶴

鹿太

ガン告知も祈るしかない命
にぎりめし母の祈りを知っている

恭昌

オベ開始祈る神さま仏さま
千本のバラも一本のバラも祈る

重人

十指から漏れる祈りをくやしがり
無我夢中祈ることさえ忘れてる

冬葉

ヒロシマの祈りへ止まぬ蟬しぐれ
打上げの瞬間科学者も祈る

萬の
度

あじさいの寺の仏壇に光つて
百度石深い祈りに光つて

大輪

早よ死んで欲しいと嫁に祈られる
つぶやきが祈る言葉になるやがて

ますみ
洋敏

点滴と母の祈りに峠越す
淋しきは深い祈りのあとに来る

いつふみ
美代子

祈りにも似て老いの臉は閉ざしがち
祈る声洩れる孤島の天主堂

年代

祈るとは雲を掴むに似て空し
黙祷の一分間は短すぎ

紫香

鍵っ子は母の祈りを知っている

射月芳
しげお

蟬の殻祈るかたちでしがみつ

千里

天笑

老母の部屋朝の祈りで動き出す
無病息災祈りつづけている母だ

金子太
君子

天の声心に届くまで祈る

風生
雲児

祈る姿がますます小さくなる母よ

三男

喜寿傘寿米寿と欲の出る祈り

一步

生かされて朝日と起きて掌を合す

たもつ

喜寿と古稀互いに深くなる祈り

柳宏子

大切な指輪の中を風が吹く
忘れてた指輪も磨く妻みがく

文子

後戻りできぬ指輪に縛られる
誕生石はめるとなせかしやんとする

夕花

窮屈な指輪はずすと寒いくすり指
黒服の男凄みのある指輪

満州
寿恵子

荒れた指だからタイヤで飾ってね
一生を一つの指輪で通す母

射月芳
弘一

オパール神秘がやどる秋の指
左手の指輪に過去を閉じ込める

紫香

欲しい指輪の値札が裏を向いている
母ちゃんの指輪ちよいちよい小言めき

大輪

すぐ回る指輪のすきにたまる鬱
ダイヤの指輪お好み焼を裏返し

保州

指輪などなくても結婚はできる

武庫坊
義

兼題「指輪」

奥田みつ子選

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

兼題「指輪」

神前できつい指輪を嵌められる
保護色の指輪うつかり油断する

いつふみ
勇太

かけがえない指輪と分かち合う余生
とつときを嫁にゆづった日の指輪

澄子

ライバルの指輪眩しいほど光る
ウィンドーの指輪わたしを追いつめる

諷云児
いわゑ

指輪あげてからいじわるされてます
待ちぼうけ指輪にぐちを言っています

義一

愛憎で指輪のりと回ります
母の日のビーズの指輪宝物

かすみ

節くれた指はダイヤを欲しがらぬ
幸福で指輪ない指よく似合う

倫子

紐付きの首輪になるこの指輪
曾祖母の指輪と遺言状に書く

弥生

葛藤へじわじわきつくなる指輪
いつわりを庇う指輪が哭いている

千歩

質流れ指輪も苦労したんだな
約束は夜店で買った指輪から

富湖

安物の指輪で君の返事待つ
後戻りできぬ指輪のひとり言

鹿太

佳

米に換えたこともあったという指輪
幸せとも枷とも思うこの指輪

昭子

結婚の指輪はないが夫婦です
ダイヤの指輪幸せですと書いてない

英子

人

痩せたんとちやうかと指輪回りだす
（清記—希久子）

一風

地

イミテーションだけと信じている指輪

典子

天

餓鬼大將が花の指輪をくれた里

恭昌

軸

指輪は指輪 忘れられない人のあり

みつ子

兼題「茶碗」

橋高薫風選

新妻の朝の茶碗がチンチロリン
良き出会いとはこんなことはん盛る

章久

点てた茶を愛でて茶碗の価値知らず
どこからの電話や茶碗持ったまま

恵美

お茶碗の数を揃えて待っています
芋の葉も大根めしも知る茶碗

照子

中学へ上がる子茶碗かえてやる
お祝いに貰うた茶碗しまつとき

正雄

先頭に妻を立ててる飯茶碗
ストレスに具いっばいの茶碗むし

重人

陰膳の茶碗へ今朝は栗御飯
茶碗蒸しうちは松茸入れている

妻子

ちやぶ台も茶碗も主も時代もの
欠け茶碗の中に終身刑がある

白漢子

五十年妻の茶碗の強いこと
子が巣立ち茶碗二つを洗うだけ

定子

ブラスチックの茶碗に耐えた退院日
寝たきりへ茶碗ひとつを替えてみる

豊太

松頼へ亡母の茶碗と話し込む
秋茄子がおいしい仲のよい茶碗

いわゑ
重人

お茶碗を洗って帰る嫁が好き
沈黙の茶碗沈んでいる炎

義一

まっとうに生きた茶碗にあるひびき
お茶碗の中にサイコロ二つある

朝子

毒を盛る茶碗を妻が持っている
父よりも母の茶碗のやや暗し

大輪

茶碗ひとつ風と歩いた山頭火
自分だけ不幸と思う茶碗酒

千里

茶碗叩いて唄えば涙乾きます
お茶碗も枕もふたつとも元氣

岳人

ひとり居に茶碗小鉢の区別なし
茶碗酒自分の影と飲んでいる

グン吉

佳

手作りの茶碗で旨いサケ茶漬け
煮くずれをたつぷり盛った益子焼

洞庵

国宝にされた茶碗の孤独感
海荒れて男茶碗で酒をのむ

とし子

茶碗酒何で負けたか知っている
当り前の顔で茶碗と箸がある

白秋

夫婦茶碗かけても元の柄が良い
復元の住居茶碗も置いてある

佳

杯を持つより志野が手に馴染む
（清記—希久子）

かすみ

鹿太

三男

（清記—希久子）

老地物語

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

堺川柳会（前月分） 河内 月子報

にっこりと横目で狙い爪を研ぐ
すり寄って来てばい菌が手を握る
薬より黴菌たちが賢なり
市場籠乳酸菌も忘れてず
次々と地球を侵す恐い菌
はずれてもわざとはずしたように言う
狙うのはロマン北極点に立つ
無菌室出れば雑菌待ちかまへ
懐を狙う抗菌グッズたち
開発に利権を狙う蟻の群れ
ばい菌の真ん中に居て元気でず
新聞の隅にはんが書いてある
見ざる聞かざる言わざるで時効まで
ほんとうの愛を貫くガラス玉
無菌室で育って頼りない男
挨拶がすむと狙いのさぐり合い
爛々と獲物を狙うストーカー
大物を狙って小物まで逃がす
わずかだけ空巣狙いに置いてある

樹千代

謎ひとつ解けてほんとが恐くなる
ほんとうの愛だふたりは燃えつきた
ほんとはね寂しがりやで騒いでる
ほんとだが誰にも信じて貰えない
狙われてハートピンクに舞い上がる
目が見える歩けるほんととありがたい
真実をさらけ出せないのも女
ほんとは妻もわたしも失業園
クラス会主婦を忘れて羽のばす
老姉妹生きる話と死のはなし
強がりを言ってほんととは倦怠期

ローズ川柳会

山崎

君子報

アキ 洞庵 菜々 昭子 満州 文 岳人 梓 寿恵子 芳水

平凡がしあわせと知る年輪よ
しあわせは時々見てる夢の中
岸和田川柳会 長谷川呂万報
ばけたかな優しく優しと言われては
アクセルをやさしい妻がいつも踏み
やさしい女と二人で降りたい北新地
貧しさに克つ心根の優しさよ
優しさがあふれる母の淡い文字
春の夜の夢ははかなし走馬灯
誘惑を上手に躲す年の功
また来てね甘い誘いに騙される
ジョークともとれる誘いに少し揺れ
核を持つやはりに使ってみたくなる
病院へヒマをつぶしに行ってくる
折角の余暇が懐中無一文
持て余す余暇が貯金ゼロにする
宮仕へ余暇が昼寝の有休日
かあちゃんに使われている僕の余暇
大学が好きで五年も行きました
合格を諦め俺の道を行く
落第へ母は黙って包み込み
落第のない主婦業の怠け癖
流儀にはこだわりなし孫の嫁
流儀などどうでもよいが先に酒
通じない足して二で割る日本流
生け花の流儀無用の野のスマイレ
煙そうな人から握手する流儀
俺流で押し通してる実力派

義女 笑子 蛙城 辰郎 一弥 白光子 狸村 敏光 盛之 松風 洞庵 ダン吉 弘象 一南 けい子 富志子 苑子 鹿太郎 ひで さよ子 昭二 朝一 吉三 路子 基 愿

大相撲力士の塩に自己流儀
余生いま妻の流儀に慣らされる
鯉殺すのにも流儀がある神事

お流儀を知らなくたって茶は飲める
流儀などないが美味しいお茶を入れ

川柳塔おっぱこ吟社

木村あきら報

カアさんの太鼓に主人踊らされ

組板の鯉はいっぱ跳ねてみる
家中を光らせている姑のウツ

記念品オープンセールに人の波
しまったと思えば口は閉ざされず

よろこばせお礼言われてなおうれし
逢い引きも出来ぬ日照りの天の川

頑張れと身体が思いについてこず
崖淵に立つて人生考える

スランブを氣迫でやっとなち破り
借りて来た傘杖にする晴れた空

返還を世界が見てる香港を
記念日に心の扉開けてみる

茶柱が立つて記念日盛り上がる
孫娘初めて歩いた記念靴

石の上座の仏に願かける
三十年記念指輪にある重み

川柳岩出

児島与呂志報

四コマが暗い紙面に窓を開け
一汗をかいて涼しい顔をする

なぐさめる友心境を語る汗

良一
千鶴子
悦男

呂万
甚一
萬的

金太
柳宏子

あきら

吟笑

マツエ

かおり

放任

輝夫

坊太郎

チカエ

いさむ

よしむ

治延

正雪

ひかり

なつ恵

はみ子

文仙

現役の情熱活気満ちあふれ
少年の記事今日もまた国動く
競い合う記事でマスコミ身を削る

幸せの蔭にかくれた愛と汗
玉の汗見えないものが見えつくる

月下美人一夜のうちに燃えつきる
子育ての汗は少しも苦にならぬ

おじやま虫炎える恋にも入り込む
一仕事成した笑顔に玉の汗

冷えきった二人に熱い炙さくか
新聞の横文字記事に追いつかず

連れ添って互いに汗も分かち合い
汗かいてやっとなしとげ安堵する

聴く耳に火傷はしない熱い恋
大地の暑さ汗に見つめる働く手

大原川柳社

矢内寿恵子報

旅の宿幹事悩ます大軒

旅の宿寝言と軒同居する

悪口を言えは軒がはたと止み

軒には勝てず隣へ入り込む

寝つかれぬ私ゆさぶる大軒

もう愚痴を忘れ老婆高軒

銀行の軒なかなか眠れない

掃省子も父にそっくり大軒

寝返りを打ちつつ軒我慢する
口あけて寝言交えた大軒
酔いつぶれ天下御免の大軒
氣持良い軒うらやむ不眠症

和子

智恵子

保子

英子

正直

春子

愛子

ふみえ

正義

重徳

哲雄

昌子

たねえ

アサ

与呂志

みづえ

さちこ

あやこ

スポーツが軒とらえる会議中
やりくりは妻に任せて高軒
終列車終点までも来た軒

なんの夢軒がすかに揺れている
あの軒往復切符買っている

留守番は電話頼んでいる軒
軒かく我家の女神お疲れで

車内みな笑う軒がまだ続き
悔いのない汗で軒も二重奏

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

戴帽式ひとみ涼しい娘が並び
煩惱や深夜放送ひとり聞く

豊かさに慣れて煩惱浮かれ出す
子の数に心配の数比例する

佳句地十選 (9月号から)

高田 美代子

音一つせぬというのも恐ろしい
生きざまを書くにはうすいHB

芽を出そう出そうと明日の方へ向く
産んだのは女育てたのも女

もういいよそのうち過去になることだ
老人大学先ず君が代を歌います

ため息でとけてしまったかき氷
人間不信 乱れた髪を二度洗う

歪を受ける互角に呑む女
お豆腐の味がこのごろよく分かる

美佐子

みさえ

たづ子

巴子

正己

ひでの

あすなろ

和子

寿恵子

春子

幸枝

一風

隆盛

正坊

桂子

森子

大輪

房子

山高と髭で日本開化され

夏の絵にむぎわら帽の子がい

親も子も好きな帽子はタイガース

再会で灰に残った火種知る

双子です服も帽子もべアルック

ベレー帽妻が笑いを堪えている

捨てようかいいやい案山子待つ帽子

マジシャンの飛んだ帽子が雲になり

浮気など出来ない人と妻知らず

夏帽子ななめ真深に歳を秘め

宮参り帽子の中の児は眠り

思いきり泣いて煩惱流し出す

汗だくになつても流行ニット帽

ベレー帽どうかぶつてもよく似合い

失楽園浮気予備軍動き出す

帽子とはとくに仲よし僕のデコ

お地蔵に手編の帽子きせてある

煩惱のままに人生楽しもう

あじさいの帽子につりお地蔵さん

カセットの落語で頭もみほぐす

貴婦人の帽子と知らず鳩の糞

川柳東大阪

森下

愛論報

曇り勝ちまだ真実は話せない
水晶の曇り女難を告げている
晴れ後曇り今日は誘わぬ雨女
心境は曇り晴れる日じつと待つ
あどけない寝顔達者な母である
母さんの口癖に言う達者でな

友甫 朝子 ますみ 幸子 シエ まさと 明子 けいこ いつみ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏 剛治 ミツ子 道子 君江 鬼遊

口だけは達者波紋に気づかない
ぎこちなく生きて達者な父の汗
びっくりがまだまだ続く世紀末
暗闇でいきなり肩を叩かれた
出目金にびっくりをした過去がある
本物と出会いつきめき止まらない
本物と思つて女房貰つたが
はんなりとひかる蜜に恋の芯
廃鉱の夏おろおろと蟬を聞く
立ち読みをして銭の無い本の虫
それなりの理由で増えているイナゴ
夕焼けにいのち燃やして赤トンボ

南大阪川柳会

寺井

東雲報

柳伸 治也 湖風 賢子 文秋 昭二 朝子 三重子 良伸 信治 愛論 楓楽 庸佑 真砂 朝美的 萬的 寿美 度 透太 ダン吉 凡子 章久 たもつ 志華子 重人 東雲

気分直してくれと仲裁酒を注ぎ
明日まで縫って上げると母夜なべ
気構えをほめて成果は期待せず
左遷地で妻と二人で気構える
気分良く飲めや歌えや祝酒
暑氣払い気分転換夏祭
気分壞されている満員車
気分よく飲んで帰れば締め出され
気構えに若さがあつた七転び
賞味期限過ぎて味出る老夫婦
あの時の機知が幸せ探り当て
期限前に急に慌てる悪い癖
気構えは出来ても不安先にたち
共感の拍手意外にさめやすし
縄梯子上り下りに機知が在る

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

文秋 頂留子 柳宏子 半蔵門 久峰 柳伸 悟郎 哲郎 秋子 公一 シメ子 三男 智久 千梢 清水 香住 清芳 弘直 欣史子 喜美子 あずき シマ子 能子

竹原川柳会

時広

一路報

届かない夢に手紙を書いている
大変だ笑うと私二重顎
高史子 高千枝

愛も哀も皺の深さの中にある
 深い深い夏の山空氣が甘い
 深ぶかと頭下けてもつみは罪
 深入りしすまい私に荷が重い
 性格でしようか深入りしたくなる
 ホタル飛ぶ深い祈りの中で飛ぶ
 人生に卒業は無し鎌を研ぐ
 花園へつづくトンネルなら抜ける
 夏の海浜えない私包み込む
 餌をねだる朝の金魚は元氣すぎ
 家中の知恵を借り借り生きてます
 満点がジャンプで帰るランドセル
 若い氣のジャンプ足から苦情くる
 ジャンプして挫折きり抜く青春譜
 ジャンプして転んだことは黙っとく
 水門を開けろと跳ねるムツゴロウ
 幸せをはこんでおくれ流れ星
 あの星は亡母かうインクしてるよう
 幸運の星に生まれれて平和です
 ホロ酔いの脳を刺激の流れ星
 星祭り赤い紙には恋一句
 煙突の街で光れぬ星である

高柳川柳サークル卯の花

川島譲云児報

わたしの裏を流れる赤い河
 裏通りへ入ると女は手を握る
 軍手干す裏も表もない暮らし
 真っ先に本音が言える河内弁
 立て前と本音が渦を巻くのれん

蘭 幸 夏 喜 清 水 栄 恵 菁 居 笑 夫 節 夫 比 呂 子 汎 美 淑 子 喜 久 恵 喜 美 子 笹 舟 一 枝 静 風 房 子 静 佳 蝸 牛 美 佐 雄 貞 子 一 路

ふる里の川は本音の泥を吐く
 どさくさの中で本音が好きと言う
 菓子折りの本音解らぬままの味
 金棒を持った鬼にもある本音
 行間に秘めた本音を読み取れず
 本音には迫りたくないのも夫婦
 産寧坂本音を抱いておりてゆく
 天の川本音はデザートのあとで
 こっそりと親の財産調べてる
 こっそりと合図何時もの花時計
 卒寿まだこっそり眉毛書いてはる
 神様にこっそり告げる軽い罪
 こっそりと迷いを亡父に問いかける
 こっそりと聞けば私の噂する
 こっそりと妻のへそくり借りておく
 短距離は歩きなはれと乗車拒否
 元氣だよただそれだけの子の便り
 図書館で浦島太郎になるひと日
 花時計短気は損と知っている
 短距離に自信があつたのは昔
 短目に構えていなす変化球
 あつけない十四玉の電話口
 ひたすらに海を目指している小川
 八起き目に手を貸す友はもういない
 深く静かに地を這ってくる噂
 川柳塔みぞくち
 小西 雄々報

艶 子 柳 宏 子 稲 子 茶 子 恵 子 静 江 薫 東 雲 ルイ 子 杜 的 澄 子 比 志 紫 香 石 舟 か おり 蓑 沓 宵 草 芳 子 白 溪 子 泰 雄 と し 子 あ き ら 克 治 秀 夫 久 子 静 江

化粧水へちまで作り十五年
 へちま水趣味と実益かねている
 へちま棚夏の風情が楽しめる
 生活の知恵はへちまの使い分け
 へちま作り楽しみにする化粧水
 灼熱に拍車をかける蟬時雨
 背伸びするへちまに妥協せぬつもり
 三幸川柳教室 三宅 保州報
 生活の支えになった針と糸
 荷くずれを支えてくれた血の絆
 人知らぬ汗が支えたスタadium
 自立するチャンスへ外す補助車
 後悔が支えになつてジャンプする
 風呂めしと威張つた顔で頼ってる
 子に頼る時の準備はしておこう
 丸腰の頼みごとには断われぬ
 愛称がついて先生頼られる
 依頼心ばかり膨らむしゃぼん玉
 かけひきをせぬ人だから頼み込む
 難問を頼まれて来る千鳥足
 肖像面ピカソに頼まないように
 衣食たんに礼節置いてきた世代
 お礼なんて期待するから腹が立つ
 のしつけて粗品は少し格を上げ
 巡礼の鈴に消された罪一つ
 おおきにと有難うとで今日も暮れ
 板さんへ礼儀残さず食べておく
 ワープロの礼状さめた顔でくる

鈴 枝 弘 子 康 女 智 恵 子 信 敬 豊 枝 雄 々 よ し 子 美 寿 子 嘉 平 町 子 貞 子 起 世 子 和 代 鉄 治 親 路 美 智 子 靖 子 桂 香 敏 子 朱 夏 さ ち 子 正 楠 千 秀 秀 男

茶髪の娘にどうぞと席を譲られる
お茶の時間隣の猫も席につく
お茶の間のいちごミルクがおしゃべりで
もうお茶も飲めない父の手を握る
玉露より番茶が性に合っている
困つたら茶箱の亡母に聞きに行く
穢土浄土お茶が生命をなぐさめる
バスボート持つて茶がゆを恋しがる
新茶淹れ白い時間の中にいる
青い目が日本の心知る茶室

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

ノモアを腹から叫ぶ原爆忌
骨太な父が泣いてる紙おむつ
物知りになれる望遠鏡がある
天明の年に童女とある先祖
僕みたいな骨でも拾ってくれますか
無骨者孫には弱い肩車
古墳から骨が時代の風吹かす
いい夢はかくしておこう土性骨
骨壺に一世の汗が光っている
ご先祖に一番ちがいのが僕だ
困つたとき先祖に頼る癖がある
時々先祖に会える二合壺
先祖から母ちゃん強い家系です
御先祖の美人系からはすされる
御先祖の汗をバブルが持つてゆき
腹の底から笑うニュースに飢えている
何もかも承知の上です握手

正一 章子 公子 保州 三千子 和子 めぐみ 孝子 初子 健三郎 高夫 保州 大輪 賢二 金太 吞天 佐代子 泰子 泰子 和重 親路 稚代 富美子 三男 紀久子

腹決めて行かねば行けぬ暴風雨
知名度の高さ吹聴する花輪
知っている人にもついて行つちや駄目
木簡出土歴史の矛盾も知らされる
天が知る地が知るわたしの親不幸
いらんこと知つた許りに重い靴
知る程に物が言えなくなつてくる
下町の郷愁知つていた寅さん
虫の名を知つて絵日記弾みだす
恋を知る時限爆弾抱くように
火の海を渡ると知つてゐる閻魔
古里の駅は知らない人ばかり
腹立てたことは負けたということさ

川柳大阪 坊農 柳弘報

デザートはご飯を食べたあとですよ
無い袖を振れぬつもりが振つていた
ケイタイをゆかたの帯にさしている
七五三今年も着物貸衣裳
華やかなネオンに憂さが融ける夜
ケーキ食べながらお酒飲んではる
年金族デザートのおよぶ飲みのみ
華やかに飾つて香港に帰る
デザートで偏食直す母の知恵
思春期の孫も娘とみでの距離
留袖の母の涙に見た苦労
華やかな人生だったと言われたい
指定席いつも貴男のいる安堵
華やかな水着が過疎を刺激する

輝子 鉄治 願 萬的 豊太 柳宏子 射月芳 千尋子 英子 富湖 寿子 紀美女 克子 須賀夫 信醉 中3 主 柳弘報

祖母達が競う路地裏四季の花
ふんわりと着物をきせた言葉尻
一張羅着せて案山子のコンテスト
趣味だから楽しみながら着物縫う
火星人写つてほしい道進む
同窓会母は着物の若作り
中三のころの闇に椅子がない
華やかな男で花火大好きで
浴衣着た外反母趾の美人行く
体型をかくして妻ができ上がる
花火師の腕は華麗な絵を描く
ゆつくりと華やかになつていく鏡
貧乏性椅子にはいつも浅く掛け
総会屋企業ストツプ挙手をする
華やかにいくさの顔になる化粧
相思相愛華やかなりし日の誤算

川柳藤井寺 高田美代子報

思いやり初めて聞いた振りもして
通過する病氣も出来ぬ予算案
釣れぬのは道具のせいでないらしい
徳利は昔話が大好きで
ワンピースを打つて十指良く動く
備長炭臭いすつきり消している
三度目の電話にありつたけを話す
話下手だが悪口は辛辣だ
もつともつと話せばよかった亡母想う
耳よりな話に尾ひれつてくる
賞罰をつけて納得さす話

柳昌 青道 比久志 雅果 朝子 敏 まつお ダン吉 金太 笑風 一步 三十四 重人 柳弘 昭子 昌子 志洋 昭水 三郎 恒雄 扶美代 宗一 桂子 かつみ アキ

とつとつと話す人から知る誠意
先走りされて話が崩れだし
内緒ばなしみんな近寄る昼休み
ここだけの話大きな声になる

美しい素足へ保険掛けてます
浴衣がけ素足に下駄の涼しそ
故郷の土の香りをかき素足
母を追う素足飛び出す雨の中

気の弱い素足がドジをまた踏んだ
はつきりとしてから空が広くなる
はつきりさせるとわたしの敗けになる
壁の声はつきり聞いた耳の底

はつきりと言ふと論ず喉仏
梅雨明け予報はつきりしたいことがある
矢印がはつきり見えていて迷つ

川柳塔唐津支部
久保 正剣報

強力な野党待つてる自民党
権力に媚びて人々もの言わず
婆ちゃんの数えなお札魚臭い
里帰り母に告げたい事ばかり

鯛の庭の木で鳴く梅雨晴間
浜の松山の土には馴染みかね
玄海に巨鯨が街を呑みに来る
絶望の瞳が拝む流れ星

人間をすてて生きろと悟り得ず
題名を牛歩と書いて卒寿です
努力するいい思い出を残すため
買ひ物のメモが出てきた雨宿り

絹歌
吸江
みよ子
花梢
利武
智造
鐘久
キシ子
和樹
敦子
和子
修六
悦子
美代子
六点

窓際は社の裏側もよく見える
村祭り豊作よりも過疎憂う
富柳会 池 森子報

折れぬのが毛利三本矢の話
解氷をすれば流れる人の道
折り山にひそませてある亡父の地図
おしい雲聞いて欲しいな胸の中
関病記雲の変化を見て飽きず
入道雲元氣な頃の父思ふ
はずみ出す一人ばつちの花ごよみ
八月の雲泰然と峰を抱き
転がって雲の流れを見て飽きず
雲がくれみんな集まるそうだから
デコボコの道を素足でかけていく
午後三時まるい鉛筆ころがりぬ
無事着いた火星人にはまだ逢えぬ
煩惱の川に浮いたり沈んだり
適当なところで折れる母の知恵
みだれ髪と謝野晶子とかき氷
雲海にしばし心を遊ばせる

勝 視
正 剣

宗一
とも子
アキ
冬虹
絹歌
智久
昭水
文子
紅紫朗
鐘造
二子
花梢
美代子
欣之
岳人
登子

柳 会 池 森子報

折れぬのが毛利三本矢の話
解氷をすれば流れる人の道
折り山にひそませてある亡父の地図
おしい雲聞いて欲しいな胸の中
関病記雲の変化を見て飽きず
入道雲元氣な頃の父思ふ
はずみ出す一人ばつちの花ごよみ
八月の雲泰然と峰を抱き
転がって雲の流れを見て飽きず
雲がくれみんな集まるそうだから
デコボコの道を素足でかけていく
午後三時まるい鉛筆ころがりぬ
無事着いた火星人にはまだ逢えぬ
煩惱の川に浮いたり沈んだり
適当なところで折れる母の知恵
みだれ髪と謝野晶子とかき氷
雲海にしばし心を遊ばせる

川柳ささやま 酒井 靖子報

自分史を書きつぐ鉛筆削つてる
昼寝です蟬もひる寝をしませんか
またしても電気消すから嫌われる
思い出がきれいなままで燃え残る
母さんがきれいうれい参観日

多美子
末野
一 繁
八重子
素水
とみ子
つや子
ヒサ子
和子
富美
可住
靖子

柳 会 池 森子報

折れぬのが毛利三本矢の話
解氷をすれば流れる人の道
折り山にひそませてある亡父の地図
おしい雲聞いて欲しいな胸の中
関病記雲の変化を見て飽きず
入道雲元氣な頃の父思ふ
はずみ出す一人ばつちの花ごよみ
八月の雲泰然と峰を抱き
転がって雲の流れを見て飽きず
雲がくれみんな集まるそうだから
デコボコの道を素足でかけていく
午後三時まるい鉛筆ころがりぬ
無事着いた火星人にはまだ逢えぬ
煩惱の川に浮いたり沈んだり
適当なところで折れる母の知恵
みだれ髪と謝野晶子とかき氷
雲海にしばし心を遊ばせる

川柳ささやま 酒井 靖子報

自分史を書きつぐ鉛筆削つてる
昼寝です蟬もひる寝をしませんか
またしても電気消すから嫌われる
思い出がきれいなままで燃え残る
母さんがきれいうれい参観日

棟上げが済んで棟梁客となり
きれいでもないが優しい妻とい
一人部屋灯り消しても見える過去
きれいだね好きな人でも出来たのか
たけなわになつて主客は放つとかれ
ひやかしの客も神さま仏さま
洗濯機五色の罪を渦が消す
落し穴の上にはきれいな蓋を置く
流れ星きれいと思ふ日の孤独
帳消しにしようと思ふ一本提げて来る
初盆へ絆がひとつ消えてゆく
きれいだと言わぬ男の靴磨く
身内でも金はきつちりして同居

多美子
末野
一 繁
八重子
素水
とみ子
つや子
ヒサ子
和子
富美
可住
靖子

柳 会 池 森子報

折れぬのが毛利三本矢の話
解氷をすれば流れる人の道
折り山にひそませてある亡父の地図
おしい雲聞いて欲しいな胸の中
関病記雲の変化を見て飽きず
入道雲元氣な頃の父思ふ
はずみ出す一人ばつちの花ごよみ
八月の雲泰然と峰を抱き
転がって雲の流れを見て飽きず
雲がくれみんな集まるそうだから
デコボコの道を素足でかけていく
午後三時まるい鉛筆ころがりぬ
無事着いた火星人にはまだ逢えぬ
煩惱の川に浮いたり沈んだり
適当なところで折れる母の知恵
みだれ髪と謝野晶子とかき氷
雲海にしばし心を遊ばせる

川柳ささやま 酒井 靖子報

自分史を書きつぐ鉛筆削つてる
昼寝です蟬もひる寝をしませんか
またしても電気消すから嫌われる
思い出がきれいなままで燃え残る
母さんがきれいうれい参観日

多美子
末野
一 繁
八重子
素水
とみ子
つや子
ヒサ子
和子
富美
可住
靖子

柳 会 池 森子報

折れぬのが毛利三本矢の話
解氷をすれば流れる人の道
折り山にひそませてある亡父の地図
おしい雲聞いて欲しいな胸の中
関病記雲の変化を見て飽きず
入道雲元氣な頃の父思ふ
はずみ出す一人ばつちの花ごよみ
八月の雲泰然と峰を抱き
転がって雲の流れを見て飽きず
雲がくれみんな集まるそうだから
デコボコの道を素足でかけていく
午後三時まるい鉛筆ころがりぬ
無事着いた火星人にはまだ逢えぬ
煩惱の川に浮いたり沈んだり
適当なところで折れる母の知恵
みだれ髪と謝野晶子とかき氷
雲海にしばし心を遊ばせる

川柳ささやま 酒井 靖子報

自分史を書きつぐ鉛筆削つてる
昼寝です蟬もひる寝をしませんか
またしても電気消すから嫌われる
思い出がきれいなままで燃え残る
母さんがきれいうれい参観日

柳 会 池 森子報

折れぬのが毛利三本矢の話
解氷をすれば流れる人の道
折り山にひそませてある亡父の地図
おしい雲聞いて欲しいな胸の中
関病記雲の変化を見て飽きず
入道雲元氣な頃の父思ふ
はずみ出す一人ばつちの花ごよみ
八月の雲泰然と峰を抱き
転がって雲の流れを見て飽きず
雲がくれみんな集まるそうだから
デコボコの道を素足でかけていく
午後三時まるい鉛筆ころがりぬ
無事着いた火星人にはまだ逢えぬ
煩惱の川に浮いたり沈んだり
適当なところで折れる母の知恵
みだれ髪と謝野晶子とかき氷
雲海にしばし心を遊ばせる

川柳ささやま 酒井 靖子報

自分史を書きつぐ鉛筆削つてる
昼寝です蟬もひる寝をしませんか
またしても電気消すから嫌われる
思い出がきれいなままで燃え残る
母さんがきれいうれい参観日

多美子
末野
一 繁
八重子
素水
とみ子
つや子
ヒサ子
和子
富美
可住
靖子

柳 会 池 森子報

折れぬのが毛利三本矢の話
解氷をすれば流れる人の道
折り山にひそませてある亡父の地図
おしい雲聞いて欲しいな胸の中
関病記雲の変化を見て飽きず
入道雲元氣な頃の父思ふ
はずみ出す一人ばつちの花ごよみ
八月の雲泰然と峰を抱き
転がって雲の流れを見て飽きず
雲がくれみんな集まるそうだから
デコボコの道を素足でかけていく
午後三時まるい鉛筆ころがりぬ
無事着いた火星人にはまだ逢えぬ
煩惱の川に浮いたり沈んだり
適当なところで折れる母の知恵
みだれ髪と謝野晶子とかき氷
雲海にしばし心を遊ばせる

川柳ささやま 酒井 靖子報

自分史を書きつぐ鉛筆削つてる
昼寝です蟬もひる寝をしませんか
またしても電気消すから嫌われる
思い出がきれいなままで燃え残る
母さんがきれいうれい参観日

多美子
末野
一 繁
八重子
素水
とみ子
つや子
ヒサ子
和子
富美
可住
靖子

柳 会 池 森子報

うなずいて遠目で励ます運動会
うなずいても一言だけは忘れな
い
うなずきがうなずき方にふとに
じむ
うなずいて見つめる瞳裏切れぬ
風鈴もひと休みする熱帯夜
仏道へ少し目が向く盆休み
盆休み過疎を賑わす都会かぜ

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

いい女涼しい顔で嘘をつく
涼風が男の前でつと止まる
涼風が昔の恋を語りだす
涼み台子供いっぱい居た昔
涼しくならぬ側の女が熱いから
賑やかな街で買物したくなり
賑やかな通りでもらうエネルギー
賑やかな母さんが居て子が跳ねる
遠足の賑やかな声列を組み
賑やかか誘い祭りの波に乗る
湖に真つ赤なバラが浮いている
鳩尾の野心は湖に捨ててきた
宍道湖の鏡に心のぞかれる
わたくしを騎して湖にさらわれる
宍道湖を見下ろす墓地で眠りたい
湖のまだいのちあり魚の住む
湖をバックに娘の写真撮る
寅さんを想い出させる宿の下駄
嫌なことみんな忘れて宿の下駄

久枝
茂美
明子
午朗
静恵
登志子
陽子
登美子
きふみ
きみ子
雄々
房子
章峰
太泡
早苗
みえ
桂子
義良

宿下駄にはつと息づく足の裏
焼印が真つ逆さまの宿の下駄
ナイーブな父宿下駄もさまになり
宿下駄のままでバチンコ戻らない
客が来る日の掃除念が入り
千客万来ママが美人でよく流行る
初孫が主客になつて誕生日
いい客で教育勸語思い出す
冷やかしの客の懐説も夜店
冷やかしの客もいるらし夜店の灯

京都塔の会

松川

杜的報

友女
求芽
友熙
紫香
白漢子
波留吉
磯
京子
諷云児
百合子
芳子
吉之助
栄
豊次
杜的
高栄
庸佑

城北川柳会

吐田 公一報

定年の駅で憩いの地図を買う
検査して診断日までの断頭台
戦前に徴兵検査という閑所
今ごろになつて生き方考える
副作用ない漢方薬届け
思いっきり平和の鐘を鳴らせよう
亡き父によくどなられた子もどなり
いつからか似たもの夫婦になつていた
蝶が来てふと雑念の糸を断つ
週休七日それでも予定表が要る
花と花競わせるのか寄せ植えは
ライバルにはめられてから負け続き
薄情な言葉へはほえみ返しとく

英一
巨詩
ただし
正坊
達子
笑女
とし
春蘭
美穂
年代
武庫坊
水客
博遊
秀夫
静枝
美代子
典子
史風
トヨ子
とし子
高栄
政子
和歌子
扇帆
久留美
倫子

恋をしてやせて結婚してこえる
 したたかに生きて居ります指の爪
 鮎は瀬に人は自然の情に棲む
 紫陽花にあやかりたいと七変化
 ライバルの思の乱れを見のがさぬ
 目札が永のわかれになろうとは
 民宿の仏法僧をきく枕
 いい夢を見たくて枕裏返す
 風呂上がり一喜一憂の体重計
 六月の台風お前もへそ曲り
 ラストまで謎が解けない不眠症
 ゆっくりと答を選ぶヤジロベー
 空の青きどもの服が溶けてゆく
 骨になる扉大きな音を立て

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

あい子 春蘭 寿美子 達子 朝子 あやめ 一枝 白峰 登美子 千歩 陸子 昭子 公一

昔から裏通りが好きだった
 目の前のこと片付けて明日は明日
 服らます明日が老いを忘れさせ
 遠くてもなあが耳を持っている
 雑草で生きたる渡世も気楽です
 百日草百日咲いていた疲れ
 遠い話はいない正直な時計
 潮騒が届く異国からの手紙
 尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

天雀 寿々子 恵子 八重子 瑞枝 田鶴 晶 荒介 向子 歌子 年代 昭三 求芽 比呂志 富世 薫 吉太郎 白兎 紫香 義芳 伊三郎 節子 正子 夢之助 芳子

ふところの蛇にかまれている小指
 こま切れの憩いを紡ぐ茄子の馬
 花のない花瓶を照らす夕日影
 兵隊が一人もいない戦争画
 古本を処分し兼ねて暑い部屋
 新地かたろい男へ誘い水
 盆休みたど寝るだけの独り者
 蟬の声散歩の朝を出迎える
 安全帽の父は一級建築士
 善人と言われてペロリ舌を出す
 西宮北口川柳会 亀岡 哲子報

美子 澄子 千恵 武庫坊 一笛 昌子 白溪子 弘治 光穂 哲子報 富喜子 義子 江美 求芽 柳宏子 紫香 諷云児 佳秋 透太 春蘭 絹子 正とし 澄子 トミエ

好きな人まだまだ居って死ねません
満九十口ぐち長寿祝われる
熱帯魚のキスから甘えてみたくなる
期待した秀才それ程出世せず
失敗も大中小があり楽し
ゴミを出す男に洗脳されました
じいさんが平成の頃口ずさみ
無駄口の中でストレスまで拾う
初めからその気だったと言ってお世辞
ふるさとの川で汚れた掌を洗う
ふるさとを両手に下げて母がくる
親も子もブランドを着る神戸線
無罪にしてやれないが盆が来る

岬川柳会

八十田洞庵報

野心充つ瞳に燃える炎みる
衣食住充ちてしあわせ見失う
踏まれてもそつと咲く花心充つ
憎しみに充ちた噂が瀬に流む
西陣の型紙作り三代目
あの人の電話で椅子を持つてくる
充たされて歩幅長く合う老いの坂
川柳で充実感のある暮らし
酒盛りのネタ充ちている月おぼろ
型破りで親を泣かせた息子と同居
充たされて老婆心から出る小言
型紙で世界を駆けているグッチ
人生の充つる節目をつかむ人
充ち足りぬ思いが彼へ走らせる

房子
ルイ子
晴美
美智子
とみ子
萬文
白漢子
鹿太
いゝゑ
みつ子
しげお
勇
みやこ
信博
庄六
幸美
正美
里子
みつ子
年子
悦子
浪速子
鉄男
ヤエ

しみじみと充実のとき噛みしめる
充ち足りて午後の一時はつとする
慰安会飲めない酒で型破り
充実のつもりがいつも追われてる
物ばかり充ちて心渴いてる
ひとときを充たすお三時豆を挽く

川柳塔打吹

米田

幸子報

自転車が寝がえっている風のせい
山小屋の空家利用しペンションに
あるなれば飲ませてあげたいひと雫
はひふへは今日の笑いはほにしよう
訳あってふさふさ髪を剃り落とす
煽てられ豚も真珠が欲しくなる
峠から見ふる里は美しい
人間と猿一匹が往く峠
芋の苗兄が植えたらよく育ち
ふさふさと葡萄も実るワイン村
トンネルで人形峠ひとまたぎ
幸せはいつも峠の先にある
人間が嫌で峠に立つてはいる
煽てられ植木の花が微笑んだ
煽てられその気になってほそを噛む
下手な芝居の煽てに乗ってやるか
背なの荷が重い煽てに乗ってから
ふさふさにきつと未練のある尼僧
ふさふさと乙女の髪は美しい
ふさふさと缺が迷うブドウ狩り
ほめ殺しする気が敵に煽てられ

とみ
ミチエ
令子
龍弘
ユミ子
洞庵
玲子
三代子
セツ子
孝恵
かつみ
よしえ
蓼沓
勝見
弘朗
富枝
博丈
芳光
ひさ子
和歌子
季芳
多哥由
帆雀
節子
仙岳
佳女
一京

この辺が地獄の峠かも知れぬ
人生の峠は古希と決めている
峠まで行かぬと飯にありつけぬ

はびきの市民川柳会

菅田 絢子報

転んでも只では起きぬ豆博士
きれい過ぎる話アキビをこらえてる
薬飲む手付きに年期はいつて
ここでなら一人になれるパチンコ屋
一言を抑えて続く夫婦仲
家庭より長いつきあい赤提灯
確実に成長してる亀の甲
お土産に免じて許す午前様
許すとは言わず黙って酒をつぐ
味わえば父の文句も温かい
まず香り喉で味わうテイタイム
僧房もこっそり味わう土用丑
味わって飲んでおります吟讓酒
湧き水の味を知ってる登山靴
妻の顔のびのび明るいフルムーン
のびのびと明るく育てる百度石
のびのびと歳時記重ねて子は巣立ち
年金の財布のびのびしたかろう
のびのびと御輿を担ぐ茶髪娘
ご無沙汰の筆が今夜も動かない
のびのびとしたくて離婚考える
のびのびと病衣はげますカンナの緋
微笑んでばかりの亡夫が物足らぬ
スマイルの消えた少女に教師の目

蜜
松盛
幸子
さとみ
扶美代
重人
昭平
敦子
伴子
吐来
志洋
たけし
悦子
かつみ
美代子
俊男
美喜
忠宏
和樹
四三郎
みつこ
晋
漢沓
絢子
庸佑

うかつにも彼のスマイル真に受ける
取っておきのスマイル彼にだけ見せる
辞める気で言った啖呵が気に入られ
縁を切る男へ胸の透く啖呵
ドスがきく啖呵やつぱり河内弁
花手桶尽くし足りない詫びを言う

川柳ねやがわ

江口

気まぐれに肩は叩いてない社連
親しみをこめて叩いて睨まれる
握手したその手で今日は肩叩き
少年に肩叩かれる恐くなる
おだやかな人柄に惚れ叩く門
ライバルを叩けば直ぐにコタマする
老刑事ボーズの裏のうら睨む
ふり向けば影もボーズをしています
落選のボーズは用意してなんだ
用意してくれたボーズかと思ひ込み
右へならすのボーズわたしに影がない
力強いボーズ阿吽の仁王像
ガッツボーズ好きで徹夜をしています
利殖術裏目の傷がまた癒えぬ
図らずも裏目チャンスはきつとくる
土壇場で腹心までが裏返る
裏目に出たブランを拾う神もある
毛が抜けるたびに淋しくなつてゆく
毛が立つて舌がもつれた恐かった
人形の毛伸びる話も夏の夜
平成の胸毛こっそり刺っている

一 壺
辰子
洞庵
泰子
度報
英壬子
あやめ
光子
亜成
ルイ子
勇太朗
一途
博泉
文秋
惠子
雅文
かすみ
高栄
冬葉
一風
時弘
朝子
とし子
順三
たもつ

一本の毛が喋り出す顕微鏡
派手でない花が大きな実を結び
新妻に止まる蜜が情をそる
再会へわたしの今をそのままだに
まんじゅうに酒に茶の間も右派と左派
迫力のない阪神で酒が要る
冷房の効くのが遅い議長席
水絶えぬ噴水みている老い二人
この暑さタリの時計ももうずける

いずも川柳会

園山多賀子報

人さまのお世話も親がしたように
世話好きが世話されている老人ホーム
外面の良い世話やきに困り果て
世話好きがお隣にいて良し悪し
父さんを光らせ事が丸く済み
嫁さんが光って姑さんが浮いた
車椅子押して光の中にいる
七光りだけでは翔べぬ新世紀
漁火の光に亡父が今も居る
生きてきた深さに光るお人柄
全力で負けた選手の汗光る
敗者にも光があつた甲子園
幸せだった頃の写真がかけてある
幸せをこんもり盛つた四季の皿
平凡で元氣幸せだと思つ
身の程の幸せでいい目の高さ
幸せが逃げないように口を閉じ

庸佑
洋
波留吉
吉之助
小 路
三 郎
黎之助
度
正 朗
蘭 水
芙佐子
しま子
芳 子
草 丘
篤 子
ちかし
ヤス子
寿 美
久 子
あきら
義 弘
文 子
多賀子
清 子
ひろし
昭 二

健康なだけで幸せ感じてる
幸せが今煮えている焦げている
さびしくて空一杯に愛と書く
夫婦茶碗欠けても愛は変らない
心配はないかと電話くれる愛
座りだ一寸針すつの母の愛
花愛す人友達が増えていく
一言を控え余生を香らせて
花が散る風をつるんだ香を残し
潮の香が満ちて湖面が暮れなむ
お茶室にはのかに香る百合の花
爽やかにロマンの香る古都の森

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

出世払い優しい人がいたそうな
うかうかと優しい風にだまされて
マラソンを見ているだけで肩がこり
走っても走っても後輪追いつけぬ
優しさを押売りしてます朝帰り
青信号みんなが走るから走る
朝顔に紫の色極まれり
ダムにのつる村のつじも花盛り
山門のつじ汚れを忘れさせ
旅人を優しく見送るネギ坊主

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

頑張りには運があつと押す神もおす
わがままを言える家族が居てくれる
見つめられ狼狽えた頃もあつたつけ
江 美
鈴

明子
れいじ
章 峰
きみえ
町 紅
まこと
陽 子
芳 枝
青 湖
義 良
満 江
茂 美

エブロン胸のドーンと主婦が在り
垣根越し今朝は朝顔十も咲く
なつかしい顔が揃つて盆がくる
組が乾いてしまひ風邪三日
ありそつな話コーヒー飲みながら
運命線薄い男もジャンボくじ
済んでから父の目思い出してくれ
原爆を語る皆も老いている
新聞を抜けて爪を切っている
新聞をひろげ世紀へ先駆ける
努力には触れず運だと他人は言う
チャップリンの靴ひきすつ二度の職
幸せは丈夫な足で暮参り
幸せは見飽きた顔の夫婦仲
幸せの追い風が吹け八十路坂
幸せは郵便受けに來た便り

川柳塔おとり

上田

俊路報

ハツエ まさ 美智子 六浦 澄子 勇次郎 石舟 昌太 鹿太 弘治 正治 向西 満寿蔵 夢之助 紫香 宏章 登美 艶子 孝子 銀嶺 伝住 佳子 崇花 風花 由多香 幸次郎

良心に恥じた答が揺れている
師の手紙胸躍らせて拝み読む
拝まれて嫁に來たのが間違ひだ
神拝む受験ハチマキシめなおし
給料を母は拝んで封を切る
野狐も狸も月を拝むだろ
金ばかや拝むさみしなと思つ
人情が乾かぬよに拝んどく
原爆碑拝み核絶賛い合ひ
太陽を拝んで今日の氣を貰う
宗教は無いが心の神拝む

翠洋会

柴田英壬子報

舎人 敬之介 道子 小生 せつ子 千秋 真一 雄々 黙光 清光 俊路 喜美子 東雲 会美 楓楽 千枝子 綾子 千蛙 源一 正坊 久峰 千梢 ひろ子 光子 靖巳 佳秋

初めから時代おくれの夫婦です
教師より生徒がえらい時代です
手の平にこんなきれいな海がある
甘えべた四角く生きて肩のこる
生きるべし時代の風を受け流す
不知火の海ムツゴロウ潮からびる
うず潮も恋もた今満潮期
これ以上脱がない暑さ蟬しぐれ
演歌では海峡いつも霧か雪
絵日記の海水浴につれ出され
灰色の青春時代を語り継ぐ
汚染した海灰色のクレヨン画
バイキングつい欲呆けて食べ残し
夏も逝き波の音聞く海の家

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

義 照子 宣司 蕉子 希久子 英壬子 さと美 志華子 正雄 絹子 凡子 石舟 叡子 恭昌 道子 良子 見早子 羊子 政勝 明玄 ふみ 亜希子 ちよ路 和可 潮華 八重子 サト子

熱が出て母の看護をなつかしむ

もう一度焦がしてみたいこの心

いち抜けたそんな遊びも影ひそめ

カチワリの声もかき消す応援歌

一球を追って球児の熱い夏

調教の熱意がイルカショーを見せ

熱線の影まだ消えぬ原爆忌

白球が熱く母校を語らせる

手抜きするコツを教えて嫁がせる

抜け駆けをどうしてしない蟻の列

特上のサビ抜きと孫きめて来る

誤解だった薬人形の釘を抜く

だし抜けにきかれおろおろ襦袢ぼろり

胸深く抜けない刺を一つ持ち

逢いに行く時は指輪を抜いておく

サークル檸檬

小林

一夫報

金平糖天の河からこぼれ落つ

星々を訪ねる旅にいつか行く

一本杉は星の話を聞いている

流れ星いつか私もあのように

朝のベアコン焼けるかなたにヒロシマ

ピアノきこえる坂道をのぼる

人を刺す言葉ばかりよ風の街

黒柿の笑顔哀しき倍になる

残り時間を推しはかるなり蟬の声

あの星をあなたと思うことにする

真夏日やさりげなく打つ句読点

ある日ぽつと消えたい何も残さずに

倉吉川柳会

谷口

次男報

新婚のルーム楽しい春のいろ

逃げて来た証だ部屋が出られない

月下美人が咲くまでルーム不夜城だ

熱き恋ルームミラーに盗まれる

旅まで宿の部屋割り気にかかる

四畳半喧嘩するにはせま過ぎる

お局さまのルームに花が枯れている

若い娘のルームを狙う痴漢族

人を斬る話ルームが冷えてくる

鍵をかけた部屋で火薬を混ぜている

この部屋の中のお方は皆ほとけ

初めてのルビー夫のプレゼント

ルビー嵌め田んぼに立つたお嫁さん

袋かけ梨にルビーは似合わない

女系三代ルビーは家風知りつくし

ルビーして失楽園のドラマ見る

不動さんにはルビーの目玉よく似合う

出馬するときは親類面に来る

親類が義理で集まる七回忌

ルンレンの時も何度かありました

離婚してルンレンひとり旅に出る

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

魂がうち砕かれた敗戦日

元祖なら商魂込めた出来ばえだ

人生を五分の魂で乗り切りぬ

魂がいつばい宿る千羽鶴

核の悲劇 魂未だ風化せず

手話の子の笑顔に乾き癒やされる

しなやかに焼香 遺産知っている

しなやかな肢体若さを撒きちらす

しなやかに妻が握っている手綱

しなやかに恋が弾ける夏の海

しなやかな腕でけっこうひったく

自転車荷台で夫信じきる

並んでる店にやっぱり並んでる

老い二人孫の帰省に聞く新語

いっぱいハガキに書いた甲虫

堺川柳会

河内

月子報

化粧水叩いて顔に喝を入れ

月からの使者かも知れぬポストマン

現役で散って豪華な野辺送り

スコアが下だと血圧上がりだす

昼の月他人のコント見てしまい

振り出しに戻るえつちらおつちらと

見てほしいそっとしてほし寺の花

アルバイトしながら生きる道さがす

切符一枚ひっくり返す大カバン

銘水でひとりぼっちの茶をいれる

まだ泣ける涙があつて生きている

月の出を三階建てにいきすされ

かやく飯母の模様に炊きあがる

につこりの妻恐ろしい空模様

あやまれば許されそうな春の月

お月さん三池炭鉱閉めました

きく子

落児

しげお

柳宏子

正坊

明光

寿美子

石舟

登代子

知香子

紫香

冬虹

泰子

健吾

哲平

勇太

美代子

りつえ

昭子

みつこ

扶美代

文

満子

こころ

楓

小雪

東雲

枯枝と見せかけ炎抱いている

価値観が全く逆で仲がよい

満月は新じゃがりつるりむけたよう

叩かれた教師とりわけなつかしい

千本のバラに抱かれた日の柩

天空に任せきつる砂模様

豪華さはやっぱり阪神巨人戦

手造りの豪華は厚い玉子焼き

その裏は決して見せぬ月の意地

祝い鯛豪華な赤を食べつくす

花模様が歩く成人式らしい

くたびれた靴と靴の勤続賞

病夫は居す茶碗も箸も寂しいね

本籍は月にありますかくや姫

ローズ川柳会

山崎

君子報

虫喰いのリングの味も故郷自慢

そこそこに生きて鬼にもなりきれず

喧嘩してチラと本音をのぞかせる

口喧嘩だけで持ったね五十年

納得のゆかぬボタンを押し続け

岐路に立ち選んだ道は行き止まり

喧嘩して仲良くなった友の味

甲子園つただけ残り夏終わる

喧嘩相手が呆けてそれから呆け初め

幼馴染みのけんかは他愛なく解ける

失った時間が惜しい流行歌

生きてゆく駄馬の哲学口閉じる

口喧嘩しても手出さぬ兄の性

春蘭

梓

八千代

頂留子

森子

アキ

二南

半銭

鐘造

千代

妻子

寿恵子

寿美

彰

てる

ミサヲ

みつ子

藍

哲子

トミエ

貴代子

まさお

武庫坊

年代

雅子

はつ絵

民平

疳の虫暴走族に起される
怒ったら負けと教える腹の虫

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

わたくしの朱を奪い取る秋の秋

秋盛った皿が笑顔を決やさない

一房の葡萄と狂う秋がある

マロボ豆腐べつとり情け絡ませる

冷奴あればご機嫌父の酒

手のひらでチョンチョンチョンと冷奴

冷奴にしよつとおんな譲らない

思いやりとも手抜きとも冷奴

ぬり箸とそりのあわない冷奴

全員であて冷奴一致する

豆腐やのラッパが旅の空にある

ため息もいろいろあつて男運

ため息のつく高級車に美人乗せ

ほんとつのため息五人の米がない

ため息の絶えた辺りに処方箋

ため息を吐きたい過疎の鬼瓦

姑はため息わざとらしく吐く

いいなため息坂口靖子のため息は

年頃のため息そつとおこつ

孫たちに無言の教養慕洗つ

先祖さま許せベントになる田畑

十年先わたしが先祖になつてゐる

先祖の地高く売れたの黙つとく

島おさの子孫で島が捨てられず

ご立派な先祖で子孫苦勞する

君子

笑女

森子

欣之

元紀

とし子

とみを

頂留子

泰

柳宏子

宏

隆盛

弘直

柳伸

東雲

美幸

年人

洋

祥一

昭二

度

恒明

治也

シマ子

三男

一風

八寿子

活断層しらずに先祖建てた家
田を売る話先祖の位牌横向ける
心配が見事に効いたダイエツト
心配を打ち消しながら百度踏む
心配が眉間の皺にうつずくまる

ますみ
たもつ
剛治
賢子
朝子

第18回

川柳塔鹿野みか月川柳大会

とき 11月16日(日)午前9時開場

ところ 鹿野町営国民宿舎「山紫苑」

(JR浜村駅下車バス15分)

講演 「川柳と笑い」 大西 泰世氏

第一部(出席者のみ) 出句締切11時30分

「楽」 橘高 薫風選

「箱」 金築 雨学選

「胆」 寺尾百合子選

「傘」 八木 千代選

「株」 竹治ちかし選

「線」 高田 羅奈選

第二部(出席・欠席投句者) 10月25日締切

「季節」 森中恵美子選

「つくる」 小林由多香選

「雑詠」(一句のみ) 中原 颯人選

○雑詠を除き一部二部とも各題一句

会費 出席者二千元(作品集・軽食呈)

欠席投句者千円(作品集呈)

投句先 689-04鳥取県気高郡鹿野町鹿野三三三

中原颯人方第18回川柳大会実行委員会

久家前会長一周忌 追悼川柳大会

と き 10月12日(日) 午前10時開場

ところ 出雲市高松公民館

兼題と選者(各題2句・午前11時半締切)

「久」	高杉 鬼遊 選
「家」	小林 由多香 選
「代」	西口 いわゑ 選
「仕」	恒松 町紅 選
「男」	尼 れいじ 選

席 題 ありません

会 費 4000円(発表誌・記念品・昼食
遺句集・追悼小宴会)

欠席投句 投句料800円を添え、9月30日
までに下記へ

〒693 出雲市松寄下町284

吉岡 きみえ

主 催 いずも川柳会

第24回堺まつり協賛 堺市民川柳の会

と き 10月4日(土) 午前10時半開場

ところ 堺市総合福祉会館

おはなし「南海沿線」 八十田 洞庵氏

宿題と選者(各題2句・午後0時半締切)

「指」	川上 大輪 選
「無」	池 森子 選
「坂」	阪本 高士 選
「ふたり」	門谷 たず子 選
「立場」	長江 時子 選
「おんな」	福井 桂香 選
「好き」	塩谷 幸子 選
「押す」	河内 天笑 選

会 費 1500円(軽食・作品集呈)

賞 各題秀句賞

連絡先 堺川柳会

西宮文化祭協賛 西宮市川柳大会

と き 10月19日(日) 正午開場

ところ 西宮市立勤労会館4F8号室

(阪神西宮東口・JR西宮駅下車)

宿題と選者(各題2句・午後1時半締切)

「園芸一切」	大畑 アキオ 選
「虫」	長縄 嘉代子 選
「乱れる」	西口 いわゑ 選
「会計」	荻田 勝紀 選
「我流」	石井 冬魚 選
「したたか」	福島 直球 選

会 費 1000円(作品集郵送)

投 句 10月10日までに80円切手7枚を
同封、12句連記して下記へ

〒662 西宮市城山12-8 水無瀬富久恵

主 催 西宮北口川柳会 ほか

東大阪市文化祭参加 東大阪市民川柳大会

と き 10月12日(日) 午後1時開場

ところ 東大阪市立社会教育センター

3F(近鉄布施駅北へ5分)

ビデオ放映「私たちの東大阪」「暗峠」

宿題と選者(各題2句・午後2時締切)

「秋」	中山 治也 選
「晩年」	阿 萬 萬 的 選
「触れる」	板野 美子 選
「女ごころ百態」	岩内 外吉 選
「難儀」	清水 斗升 選
「恋」	河内 天笑 選
「魂」	田中 新一 選

会 費 1000円(記念品・発表誌呈)

懇親宴 3000円(当日受付)

主 催 東大阪市文化連盟
東大阪市民川柳同好会

第 20 回 寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日(祝) 正午開場

ところ 寝屋川市立総合センター 4 F

(京阪寝屋川市駅からバス西①乗場)

兼題と選者(各題2句・午後2時締切)

「歴 史」	柴田 英壬子 選
「煙」	板尾 岳人 選
「持ち味」	塩谷 幸子 選
「盲点」	山本 礫 選
「異」	住田 英比古 選
「大臣」	橘 高 薫 風 選

会 費 1000円(作品集・記念品呈)

賞 各題秀句に賞状・記念品

主 催 寝屋川市川柳協会

後 援 寝屋川市文化連盟
川柳ねやがわ

岸和田市文化祭参加 岸和田市民川柳大会

と き 10月19日(日) 正午開場

ところ 岸和田市民会館地下会議室

おはなし「川柳あれこれ」 芳地 狸村

兼題と選者(各題2句・午後1時半締切)

「年頃」	福本 英子 選
「笑う」	高須賀 金太 選
「化粧」	奥田 みつ子 選
「表紙」	梶川 雄次郎 選
「評判」	阿 萬 萬 的 選
「急所」	西田 柳宏子 選

会 費 1500円(参加賞・軽食)

賞 文化祭賞・文化祭奨励賞ほか

主 催 岸 和 田 市
岸和田市教育委員会

第44回 文化芸術・芸能祭 八尾市川柳大会

と き 11月3日(祝) 正午開場

ところ 八尾文化会館 4 F 第1会議室

(近鉄八尾駅下車)

宿題と選者(各題2句・午後1時締切)

「光」	阪本 高士 選
「波」	大森 一甲 選
「貝」	片岡 湖風 選
「健康」	宮崎 シマ子 選
「兄」	泉 比呂史 選
「酒」	宮口 笛生 選
「運」	大 路 美 幸 選

会 費 2000円(鉢植花・軽食)

懇親宴 3500円(当日受付)

主 催 八 尾 市・八尾市教育委員会
八尾市文化芸術・芸能祭実行委員会

後 援 八 尾 市 民 川 柳 会
川柳クラブ「わたの花」

吹田川柳会 30周年記念川柳大会

と き 10月26日(日) 午前11時開場

ところ 吹田市文化会館メシアター3F

(阪急吹田駅西口前)

おはなし「川柳百話」 高杉 鬼遊氏

宿題と選者(各題2句・午後1時締切)

「女」	池 森子 選
「考える」	波部 白洋 選
「腹」	片岡 湖風 選
「つなぐ」	奥田 みつ子 選
「明日」	梶川 雄次郎 選

席 題 1題当日発表 川島 諷云児 選

会 費 1000円(参加賞・秀吟賞呈)

懇親会 4000円

主 催 吹 田 市 教 育 委 員 会
吹田市文化団体協議会
吹 田 川 柳 会

うめだ番傘50年 田頭良子句集発刊 川柳大会

と き 11月24日(振休)午前11時半開場

ところ 三井アーバンホテル

大阪ベイタワー4F

事前投句 (ハガキで2句・11月7日締切)

宿 題 「オアシス」 萩原 金之助 選
「いたずら」 住田 英比古 選
「火 花」 窪 田 和 子 選
「 純 」 庄司 登美子 選
「作 る」 松岡 十四彦 選
「会 釈」 定 本 広 文 選
「満 足」 河 内 天 笑 選
「傾 く」 森中 恵美子 選

締 切 午後1時(各題2句)

会 費 3000円(記念品・句集・軽食呈)

惣親宴 7000円(申込み制)

主 催 うめだ番傘川柳会

枚方市文化祭協賛 枚方市民川柳大会

と き 10月26日(日)午後1時開場

ところ 枚方市立枚方公園青少年センター3F(京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分)

お 話 中馬 田鶴子 氏
宿 題 「漢 字」 住田 英比古 選
「字 宙」 青 木 勇 三 選
「鳴 る」 瀬 川 幸 子 選
「冗 談」 内 藤 光 枝 選
「 窓 」 瓢 呑 舟 選
「プ ロ」 前 田 咲 二 選

席題なし 各題2句・午後2時締切

参加費 500円(発表誌呈)

賞 市長賞・市教育委員長賞
市議会議長賞ほか

主 催 枚方くらわんか川柳会

後 援 枚方市・枚方市教育委員会

豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝)正午開場

ところ 豊中市立中央公民館1Fホール
(阪急宝塚線曾根駅東100m)

会 費 1500円(軽食・記念品・発表誌)

お 話 三 好 聖 水 氏

席 題 「当日発表」 岡 良 三 選

宿 題 「 恩 」 河 内 天 笑 選

「 答 」 阪 本 高 士 選

「 紙 」 塩 谷 幸 子 選

「 友 」 田 中 喜 代 志 選

「 胸 」 長 江 時 子 選

「 魚 」 波 部 白 洋 選

締 切 午後1時(各題2句)

賞 豊中市長賞ほか各題に賞進呈

主 催 豊 中 川 柳 会
豊中市立中央公民館

第47回 富田林市民川柳大会

と き 11月2日(日)午後零時半開場

ところ 富田林市中央公民館2F
(近鉄富田林駅南出口から歩3分)

兼題と選者(各題2句・午後1時半締切)

「 砂 」 宮 西 弥 生 選

「 踏 む 」 海 堀 酔 月 選

「 梢 」 板 野 美 子 選

「 柱 」 後 藤 正 一 選

「 舞 う 」 吉 岡 美 房 選

「 笛 」 宮 口 笛 生 選

会 費 1000円(作品集呈)

懇親宴 3000円

主 催 富田林市教育委員会

後 援 富 柳 会

柳界展望

★第5回風のまち川柳大賞の受賞作品が決定した。

〈大賞〉

茄子の馬風がふわりと来て座る 藤澤 三春

〈準賞〉

北風を風景にする類かぶり 片寄 正男
出生届長男と書く風の中 佐藤 季穎

★野谷竹路氏（川柳研究社副幹事長）は、故榎本聡夢氏の後任として日本ベンクラブ会長に就任した。

★伊予市立図書館川柳コー

ナー開設記念川柳誌上大会の入選作品がこのほど発表されたが、本社同人の青枝鉄治氏（和歌山）が伊予市文化協会長賞を受賞した。

コスモスに埋もれて眠る一揆の碑

★全国鉄道人川柳連盟は、第34回年度賞の1位に佐藤曙光氏を決定した。

★平成8年度周魚賞の受賞作品が次のとおり決った。

輪が丸いきつと誰かが耐えている 小金沢綾子

ただ逢者だけをみんなに羨まれ 田中 利子

★第28回川上三太郎賞の受賞者が決定した。本賞は、

渡辺梢さん、準賞は高橋双葉・河内沙智子の両氏

★本社相談役・西宮北口川柳会会長黒川紫香氏は、九十歳を越え社会に貢献した特別功労者として九月九日兵庫県公館で知事から表彰された。

★山口県産業廃棄物協会が募集した「環境川柳」には全国から三八七人が応募、本社同人の次の2氏が天位句に入賞した。

包装の一枚ずつが森を剥ぐ 住谷 石舟

満潮に昨日のゴミが舞い戻る 川島風云児

★平成8年度川柳塔みちの

く大賞がこのほど決定した川のをを書けぬ二人になり候 相馬 一花

準優秀作は次のとおり

①粗板にストレス載せて微塵切り 西谷 大吾

②一匹の蠅が夫婦といふ時 田中 叶

③櫛の歯の脆さか住所録に雨 相馬 銀波

★第21回茗人賞川柳大会は8月24日、鳥取市の白兎会館で開かれた。当日の各題秀句は次のとおり。

一つずつ欠けて最後の金魚鉢 八木 千代

湖のお陰でずいぶん倅せになる 中原 颯人

姑と言ふ言葉へ少しずつ馴れる 小林由多香

五玉玉の穴から見えるの

は妻よ 小島 蘭幸

ゆつくりと眠るに丁度いい壺だ 野口 節子

離農した日から農夫の爪が割れ 両川 洋々

万策が尽きた逆立ちでもしよう 河内 天笑

★第7回「太平記の里」全

国川柳大会は、12月7日、群馬県太田市社会教育センターで開かれる。当日参加

の第1部と郵送参加の第2部とがあるが、第2部の要項次のとおり。宿題は1題で「磨く」、選者は橋高薫風・磯野いさむ氏ら10名の共選。参加費は1000円、

賞は合点30位まで入選句入り盾を贈呈。応募方法は新作2句を指定用紙に書き、

10月31日までに〒373 太田

市飯田町818の太田市文化振興事業団内・全国川柳大会実行委員会へ

★全日本川柳協会の平成10年度以降の年度大会の開催

県が内定した。平成10年は山口県、同11年は秋田県、

同12年（2000年）は東京都、同13年は鹿児島県、

同14年は富山県

★全日本川柳協会は今年度の出版事業として「全日本柳人写真名鑑」平成10年版を刊行する。同名鑑には全

国柳人の①姓・柳号②本名

③生年月日④職業⑤所属柳社⑥住所⑦電話番号⑧自選

作品⑨顔写真を掲載する。参加費は4000円で、締切は11月15日、刊行は平成10年3月の予定

▼訂正▲

■9月号P92下段・新同人紹介の2人目「松山まみ子」↓「板山まみ子」▽P99下段4行目「稲妻に堅穴住居跡」↓「稲妻に堅穴住居跡」▽表③（裏表紙裏）本社句会の日時

「9月7日（日）」↓「9月8日（月）」

10月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	3日(金)午後1時から 心・吐く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
堺川柳会	4日(土)午前10時半から 堺市民川柳の会	堺市総合福祉会館 本号P113参照 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
高槻川柳 サークル 卯の花	9日(木) 正午から 迷惑・やれやれ・悲しい・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川柳塔 まつえ	11日(土)午後1時から 食卓・歯・支える	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
東大阪市 川柳同好会	12日(日)午後1時から 東大阪市民川柳大会	東大阪市立社会教育センター 本号P113参照 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 門・ひとり・狂う	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	12日(日)午後6時から 待つ・枕・未練・のぞく	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から 他人・切る・長い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳同好会	14日(火)午後1時から 呼ぶ・積む・しばらく	豊中市立蛍池公民館 阪急宝塚線蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町3-10-28 井上直次
南大阪 川柳会	17日(金)午後6時から 豪快・故意・降参・公然	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
岸和田 川柳会	19日(日) 正午から 岸和田市民川柳大会	岸和田市民会館地下会議室 本号P114参照 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	19日(日) 正午から 区切り・故障・不倫・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	21日(火)午後1時から 壺・うとうと・マイナス・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富柳会	23日(木)午後1時から 庭・だから・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
京都 塔の会	24日(金)午後1時から 姿・恵み・女神	ハートピア京都 地下鉄九条駅南改札東出口すぐ 〒600 京都市下京区葺町通松原下弁財門町 都倉求芽
はびきの 市川柳会	26日(日)午後1時から 舐める・がたがた・ボーイ・「新調」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0744-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★この十月、スペインへ行くことと想っている。これを書いている時点ではかなり先なので、体調などのこともあり、実現する保証はないが、おそらくこの旅が私にとつては最後の長いツアーになると思っているので、後戻りしないためにも書いておきたい。

★私はこれまでにフランス・イタリア・イギリス・ロシアをはじめヨーロッパの多くの国々を訪れたが、スペインには行く機会がなかった。そこで今回は、あちこちと何か国も回るのはなく、一国だけじっくり見て歩きたいと考えている。

★ところでこのスペインという国、古都トレドなど数か所の世界文化遺産はあるが、これと言つて見るべき

ものはないようだ。しかし世界各地を旅した中村光夫は、「もつ一度ひとつの国だけに行くならどこにする」と言われると、スペインです」と述べている。その秘密をさぐってみたい。

★そして作家の堀田善衛には、『スペイン430日』という著書がある。一九七七年から翌年にかけて北スペインの小さな村に住み、各地を旅した滞在日記である。ここでは、ヨーロッパの辺境にあつて、ローマとアラブの血のまじつた人たちの特異な文化と生活を描いていて興味が尽きない。

★実は私は、スペインで一つだけ見たいものがある。これまでに日本人が踊るフラメンコを見て、インパクトのある動きに魅せられたことがあるが、それを本場で本物に触れたい。つい本音が出てしまった。(正)

ひとこと

虫好きの歩くん

孫三人とも虫好きである。真ん中の歩くんは輪をかけた虫好きである。歩くんらが来ると、菜園の青虫やチョウ、コガネムシ、テントウムシ、ミミズ、ナメクジを捕まえては観察して遊ぶのが、楽しみの一つになっている。

六月の日曜日、園参観のあと、家族五人でジャガイモ掘りとミミズ捕りに来た。ミミズは園のマス

(朝日新聞「声」欄から要約転載)

○近所の文房具屋さんで、新聞や雑誌のコピーをしに来られる、七十年代とおぼしき男性に時々出会う。聞くところによると映画が趣味で、関係資料をコピーして、整理しておられるのだそうだ。その方は父祖代々の郷里の住いを処分し、映画鑑賞に便利な都心のマンションに引越して来られたとのこと。何と心豊かで潔い生き方だろうと感心した。

○柳人の中にも何人が居られるが、件の男性とは反対に、定年後郷里に帰られる場合もある。誌上で句を拝見したり、大会でお目にかかる、皆さん充実した日々を過しておられる様子うかがえる。そのたびに向井潤吉の風景画が彷彿と浮かび、晴耕雨読もいいなあとあこがれてしまう。

○もちろん、都会と田園のどちらにも一長一短ある。コット、アヒルのガーちゃんのえさにするためだ。わらを除くと元氣よく跳びはねるミミズを歩くんは両手でつかみ大満足したようだ。歩くんと大根菜を引いていたらナメクジを見つけ、「ナメクジに目があるね。三歳児の発見に私はびっくりさせられた。そして「ナメクジを葉っぱに逃がしてやろう」と言つたとき、子どもの優しさに感心させられた。前 たもつ

○普段は便利な都会で生活し、あちこちの句会へ出席、暇な時は山や海辺の別荘で作句三昧——というのは秋風に誘われて、まどろんだひと時の夢だった。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（12月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

作品募集

課題吟 (3句) 「求める」 「放す」 「屋根」
初歩教室 「心」 (3句) 吐田公一担当
荳香の花 (3句) 岸野あやめ 選
澎湖抄 (3句) 宮西弥生 選
水煙抄 (8句) 西木千代 選
川柳塔 (8句) 橋高薫風 選

12月号発表 (10月15日締切)

1月号
課題吟 「初」「光」「なじむ」
初歩教室 「動く」

大阪文化祭川柳大会

とき 11月29日 (土) 午前11時開場
ところ 大阪市中央公会堂
兼題と選者 (各題2句・午後零時半締切)
 「城」 久保田半蔵門 選
 「他人」 前田美巳代 選
 「時事雑詠」 柏原幻四郎 選
 「外野」 中尾飛鳥 選
 「海」 波部白洋 選
 「風」 板尾岳人 選
席題 当日2題発表します
会費 1000円 (作品集代含む)
賞 各主催者名で「川柳賞」贈呈
主催 大阪府・大阪府教育委員会
 大阪市・大阪市教育委員会

本社11月句会 7日 (金) 予定

兼題 「早い」「ばらばら」「吠える」
 「柔かい」「紅葉」

夜市川柳募集

第5回「迷い」 柏原幻四郎 選
 ハガキに3句 10月末締切
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題 「大きい」 河内天笑 選
 ハガキに3句 10月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
 「文芸部」川柳係
発表 10月25日 (土) 午前11時5分
 からラジオ第1放送 (予定)

〒545

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番
 電話 (〇五五) 六九一四番
川柳塔社

発行所
 大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

編集兼
 発行人
 印刷所
 美研アー
 橋高薫

平成九年十月一日発行

半年分 四千元 (送料共)

一年分 七千九百元 (同)

定価 六百元 (送料76円)

「川柳塔」への投句について

①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限ります。

②澎湖抄・荳香の花欄および一路集 (課題吟) への投句は、同人・誌友に限ります。ただし荳香の花欄は女性だけ。

③各欄への投句は、必ず氏名と住所 (県・市名) を明記してください。

全日本柳人写真名鑑

日川協では昭和55年・同60年の二回にわたって、『日本川柳人名鑑』を刊行、さらに社団法人設立を記念して平成5年、書名・体裁・内容を新たにし、全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を発刊、好評を博しました。今回はそれから5年目にあたり、さらに一段と充実した平成10年版を刊行したいと存じます。みなさま方には一人残らず、この名鑑に名をつらねられるよう、お勧めいたします。

資格 参加は柳人であればどなたでも結構です。

内容 各人ごとに、①氏名(柳号)②生年月日

③職業④所属柳社⑤住所⑥電話番号⑦顔写真

⑧自薦作品3句(所定用紙があります)を掲載

体裁 A5判・本文アート紙500頁・美装本

刊行 平成10年3月予定(参加者に1冊送付)

参加費 4000円(申込時にご納入ください)

締切 平成9年11月15日(土) 厳守

申込先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11-702

社団法人 全日本柳協会

電話(06) 352-2210



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”

バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 941-9631